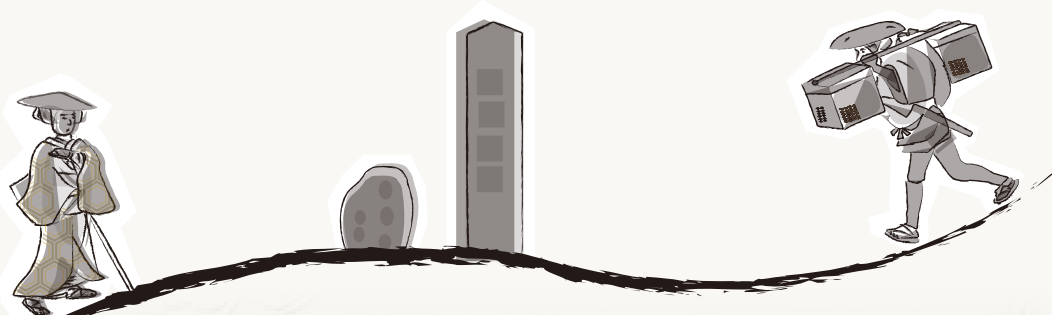


近世若狭の

交通と往来

～道、旅、道標～



2020

美浜町教育委員会

例言

1. 本書は、美浜町教育委員会が福井ライフ・アカデミー（福井県生涯学習センター）と共催し、以下のとおり実施した美浜町歴史フォーラムの記録集（講演録）です。

令和元年度美浜町歴史フォーラム「みはま、近世の交通と往来 ～道、旅、道標～」

令和元年12月8日（日） 会場・美浜町歴史文化館

趣旨説明「若狭の道、旅、道標」	美浜町教育委員会	歴史文化館	学芸員	松葉竜司氏	
フォーラムⅠ「若狭の交通と地域性」	福井大学	教育学部	教授	門井直哉氏	
フォーラムⅡ「旅の記録にみる江戸時代の若狭」	滋賀大学	経済学部	教授	青柳周一氏	
フォーラムⅢ「道しるべや道中記にみる若狭路」	舞鶴市郷土資料館	学芸員		小室智子氏	
フォーラムⅣ「若狭と近江をつなぐ道」	高島市教育委員会	文化財課	主監	山本晃子氏	
座談「みはま、近世の交通と往来 ～道、旅、道標～」					
	進行	美浜町教育委員会	歴史文化館	学芸員	松葉竜司氏
				パネリスト	上記の講師

2. 歴史フォーラムの講演・座談内容の活字化は、当日の録音記録をもとに神戸総合速記株式会社が行いました。

本書全体の内容、文章表現を調整するためにパネリスト（著者）が必要に応じて加筆修正し、松葉が最終的な調整をしています。このため、本書の内容と歴史フォーラムの内容とは同一ではないことをあらかじめお断りします。

3. 本書には、資料として「若狭地方における道標一覧」を、史料翻刻として「若狭を通過する道中記・順礼旅日記等」を収録しました。
4. 日常的な生活空間を離れ、宗教の聖地や聖域などを巡る行為を一般に「巡礼、順礼」といいます。本書では固有名詞を除き、原則、「順礼」に統一しています。
5. 本書の編集は、講演者（著者）等の指導、助言のもと、松葉が行いました。
6. 歴史フォーラムの実施から本書の刊行まで次の関係機関各位のご支援、ご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。（敬称略）

おおい町立郷土史料館、小浜市教育委員会（文化課）、岡山大学附属図書館、滋賀県立図書館、信州大学附属図書館、高島市教育委員会（文化財課）、敦賀市立博物館、舞鶴市教育委員会文化振興課、舞鶴市郷土資料館、福井ライフ・アカデミー、青柳周一、安倍義治、門井直哉、川嶋清人、川村俊彦、小室智子、坂東佳子、山本晃子

目次

例言・目次

問題提起「若狭の道、旅、道標」 1～8

美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員

松葉竜司

フォーラム I 「若狭の交通と地域性」 9～24

福井大学 教育学部 教授

門井直哉

フォーラム II 「旅の記録にみる江戸時代の若狭」 25～44

滋賀大学 経済学部 教授

青柳周一

フォーラム III 「道しるべや道中記にみる若狭路」 45～60

舞鶴市郷土資料館 学芸員

小室智子

フォーラム IV 「若狭と近江をつなぐ道」 61～69

高島市教育委員会 文化財課 主監

山本晃子

座談「近世若狭の交通と往来 ～道、旅、道標～」 71～84

進行 松葉竜司

パネリスト 小室智子、青柳周一、山本晃子、門井直哉

資料「嶺南地方における道標一覧」 85～94

史料翻刻「若狭を通過する道中記・順礼旅日記等」 95～114

図表・写真出典 115～117

パネリスト（著者）略歴

問題提起

若狭の道、旅、道標

美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員

松葉竜司

1. はじめに

美浜町歴史フォーラムで近世史を取り上げたのは、今回が初めての試みである。近年の順礼（巡礼）ブームや、令和元年（2019）5月、西国三十三所巡礼が日本遺産に認定されたことも相まって、近世以後の信仰に伴う交通や往来は私達の関心の一つであるが、改めて近世を中心とした若狭および周辺地域との交通、往来、移動を「道、旅、道標」といった視点から考える機会はこれまでになかったのではなかろうか。

平成31年（2019）4月、文化財保護法が改正された。大きな改正点の一つに文化財の保存活用に関して市町村が地域計画を定めることができることとなり、未指定文化財を含めた総合的な文化財の調査、保存活用を進めることが可能となったことにある。例えば、フォーラムでも取り上げた近世以後の道標は石造物であるゆえ、今日まで風雨に耐えながら人々の往来を見守ってきたものであるが、逆に普段、そのようなものに私達が触れる機会は少ない。注意して見なければ風景に溶け込み、見過ごしてしまうこともまた事実である。また、例え道標が石造物であっても設置されてから百年、二百年が経過したものも多く、屋外にある以上、常に劣化や盗難の危機にさらされている。一方で、先の文化財保護法改正はこのような近世以後の文化財であっても積極的な保存活用の対象とするものであり、歴史フォーラムの開催および本シンポジウム記録集で得られた学術的成果は、今後、美浜町や若狭地方でも進められていくと考えられる文化財保存活用地域計画の策定の一助になるものと期待される。

2. 近世若狭の道

（1）若狭周辺の近世街道（図1）

若狭周辺の近世街道と言えば、京から大原口を出て朽木や熊川を超えて小浜へと至る、鯖街道とも称される「若狭街道」がある。琵琶湖周辺には琵琶湖西岸を北上して敦賀へと至る「北国海道（西近江路）」と、海津から敦賀までの「七里半越え（七里半街道）」、塩津から敦賀までの「塩津街道」があり、琵琶湖東岸から敦賀の山間部を抜けて越前へと向かう「北国街道（東近江路、北陸道）」（長浜から木ノ本へと至る）や「北国脇往還」（美濃から木ノ本へと至る）などがあり、また若狭を横断する「丹後街道」や、若狭街道から分かれて保坂より今津へと至る「九里半越え（九里半街道）」などがある。

このような近世の街道には治安維持のため幕府や藩によって設置された多くの関所・番所があり、特に「入鉄砲」と「出女」が改められた。若狭国では蒜島、熊川、佐柿、粟柄の4か所が、越前国敦賀では刀根、足田、新保、大比田、新藤野の5か所に番所が設置された（瀬尾 2003）。近江国では若狭国境に山中、剣熊の2か所、越前国境に柳ヶ瀬の1か所などが設置されている。



図1 若狭周辺の近世街道と関所・番所位置図（縮尺不定、元図はカシミール3Dで作成）

（2）東西の道と番所

若狭を東西に横断する街道として丹後街道がある。若狭における東西の往来は古代、律令期の北陸道以前まで遡るものと考えられるが、明治時代以後も国鉄の敷設や国道（県道・郡道など）の敷設など若狭を横断する交通網は今日まで引き継がれているものであり、さらに現代では多くの地域で国道27号のみでなく、バイパス道路が造られて複線化している。防災道路としての機能があり、交通渋滞の緩和にもつながっている。

丹後街道は敦賀市と舞鶴市を結び、現在でも一部が国道27号と並走しながら往時の街道筋の名残りを留めている。西の高浜町に蒜島関が、東の美浜町には佐柿関があり、藩内の交通を取り締まった。佐柿関は『雲浜鑑』に「女留番所三坪半、木戸門柵有り」とあり、京極高次の代に設置され、佐柿奉行所の管理下にあり、その入口に所在したようで、番所には番人2人・小使1人が詰めていたことが知られている。明治初頭の『佐柿村絵図』には東西12間（約25m）、南北7間（約14m）の広さがあり、周囲に高さ三尺八寸（約1.2m）の土手と生垣を廻らせ、北側に木戸を構え、その内側に番所が設けられた様子が描かれている。明治元年（1868）、太政官令により廃止された。

（3）南北の道と番所

若狭へと至る南北の道として、京から大原口、朽木を抜けて保坂から熊川へと至る若狭街道があり、保坂・熊川間には滋賀県側の山中（大杉）と、福井県側の熊川、それぞれに番所が設置された。熊川は宿駅として栄え、江戸時代中期の享保8年（1723）7月には「関東巡礼多通り候」として7月24日から28日までの5日間に熊川宿の宿泊者数が1,400人弱であったことが『熊川宿御用日記』によって数え上げられている（田中2004）。朽木から保坂にて若狭街道と九里半越

えに分岐し、枝分かれした九里半越えの道は今津へと至る。現在、若狭町三宅と高島市今津を結ぶ国道 303 号は若狭街道と九里半越えのルートを踏襲している。

小浜市、南川に沿って南へと向かう周山街道は旧名田庄村を越え、丹波（現在の南丹市）、周山、亀岡、そして京へと至る。現在、国道 162 号がこのルートを踏襲している。

これ以外には、耳川に沿って美浜町新庄から旧マキノ村へと至る栗柄越え、高島越え、海津街道などといわれる街道があり、美浜町新庄に栗柄関が置かれ、若狭東部の南北の交通を取り締まった。

栗柄関は正保二年（1646）に美浜町新庄の栗柄の地に設置された。栗柄の住民、高木伝右衛門が小浜藩より米五俵の扶持を受け、代々、関守を務めたことが知られている。「新庄村絵図」には 3 軒の住居の南側の道の分岐点に、「御セキ」として木戸と柵で区画された関が表現されており、その内側は番所らしき建物 1 棟が描かれている。木戸は栗柄越えの道を塞ぐように表現されている。美浜町新庄在住であった小林一男氏のご教示によれば、栗柄の 5 軒の住居の端に番所の建物があり、山の神と呼ばれる神社や寺院も存在したという。現在、『新庄区有文書』には 5 通の女手形が残されており、栗柄関は主に「女留所」としてその任にあたったことがうかがえる。明治に入ると栗柄関は廃され、栗柄越えの陸路は木炭や早瀬周辺の高産物等の輸送路として使用されたが、明治 20 年（1887）には二州（敦賀市・三方郡）間の車道が整備され、同 30 年（1897）には栗柄から新庄松屋へと人が移り、栗柄が廃村したこともあり、以後、往来が少なくなった。

栗柄関に留まらず、特に江若間の南北交通を取り締まる番所は多く設置されており、西近江路の海津から敦賀へと至る七里半越えの道中には剣熊、疋田の番所が設置され、木の芽峠の手前には大比田、新保などの関が置かれた。また、琵琶湖東岸の北国街道では柳ヶ瀬に関が置かれている。木津、今津、海津、大浦、塩津など琵琶湖の北岸にはいくつもの湖津があり、京から北国へと向かう玄関口としてその交通、往来は重要視された。

3. 若狭をめぐる旅と移動

（1）若狭と西国三十三所順礼路

江戸時代は庶民が比較的自由に旅に出られるようになった。伊勢参宮（お陰参り）を始めとした社寺参詣が町人や一部の農民などにより行われるようになり、各地の都市や農村から数百万人の民衆が伊勢に殺到したとされる。このような旅は社寺参詣に留まらず、名所旧跡の見学、湯治、霊場登山、順礼などにつながっていった。特に江戸時代後半に入ると庶民にとって旅が身近なものとなり、特に文化・文政期（1804～1830）には空前の旅ブームとなり（池上 2002）、社寺参詣や名所旧跡をめぐる機会が増加した。

西国順礼、西国三十三所観音順礼とは、近畿地方一円を中心として第 1 番札所的那智山青岸渡寺から第 33 番札所の谷汲山華厳寺までを順礼するものである（図 2）。小浜藩の参勤交代は敦賀から塩津街道、柳ヶ瀬関を通過して北国街道を南下し、東海道から江戸に向かったことが知られる一方で、若狭を通る旅人には西国順礼者が多く、小浜以西の丹後街道と保坂までの若狭街道、そして九里半越えの道は、第 29 番の舞鶴市・青葉山松尾寺から第 30 番の高島市・巖金山竹生島宝厳寺へと至る西国順礼の道と重複するため、西国順礼にはこれらの街道が使われた。

松尾寺の山門から山道を西に向かうと高浜町小和田付近で丹後街道に出る。街道を東に向かえば日笠で丹後街道と若狭街道が分岐し、天徳寺、三宅、熊川と若狭街道を通れば、琵琶湖畔の木津や今津から最短で竹生島に渡ることができる。『高島郡誌』には安永年間（1772～1781）で年平

均 6,600 人が木津から竹生島に渡ったとあり、若狭の丹後街道や九里半街道が西国順礼の道としても利用され、多くの順礼者の往来があったことがうかがえる。なお、『享和元年西国巡礼旅日記（旧茗荷屋文書）』には今津から竹生島への渡船を利用したが、強風のため、結局、知内から海津、大浦へと船で移動し、ようやく竹生島に渡ることができたことが書かれており、竹生島への渡船の様子的一端を知ることができる（荒熊 2004）。

西国順礼に伴う旅日記、道中記にあたる史料は各地に現存しており、自治体史などで翻刻されているものも多い。記載内容は多彩で、旅の様子を知る上で興味深い史料も多いが、その中でも舞鶴市糸井文庫所蔵には多くの西国順礼関係の史料が伝わっており、特に『西国順礼略打道中記』は各地の名所旧跡が色彩豊かな挿絵として描かれていることが史料の重要性を際立たせている。例えば高浜町和田の集落や岩神様、小浜市の蒼島や男山八幡神社など今日まで残る若狭の名跡を江戸時代から訪れる人が多かったことを知ることができる。想定問答として熊川番所での順礼者と番人とのやり取りが生き生きと描かれていることも注目し得る。

（2）もう一つの順礼路

個人旧蔵・美浜町役場文書「女手形」には、早瀬浦の女性達が伊勢参宮のために栗柄関を通過したことが記載されている。美浜町早瀬から熊川に向かうより、栗柄関を通過した方が短い距離で移動することができ、栗柄越えの道も順礼路として使用されたことがわかる。

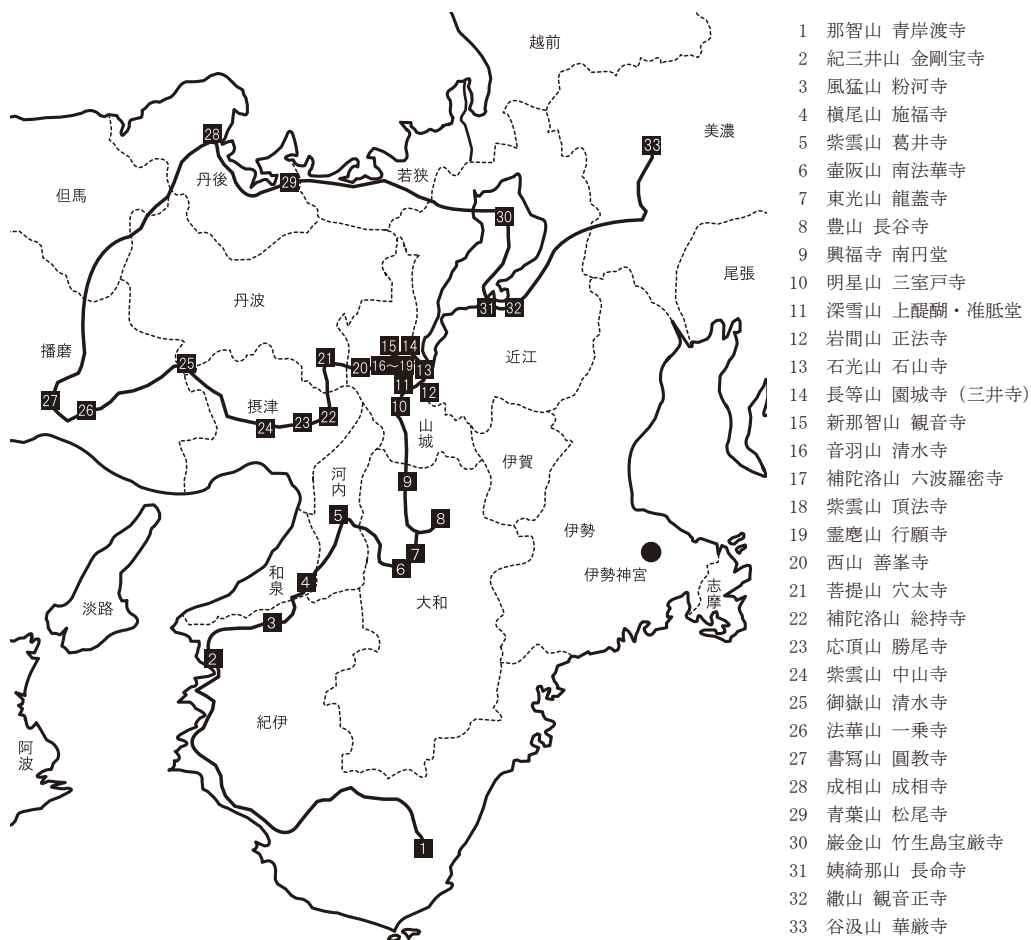


図2 西国三十三所観音順礼の経路図（縮尺不定）

美浜町新庄の集落の入り口付近には、高さ 93cm の花崗岩の自然石を用いた供養墓があり、正面中央には「西國三十三所順禮供養墓」、正面右に「覚了道」、正面左には「同墓口泉信女」と銘があり、僧侶名と亡くなった女性の戒名と考えられる文字が掘り込まれている。左面には「安政五牛六月」、右面には「願主田代村森久源与門」、「右 山道」とあり、安政 5 年（1858）に新庄の田代村在住の森久氏によって設置され、道標としての役割も兼ねた供養墓であったことをうかがい知ることができる。旅先で亡くなった旅人の処置はその土地の習慣に従って埋葬されたが（深井 1997）、この供養墓もその一つと解されよう。なお、この供養墓の近くにお住いの古の方にお聞きすると、供養墓はすぐ近くの山裾の斜面に立て掛けられていたものを据え直しているとのこと、ほぼ現位置を保ち、右山道とあるのは栗柄関への方向を示しているものと考えられる。このような資料も、栗柄越えがもう一つの順札路であった傍証として評価できる。

4. 若狭の道標とその特徴

（1）道標とは

道標とは、「道路を通行する人の便宜のため、木・石などに方向・距離などを記し路傍に立てた標示物。みちしるべ。」である（『広辞苑』第七版 2018 岩波書店）。今日に残る道標は石製品が基本で、造立年紀を見ると江戸時代後期以後のものが多い。

造立背景は、江戸時代後期に庶民の旅が増えるにつれ、必要性が増大したことによるものと考えられ、敦賀市から高浜町までの嶺南地域（若狭地方＋敦賀市）には、かつては存在したが現在は失われているものを含め、管見に触れるだけで 70 基以上の道標が存在する。

近世の道標の多くは私的に設置されたもので、個人または団体の善意による寄進によって設置されているため、願主、施主、寄進人などとともに造立者名が刻まれている例が多い。一方、近代以後は公設の道標も見られるようになる。

（2）嶺南地方における道標調査

嶺南地方に所在する道標に関しては、これまで近世交通に関する書籍や、福井県教育委員会が実施した「歴史の道調査」に伴う調査報告書、あるいは博物館等の図録に掲載されることで、部分的に情報が明らかとなることはあったが、道標に対して網羅的な悉皆調査や調査研究が行われたことがほとんどない。強いて挙げれば、舞鶴市在住の安田重晴氏が行った近畿地方を中心とした道標調査の成果が公表される中で、嶺南地方の道標についても一定程度が公表されたことに留まっている（安田 1998、小室 2018）。隣県の滋賀県では木村至宏氏による網羅的な道標調査と、一連の重厚な報告が行われていることに対して、この地域の道標調査は大きな後れをとっているのが実情である（木村 1971・2000 など）。

したがって、歴史フォーラムの開催にあたって、改めて街道筋を中心とした現地踏査を行い、道標の所在確認と様相把握を行った。この調査の成果は、資料「嶺南地方における道標一覧」として本書に収録した。

（3）嶺南地方における道標の種類

今回の調査において、大きく分類して以下の 4 種の道標を確認した（図 3）。

A. 交通路標

道や地名、集落名などが記された道標。正面のみに「右○○ 左●●」と掘られたものもあれ

ば、角柱の四面を用い、細かく地名、集落名を掘り、四方に誘導するものなどもあり、後者は舞鶴市から高浜町にかけての山間部に多い傾向がある。幕末期から大正期にかけてのものが多く、角柱と自然石のものが多くあり、法量や石種も多様である。

明治期以後の里程標（道路元標）もこれに含まれる。福井市の元標からの距離を示した大正時代の里程標が3基確認されている。明治6年に政府が実施した里程調査、大正8年の道路法制定など道路行政の一端としてこのような標柱が設置されたものと推察される（山本 1991）。

B. 順礼路標

西国三十三所順礼に伴う道標。一面または二面（正面と右面または左面）に「志ゆん礼道」「竹生嶋道」など順礼に伴う文字を「すく」「右」「左」など方位と組み合わせて配置し、背面を含めた残りの二面に造立年月日と造立者を刻むものが多い。凝灰岩質で大型のものが多く、掘られた文字も闊達なものが目立つ。江戸後期から大正期までのものが中心である。

C. 社寺誘導標

近くの神社や寺院に誘導するための道標で、江戸後期から大正期にかけてのものが多く、角柱や円柱、自然石のものが多く見られ、法量や石種もいろいろである。遠方からの参拝者、参詣者を想定したものは考え難いが、それでも集落内や山道に紛れ込まないように設置されたものと考えられる。

D. 境界標

明治時代に一斉に設置されたと考えられるもので、花崗岩製の角柱で、地表面からの高さは45cmほどのものが多く、幅、奥行きは13cmに統一され、正面に「丹後道」「若狭道」と街道名が彫られ、左右面、背面に「村名+地区名」（例 [正面]丹後道、[左面]南西郷村郷市、[右面]耳村河原市）が彫られ、街道筋の村の境に設置されたものと考えられる。失われたもの、移動させられたものを含めて10基の存在が知られるが、街道筋の村境にあったとすれば実際にはもっと多くの境界標があったものと考えられる。

（4）西国三十三所順礼路と道標

前項で見た「B. 順礼路標」のほとんどは西国三十三所順礼に伴う道標であり、松尾寺から竹生島まで誘導することを主眼に設置されたものが多い。一方で松尾寺近くの高浜町域では松尾寺に向かう方向を示したものもあり、逆回りに順礼路を辿る順礼者も存在したようである。

前掲の『西国順礼略打道中記』には、松尾寺から宝厳寺へと至る順礼の様子が描かれており、いくつかの道標も描かれている。小浜市の八幡神社付近で2基の道標が描かれているが、あいにく現在の所在は不明である。一方、現在、福井県立若狭歴史博物館の敷地の一角に移設されている「左志ゆん連以道」と掘られた道標はかつて湯岡橋東詰にあったもので、「道中記」の湯岡の箇所にも描かれた道標と同一のものと考えられる。同様に、若狭町日笠第1踏切脇にある「右志ゆんれいみち」「左北国ちせん道」と二面に掘られた道標は、「道中記」の日笠の箇所にも描かれた「右志ゆんれい ちくぶし満、左 北国えちせん」の道標と同一のものであるなど、史料に描かれたものが現地で比定でき、大変貴重である。



右
なたの
庄
道
左
す
縄
村

A. 交通路標 (小浜市須縄)



右
志
ゆん
礼
道

B. 順礼路標 (高浜町和田)



西
福
寺
道
是
ヨリ
西
十
五
丁

C. 社寺誘導標 (敦賀市松島町)



〔右面〕三宅村市場
〔正面〕若狭道
〔左面〕三宅村井口

D. 境界標 (若狭町市場)

図3 嶺南地方の道標分類図 (縮尺不定)

(5) 嶺南地方における道標の特徴

嶺南地方の道標を概観すると、交通路標が全体の半数弱を占め、次いで社寺誘導標が一定数みられる。これらは嶺南東部に顕著で、順礼路にあたる旧上中町以西では順礼路標が増加する。

花崗岩製の道標が多く、頑丈な石材が求められたと考えられる一方で、順礼路標の多くは凝灰岩製のもが多く、刻まれた文字も闊達で、共通性も見いだせるので、若狭西部には順礼の道標も取り扱う石工が存在した可能性がある。例えば旧名田庄村から小浜市にかけての南川流域の道標には角柱背面を工具痕が残る粗い調整のまま残し、平滑に整えていないものが多く分布する傾向があるので、このような製作技術のまとまりも特定の石工の存在をうかがわせている。

この日笠の道標は若狭町による文化財指定が図られ、保存の措置が取られている一方で、今回、当地の道標を見て歩く中で、現地で倒壊し、あるいは折損している道標を目にすることもあった。また、幾度の移設を経て、現在は廃校の小学校の片隅に横たわっていた道標もある。道標は重量物ゆえ盗難の危険性はあまり高くないと思われるが、その保存にはあまり猶予がないと感じられた。

道標調査において、川嶋清人氏、板東佳子氏には博物館等で保管されている道標の実見にご配慮いただくとともに、多くのご教示を賜りました。また、安倍義治氏、川村俊彦氏、小室智子氏、西島伸彦氏には道標の所在や内容などについてご教示賜りました。記して感謝申し上げます。

(引用・参考文献)

- 青柳周一「近世における若狭・熊川番所の通行について ―「西国順礼略打道中記」に見る―」『地方史研究』第316号 2005 地方史研究協議会
- 青柳周一「近世における地域の伝説と旅行者 ―「西国順礼略打道中記」を中心に―」『口頭伝承と文字文化 ―文字の民俗学声の歴史学―』2009 思文閣出版
- 荒熊元茂『舞阪町立郷土資料館資料集第八集 享和元年西国巡礼旅日記』2004 舞阪町立郷土資料館
- 池上真由美『江戸庶民の信仰と行楽』2002 同成社
- 江竜喜之「湖北の道しるべ ―道標から湖北の歴史を読み解く―」『北国街道と脇往還 ―街道が生んだ風景と文化―』2004 市立長浜城歴史博物館
- 岡尾正雄・白石晴義・三谷銀治・西村心一・一瀬久男「第四章 道の現状 丹後街道(小浜市域～京都府との府県境まで)」『歴史の道調査報告書第集 丹後街道Ⅱ・周山街道』2003 福井県教育委員会
- 海道静香「第二章 若狭国絵図にみる近世の街道」『歴史の道調査報告書第2集 北陸道Ⅱ・丹後街道Ⅰ』2002 福井県教育委員会
- 木村至宏『近江の道標』1971 民俗文化研究会
- 木村至宏『近江の道標 ―歴史街道の証人―』2000 京都新聞社
- 木村至宏「第一章 北国街道と北国脇往還の歴史的意義」『中近世古道調査報告書7 北国街道・北国脇往還(補遺)』2004 滋賀県教育委員会
- 木村至宏「第二章 塩津街道・九里半街道の歴史的意義」『中近世古道調査報告書9 若狭街道・塩津街道』2006 滋賀県教育委員会
- 小室智子「安田重晴氏「近隣府県西国街道道しるべ」」『京都府立大学文化遺産叢書第14集 舞鶴・京丹後地域の文化遺産』2018 京都府立大学文学部歴史学科
- 柴桂子『歴史文化ライブラリー13 近世おんな旅日記』1997 吉川弘文館
- 柴田亮敏・田代章子他「第三章 道の現状 北陸道」『歴史の道調査報告書第2集 北陸道Ⅱ・丹後街道Ⅰ』2002 福井県教育委員会
- 柴田亮敏・田代章子・大同芳男・中西昭二・森川治・山本和男・吉村哲雄・中塚正雄「第三章 道の現状 丹後街道Ⅰ(敦賀市域～上中町域)」『歴史の道調査報告書第2集 北陸道Ⅱ・丹後街道Ⅰ』2002 福井県教育委員会
- 杉江進「第三章 九里半街道と今津浦」『今津町誌』第二巻 近世 1999 今津町史編集委員会 今津町
- 瀬尾幸子「第七章 小濱藩領内の交通と女留番所」『歴史の道調査報告書第3集 丹後街道Ⅱ・周山街道』2003 福井県教育委員会
- 田中智彦「第2章 石山より逆打と東国の巡礼者 ―西国巡礼路の復原―」『聖地を巡る人と道』2004 岩田書院
- 多仁照廣「第六章 「酒井家編年史料稿本」から見た嶺南地方の「道の歴史」」『歴史の道調査報告書第3集 丹後街道Ⅱ・周山街道』2003 福井県教育委員会
- 永江秀雄「第二章 若狭と丹州を結ぶ道」『歴史の道調査報告書第3集 丹後街道Ⅱ・周山街道』2003 福井県教育委員会
- 西村隆夫『旅する益軒「西北紀行」 山代・丹波・丹後・若狭・近江を巡る』1997 岩田書院
- 深井甚三『歴史文化ライブラリー9 江戸の旅人たち』1997 吉川弘文館
- 藤井譲治「Ⅰ 湖の道の広がり」『街道の日本史31 近江・若狭と湖の道』藤井譲治編 2003 吉川弘文館
- 藤井譲治・藤田恒春「Ⅳ 地域社会の形成」『街道の日本史31 近江・若狭と湖の道』藤井譲治編 2003 吉川弘文館
- 福井県教育委員会「沿線主要文化財一覧」『歴史の道調査報告書第2集 北陸道Ⅱ・丹後街道Ⅰ』2002
- 福井県教育委員会「沿線主要文化財一覧」『歴史の道調査報告書第3集 丹後街道Ⅱ・周山街道』2003 福井県教育委員会
- 藤本新一・田歌昇「第四章 道の現状 周山街道(小浜市域～名田庄村～京都府との府県境界)」『歴史の道調査報告書第3集 丹後街道Ⅱ・周山街道』2003 福井県教育委員会
- 舞鶴市郷土資料館『西国巡礼と松尾寺』発行年不明 舞鶴市郷土資料館
- 丸山雍成「5 道・宿駅・旅の制度と実態」『日本の近世第6巻 情報と交通』丸山雍成編 1992 中央公論社
- 三方郡教育会『三方郡誌』明治44年
- 水野章二「Ⅲ 惣の世界」『街道の日本史31 近江・若狭と湖の道』藤井譲治編 2003 吉川弘文館
- 美浜文化叢書刊行会『耳村史』2014
- 森沢義信『西国三十三所道中案内地図【下】』2010 ナカニシヤ出版
- 森沢義信『西国三十三所道中の今と昔【上】【下】』2010 ナカニシヤ出版
- 安田重晴『まいづる田辺道しるべ』1998 出版センターまひつる
- 山本光正「近世及び近現代における道標の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第32集 1991 国立歴史民俗博物館
- 吉田純一「第八章 丹後街道の街村・佐柿について」『歴史の道調査報告書第2集 北陸道Ⅱ・丹後街道Ⅰ』2002 福井県教育委員会
- 渡辺和敏「6 関所・口留番所の機能と運営」『日本の近世第6巻 情報と交通』丸山雍成編 1992 中央公論社

皆さん、こんにちは。福井大学の門井と申します。専門は歴史地理学です。もうかなり以前から美浜町の歴史フォーラムに登壇させていただき、たびたびお話しをさせていただいています。

これまでの歴史フォーラムでは、もっぱら古代を中心に、興道寺廃寺に関連するテーマを扱ってきました。私も発表の回数が増えて、そろそろ持ちネタがなくなってカツカツの状態ですが、毎年発表はきついと松葉さんに泣きついていたのですが、「今回は近世をテーマにする。近世だからいいでしょう」ということで、昨年度に続いて発表させていただくことになりました。



私は、古代の交通や国郡制の成り立ちなどを主に研究してきたのですが、最近は国や郡といった領域、地理的な範囲が中世、近世に至り、どのように変化していくのかということにも興味があります。江戸時代に作られた国絵図、あるいは日本図を元に古代以降の変遷を研究して、それに関連する論文も発表させていただいていました。

本日は、若狭の近世の交通、そして国の領域、西国順礼に直接触れることは少ないのですが、その基盤としての若狭の地域性、文化などに焦点を当てて、ご報告をさせていただこうと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

1. 若狭の近世街道

(1) 『若狭国志』にみえる街道

まず初めに、若狭の近世の街道について触れておこうと思います。まずは図1、これは『福井県史』から引用したのですが、図中の丸数字は【資料1】の官道と間道の丸数字と対応しています。この丸数字をつけた道は、江戸時代、18世紀半ば頃に成立した『若狭国志』という地誌に見える街道を示したものです。

『若狭国志』では、若狭国の公の道として官道が三つほど挙がっています。一つは丹後道もしくは京道という名で呼ばれる街道です。近江と若狭の国ざかいの、大杉から熊川に入って小浜、そして西の高浜から丹後国へと入っていく道が丹後道です。もう一つは、小浜から三方郡へ行き、佐柿を経て関峠へ向かうルートが越前道として挙げられています。そして、北川右岸の玉置を経て小浜の百間橋に通じるルートとして内道が示されています。

これ以外に、間道がいくつか挙がっています。④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、そして⑩の道に対応しています。

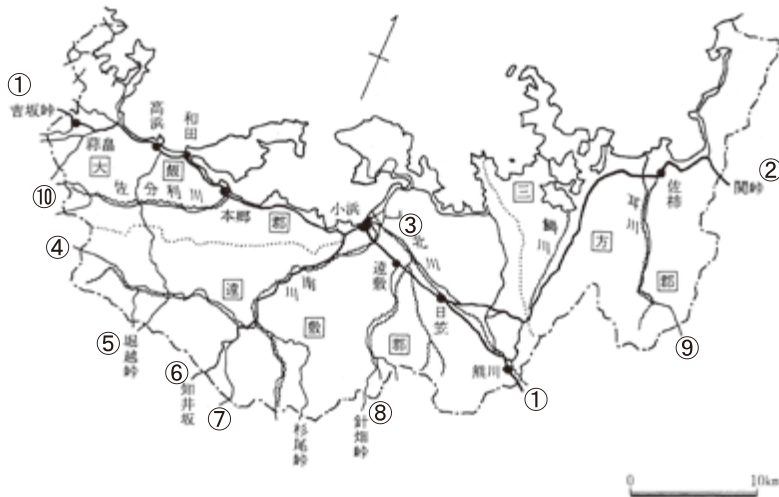


図1 若狭の街道

【資料1】『若狭国志』にみえる街道

<官道>

- ① 丹後道（京道）：大杉－熊川－小浜－高浜－犬石－丹後国加佐郡吉坂
- ② 越前道：小浜－佐柿－佐田－越前国敦賀郡関村
- ③ 内道：堤－玉置－高塚－小浜百間橋

<間道>

- ④ 甘木峠越（上林越）：小浜－青井－谷田部－久坂－納田終－丹波国何鹿郡上林
- ⑤ 棚坂越（坂本越）：小浜－青井－谷田部－久坂－坂本－丹波国桑田郡大及村
- ⑥ 血坂越：小浜－青井－谷田部－久坂－堂本－丹波国桑田郡矢原村
- ⑦ 五波越：小浜－青井－谷田部－久坂－堂本－志見谷－丹波国桑田郡田歌村
- ⑧ 針畑越：小浜－遠敷－神宮寺－上根来－近江国高島郡針畑小入村
- ⑨ 栗柄越：小浜－三方－郷市－興道寺－佐野－新庄－栗柄－近江国高島郡牧野村
- ⑩ 長谷越：本郷－川上－長谷－丹波国何鹿郡上林－萱野

(2) 番所の設置

図2は、天保年間に作られた若狭の国絵図です。国境を越えていく道筋にはどの国のどの村に至るのが注記されています。図1よりも多くの道筋が絵図には見え、国境を越えていく道がかなりあったことがわかります。この天保年間の国絵図には、国境に置かれた番所が描かれています。『若狭国志』より先に成立した『若狭郡県誌』という地誌にも番所が記載されているのですが、この地誌で示された番所は佐柿、熊川、そして蒜畠の3か所のみです。天保年間の絵図にはこの3か所の番所、そして美浜町新庄から近江国の高島郡に通じる栗柄越えの御番所もしっかりと描かれています（図3）。

近世には、国境を越えていく街道がたくさんあるわけですが、その中でも特にどの道が重要なルートとして認識されていたのかということ、江戸時代初期の絵図を見ながら少し考えてみたいと思います。

2. 近世初期の日本図にみえる若狭の街道

(1) 2種類の日本図

全国各地のいくつかの大名系の文庫の中に、寛永年間の作成とされる国別の絵図が写しとして残されています。これらを便宜的に日本六十余州図と呼んでいます。寛永10年(1633)、徳川家光の時代ですが、全国に巡見使が派遣され、各地から集められた絵図を諸大名が書き写して、それぞれの国元に残していたのではないかとされている地図です。図4はその中の一つ、若狭国絵図で、いくつかの道が描かれています。

この全国の国絵図を集成し、接合する形で日本全体の絵図が作られていたと言われています。これを便宜上、A型日本図と呼んでいます。

図5は佐賀県立図書館の蓮池文庫に所蔵されているA型日本図です。これはかなり大型の日本図で、主に関東から中国地方の手前まで描かれています。この他にも東北地方を描いた絵図と、中国・四国・九州地方を描いた絵図があり、日本列島が三分割して描かれています。

日本図ともなると当然、描き込める要素に限られます。大縮尺の地図であれば、地表の様子を詳細に描き込めますが、これだけ縮尺が小さくなると盛り込む地理情報はどうしても省略せざる得なくなる。元となる国絵図のレベルではたくさんの街道が描かれていますが、取捨選択の結果、重要な道路が残ってくるわけです。ちなみに、絵図の中にみえる集落名は表1にまとめました。図5の日本図は佐賀県立図書館のホームページでも見ることができますので、またじっくりと確認していただければと思います。図を見ると、『若狭国志』に記された街道のうち、①、②、⑤、⑥、⑧、⑨、⑩の街道を確認することができます。

そしてもう一つ、B型日本図と便宜的に呼んでいる日本図があります。先ほどのA型日本図は3枚仕立ての日本図でしたが、こちらは1枚で全体を描く日本図です。図6は国立国会図書館所蔵の日本図で、かつては慶長年間、江戸時代のごく初期に作られた日本図ではないかと言われていました。しかし、近年の研究によれば、もう少し時代が下り、島原の乱後の寛永15年(1638)に作成された軍用地図ではないかと言われています。島原あたりの地理情報が結構詳しく、街道も赤い線で描かれ、里程が記されています。このような特徴から、島原の乱との関連性が想定されるようです。

これは、近世国絵図、日本図研究の第一人者、元山口大学の川村博忠先生による現在、定説となっている見解です。このB型日本図で若狭国の街道がどのように描かれているのかと見てみると、大杉から小浜に入ってくる道筋、そして丹後方面に抜けていく街道、そして敦賀方面に向かう街道、加えてもう一つ描かれているのが「たうもと」から「やはら」という血坂越のルートが示されています。このルートは、丹波の亀岡を経て京都に通じています。

二つの日本図に共通して描かれている街道は、図1の①、②、⑥。このうち①と②は『若狭国志』でも官道とされている重要な街道ですが、間道とされる⑥の血坂越の道筋が描かれている点に注目したいです。

表 1-1 古地図にみえる若狭の地名(1)

郡名	対応地名	A型日本図			B型日本図		備考
		六十余州図 池田本	蓮池本	毛利本	国会本	池田本	
三方	佐田	佐田					
	山上	山上					
	坂尻				坂尻	さか志り	
	機織池	はたをり池	はた	ハタ			A型図：佐田の誤り？
	佐柿	佐柿町	佐柿	佐柿			
	郷市	里市					
	気山	気山					
	三方	倉見	—	ミカタ			六十余州図：三方の誤り？
	相田	相田					
	倉見	くよみ	(くらみ)	クラミ	くらみ	くらみ	
	新庄	新庄					
	栗柄	河りから	くり□□	栗カラ			
	北田	北田					
	竹波	竹波					
	丹生浦	中ノ浦					
	海山	海山					
	小川	小川					
常神	當神						
？	曾祢か						
日笠	日笠	(ひかさ)	ヒカサ				
遠敷	遠嶋	□にふ	フニフ				
小浜	小濱町	小濱町	小濱町	小濱	小濱	B型図：城所として表記	
青井		あり井	有井	(あおい)	あおい		
西津	西津						
甲ヶ崎	加うか崎						
阿納尻	あの尻						
阿納	阿野						
若狭浦	若狭浦						
仏谷	佛谷						
熊川		熊川	熊川				
大杉	大杵	大杵	大杵	大杵			
保坂					ほさか	大杉の誤り。近江国高島郡「不破」の位置が「本坂」(保坂)。	
？		寺町	寺町				
？		谷郷	谷口				
上根来	上祢こな						
団		たん	タン			上根来の上流にあった集落	
五十谷	いか谷						
深谷	深谷	□谷	フカタニ				
虫鹿野	むしかの						
拳野	あり野						
久坂	ひさ坂						
堂本	たう本			たうもと	とうもと		
槇谷	牧谷						
中村	中村						
井上	井上						
坂本		坂本	坂本				
納田終	のたおい						

表 1-2 古地図にみえる若狭の地名 (2)

郡名	対応地名	六十余州図	A型日本図		B型日本図		備 考
		池田本	蓮池本	毛利本	国会本	池田本	
大飯	東勢	東せい					
	本所	本庄					
	鯉川	こい川					
	尾内	尾内					
	本郷		本郷	本郷			
	和田	和田	和田	和田			
	菌部	菌邊					
	高浜	高濱町	高濱	高濱			
	三松	三松					
	蒜畑	北?畑	ひる畑	ヒル畑	ひるはた	ひるハた	六十余州図：比流畑(ひるはた)?
	笠原	笠原					
	川関	川せき					
	川上	川上	口上	河上			
	犬見	犬見					
	大島	大嶋					
上鎌倉	上鎌倉						
上瀬	上瀬						



図 2 天保国絵図 (若狭国) (国立公文書館所蔵)



蒜島番所



佐柿番所



熊川番所



栗柄番所

図3 天保国絵図に描かれた若狭国の番所（国立公文書館所蔵）



図4 日本六十余州図（若狭国）（岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵）



图5 日本之図 (若狭国) (佐賀県立図書館蓮池文庫所蔵)



图6 日本図 (若狭国) (国立国会図書館所蔵)

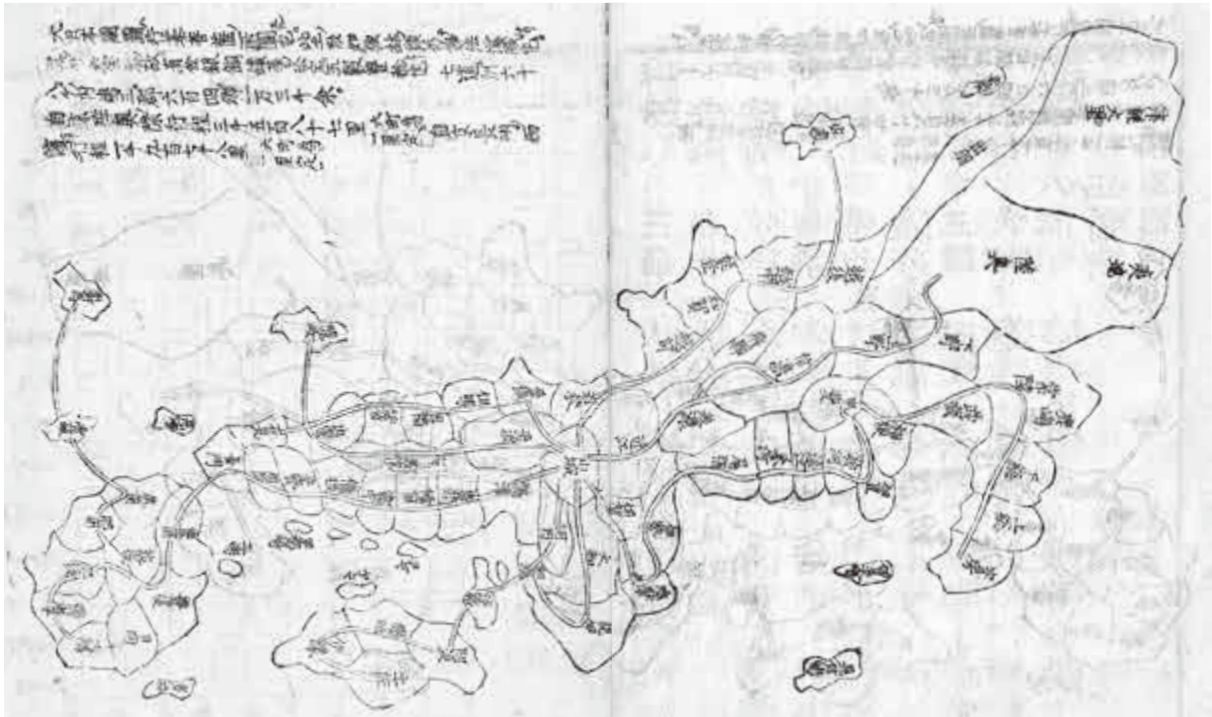


図7 『拾芥抄』日本図の一部 (国立国会図書館蔵)

(2) 若狭と山城の国境

ところで、江戸時代後期の国学者、伴信友が『若狭国志』について、詳細な註記を残しています。その中に、興味深い指摘があります。それは⑧の針畑越についてです。この道はいわゆる鯖街道の一つで、特に京都までを最短距離で結ぶルートとされています。「京は遠ても十八里」という有名な諺がありますが、あの18里はこの針畑越を通った場合の距離とされています。

なお、A型日本図では若狭と隣接して越前、近江、山城、丹波、丹後が見えます。つまり若狭は山城と隣接するように描かれているという特徴があります。B型日本図も近江と丹波の間に山城国が入り込んだ形で描かれています。

実はこのような描き方はかなり以前からされています。我が国最古の日本図と言われる行基図という系統の地図があって、図7の『拾芥抄』の日本図はその一例です。行基図は基本的に各国を俵のように積み重ねた形で描かれるという特徴があります。このような伝統的な日本図のスタイルでも、若狭と山城は隣接して描かれているのです。ところが実際には若狭と山城は国境を接していません。

図8、上根来から百里ヶ岳の西側の稜線を越えて小入谷、そして針畑川の流域に入るのが針畑越えのルートです。ここに国境があります。その西側に見える三国岳が若狭と近江、そして丹波との国境ですね。このように若狭と山城は国境を接していません。

このことについて、伴信友は、現地には豊臣秀吉の時代に国境の変更があったという伝承があると記しています。



図8 若狭・近江・丹波・山城の国境(1)
(縮尺 1/200,000)

さらに、17世紀後半に書かれた『雍州府志』という山城の地誌があるのですが、これによれば山城側、鞍馬から花脊峠を越え、さらに北上したところにある大悲山が秀吉の時代に丹波から山城の所属になったということです(図9)。同じく『揚州府志』には山城の北に若狭があるという記述があり、京都市街を流れる堀川や高野川の水源が若狭であるという記述もあります。

伴信友の註には「コレヲノ文ニテ考フレバ、久田ヨリ大斐山ヘカケテ、昔ハ本国ナリシヲ、豊臣氏改革シ玉フヨシ也。古老ノ説アリ。ナホ考フベシ。」とあって、かつてこのあたりは若狭国であったと推定しています。それが豊臣氏の時に国境の変更が行われたのではないかというのですが、「ナホ考フベシ」ということで、少し怪しいと思いつつもそのようなメモ書きを残しています。



図9 若狭・近江・丹波・山城の国境(2)
(縮尺 1/200,000)

(3) 「寛永日本図」の成立時期

先ほど述べたように、A型とB型という二つの日本図にも現在の学説では、寛永年間の作成と言われています。ところが若狭と山城が隣接して描かれているといった国境のあり方に注目した場合、この説は本当にそうなのかという大きな疑問が出てくるわけですね。

ちなみに寛永年間に集められた国絵図を集成して作ったのがA型日本図と説明しましたが、若狭国絵図の街道がどこの国へ行くのかを見ると、いずれも山城とは書かれていません。近江か、丹波か、丹後か、あるいは越前に限定されています。このA型日本図が寛永年間の国絵図を元に作成されたとすれば、おそらく若狭と山城の国が接するというような誤りは起こらないはずですが、A型日本図の元となった若狭国絵図では、針畑越は近江に通じる道として描かれています。今日、定説となっている川村さんの説も少し怪しくなってくるのではないかと考えています。

盛り込まれた街道などの地理情報は寛永の頃のものであったとしても、日本列島の形、あるいは国境のあり方はむしろ古くからあった行基図のスタイルにかなり似通っているわけです。A・B型の日本図はともに行基図の延長にある古い表現形式であることから、これらの絵図のベースマップの成立自体は寛永年間よりもさらにさかのぼる可能性が高いのではないかと考えています。

3. 中・近世の若狭の文化的土壌

(1) 若狭の名所・後瀬山

国境の話についてはこのぐらいにして、中世・近世の若狭の文化的な土壌についてお話ししたいと思います。

若狭の名所の中で、特に古来知られた名所の一つに、現在の小浜市街の西にある後瀬山があります。古くは『万葉集』にも歌われた山で「かにかくに人は言ふとも若狭道の後瀬の山の後も逢はむ君」(坂上大嬢)、「後瀬山後も逢はむと思へこそ死ぬべきものを今日までも生けれ」(大伴家持)と詠まれています。これらの歌の存在によって、都にも知られた若狭の名所となりました。平安時代の『枕草子』の「山は」の段には後瀬山が挙げられています。ちなみに、越前では、敦

賀から今庄に向かう間にある五幡山、帰山も『万葉集』の大伴家持の歌の中に登場します。

そして、後瀬山の西南に連なるのが熊野山です。

『若狭国志』は熊野山について「在^ニ青井村^ニ。自^ニ後瀬山^ニ来^リ連^ル。有^リ熊野権現^ノ祠^ニ、因^テ名^ク。又有^リ伊勢内外宮^ニ、故^ニ俗^ニ呼^フ神明山^ト。及^ヒ荒神^ノ祠[・]役^ノ小角^ノ祠[・]八百比丘尼^ノ祠在^リ山腹^ニ。巡^ニ拝^{スル}諸国三十三所^ノ観音^ヲ者、皆過^キ于此^ニ春時為^ス群^ヲ。」と説明しています。熊野権現の祠を祀っているということからその名が生じたということですが、伊勢内宮・外宮の神を祀ることから神明山という別名もあると紹介されています。さらには八百比丘尼の祠を祀っているということで、三十三所観音の巡拝者がみな春になるとここへやってくるということです。

神明社は別名、八百姫神社とって、八百比丘尼を祀り、八百比丘尼の滞在地とされ、手植えの椿もあるという神社です。付近には比丘尼入滅の地とされる空印寺もあり、八百比丘尼伝承との関わりが強い一帯です。

(2) 守護大名・武田氏

永享12年(1440)、武田信榮は若狭の守護職となり、大長2年(1522)に武田元光が後瀬山城を築きます。信豊、義統と続き、武田元明が一乗谷に移住させられた永禄11年(1568)まで武田氏4代の本城として存続しました。

武田氏は文芸にも力を入れた大名として知られています。当時の都の名だたる文化人とも交流があり、歌人として名高い飛鳥井榮雅(1417-1491)、三条西実隆(1455-1537)、連歌師の宗祇(1421-1502)、里村紹巴(1525-1602)らとの交流があったことが知られています。

また、武田氏はその一族からも文化人を輩出しています。雄長老(1535-1602)、京都の建仁寺・南禅寺の僧で、なおかつ狂歌、俳諧師でもあったという人物です。あるいは千利休に影響を与えたとも言われる茶人、武野紹鷗(1502-1555)も若狭武田氏の出身とされています。かなり文芸と関わりが深い大名が若狭の地を治めていたということです。

(3) 俳諧師・斎藤徳元

武田氏以降、この地に身を寄せた文化人に俳諧師の斎藤徳元(1559-1647)という人物がいます。斎藤徳元は豊臣秀次、織田秀信に仕えました。元々は武将で、美濃の墨俣城主であった人物です。若い頃は京都の聚楽第、伏見にも暮らした経験を持ち、おそらくは秀吉の小田原攻めにも同行したとみられます。関ヶ原の前哨戦が岐阜であり、彼はこの戦に敗れ、浪人の身分になるわけですが、その後、若狭を治めた京極高次の元に身を寄せ、武士の身分は捨て、以降は俳諧・連歌師として身を立てていきます。京極家の御伽衆、いろいろと面白いことを語って殿様を喜ばせるような役割を果たしていたのではないかとされています。

この斎藤徳元、江戸時代に入って、寛永3年(1626)から京都にしばし滞在し、連歌師の里村昌琢や松永貞徳らと交わり、なおかつ八条宮智仁親王邸にも出入りしています。この八条宮は京都の桂離宮を造った当代きっての文化人です。斎藤徳元は京都で名だたる文化人達と交流しました。彼はその後、寛永6年(1629)に江戸に移り、江戸俳壇の長老として活躍し、生涯を終えていくわけですが。

斎藤徳元は俳諧・連歌とともに狂歌を嗜んだことでも知られた人物で、小浜とゆかりがあるということの頭の片隅に入れておいてください。

4. 若狭の西行伝承

(1) 西行清水

若狭に関する文化的な事象として、もう一つ注目したいのが西行伝承です。西行と言えば、漂泊の歌人で、諸国を行脚しましたが、全国各地には実際に西行が足を踏み入れた場所、そうでない場所も含めて、西行にまつわる伝承がたくさん残っているのです。若狭においても西行にまつわる伝承がいくつかあります。一つはかつての桂木村、現在は小浜市東相生にある西行清水と呼ばれる湧き水に関する伝承です。西行が地元の人に掘らせたという清水で、特にこれは勝負を決する時にこの水を飲むと必ず負けるという伝承があります。これは『若狭郡県誌』に紹介されています。

(2) 西行の呪歌

もう一つは、小浜市野代にある妙楽寺に伝わる西行法師が書いたという西行仮名消息、手紙が残っています。これは西行の呪い歌と言われたりもしています。

「我北国若狭妙楽寺へ下り侍りし高や坊・普門院ぼう主と忸人に行逢ふたり、ともにくたびれ、馬にのり、このもの落馬させんとおもひ、いむのむすび一句、ゆかじ、こじ、たたじ、はしらじ、かへりこじ、ねしや、おきしや、中にさかりしとやりければ、ふたりともにをちてけり、是 円位わざなりとつぶやき侍り、それよりわかれ、三方郡よりわかれけり、あなかしく 三日円位」とあります。円位とは西行のことです。およそ西行本人が書いたものとは思えませんが、ともあれ西行が書いたとされています。

これは西行のいたずらで、西行が若狭にやってきた時にお坊さん二人が馬に乗ってくたびれた様子を見て、こいつらを馬から落としてやろうということで呪いの歌を詠んで、見事に落馬させたという他愛もない話ではあるのですが、このような伝承も若狭に残っているわけですね。

(3) 西行作とされる歌

西行にまつわる話として、もう一つ。現在、谷田部トンネルが通じていますが、この上を行く道が谷田部坂という近世の街道筋の一つです。この谷田部坂を越えていくと八百姫神社があります。八百比丘尼と言えば、白玉椿がセットになるわけですが、それを結びつけた歌が近世のいくつかの文献に紹介されています。

「若狭也白玉椿八千代経てまたもこへなむ矢田部坂哉」(『向若禄』)、「若狭路やしら玉椿八千代へて又もこしなん

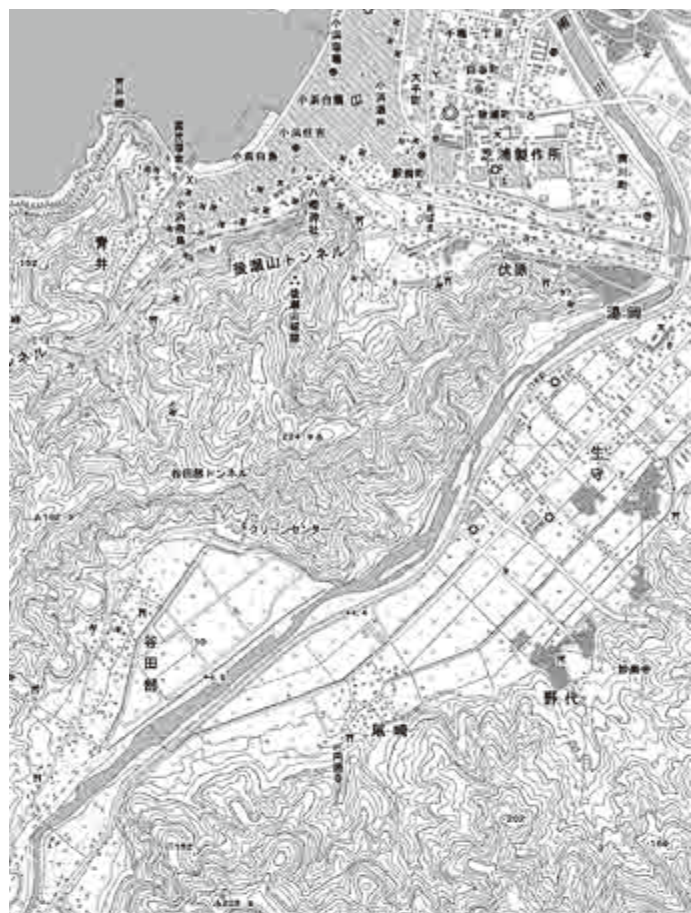


図10 小浜市矢田部周辺の地形図 (縮尺 1/25,000)

谷田部坂かな」(『若狭国伝記』)、「若狭地也、白玉椿八千歳経天亦毛越奈牟矢田辺坂哉」(『若耶群談』)、「若狭路也、白玉山茶花、八千代経天、又毛踰辺幾、谷田部坂加奈」(『若狭国志』)と、いずれも若狭国のもので、時系列順に示しています。最初の『向若禄』が寛文年間、17世紀半ば過ぎに書かれたもので、『若狭国伝記』も同じ寛文年間、『若耶群談』が延宝8年(1680)に書かれたもので、『若狭国志』が18世紀半ば、寛延年間に書かれたものです。

時代が降るにつれ、若干言い回しは変わっていますが、いずれも内容は一緒です。最初の『向若禄』にみえる「若狭也白玉椿八千代経てまたもこへなむ矢田



図11 正保国絵図に描かれた小浜市矢田部周辺

部坂哉」という歌がそれ以降の文献にも紹介されています。実はこれらの歌、『向若禄』は作者を載せていないのですが、『若狭国伝記』以降は、これらの歌を西行作と伝えています。

後瀬山の周辺、谷田部坂を越えて妙楽寺や相生のあたり、南川流域には西行にまつわる伝承があるということに興味を引かれますが、西行は本当にこれらの歌を詠んだのかと言えば、おそらく詠んでいないと思います。これはあくまでも西行に仮託されたもので、本当の作者はおそらく別にいると思われます。

では本当の作者は誰なのかということですが、その候補に挙がってくるのが斎藤徳元。その可能性が高いのではないかと考えています。熊野山麓、谷田部坂を越えて青井村に入ってくるところに妙徳寺というお寺があります。このお寺で作った句が斎藤徳元の『塵塚俳諧集』という句集に残されています。それが「綿ほうしかふるか雪の白比丘尼」です。彼はこの地に来て、八百比丘尼の話と引っかけたこの句を詠みました。八百比丘尼に対する興味、関心を抱いていたことは間違いないと思われるわけです。

同じく『塵塚俳諧集』にもう一つ、「白玉か何そ椿はやたへ坂」という句があります。実はこの句は青井村の妙徳寺で作ったものではなく、三方郡の佐柿、国吉城で詠んだものです。なぜ谷田部坂が出てくるのかということですが、佐柿には椿峠があります。佐柿に来て椿峠を見て、谷田部坂へと結びつける形でこの句を詠んだのでしょう。白玉椿がここにも出てきて、八百比丘尼が意識されていたことはおそらく間違いないと思われます。

西行作といわれる歌は、実際に詠んだのは西行ではなく、斎藤徳元ではないかというのが、私の見立てです。ちなみに、尾張藩士、天野信影(1663~1733)が書いた随筆に『塩尻』という作品があって、その中に若狭の谷田部坂の歌が紹介されています。「若狭路やしらたま椿八千代へてまたもこへなむ矢田部坂かは」と記されており、若干文言の異同はありますが、ほぼ同じ歌です。注目したいのは、『塩尻』ではこの歌の作者が西行ではなく、八百姫の作と伝えられている点です。元々はこの八百姫比丘尼作というような伝承があり、後から西行作という伝承が広まったのではないかと考えていますが、いずれにせよどちらも仮託には違いないと思います。

本来の作者は、斎藤徳元の可能性が高いだろうということですね。

西行作とされるこれらの歌ですが、実は本歌と考えられるものが鎌倉時代の『後拾遺和歌集』にあります。「君が代はしら玉椿八千代とも何にかぞへん限りなければ」（藤原資業）という歌には「白玉椿」、そして「八千代」という文言がセットとして初めて現れます。西行作とされる歌もおそらくはこの歌を意識し、踏まえて作られたのではないかと思われま

す。なお、16世紀前半頃の作品とされる能の演目に、謡曲「氷室」という作品がありますが、その中にも「花の名の、白玉椿 八千代経て」というフレーズがあります。西行作と伝えられる谷田部坂の歌を作った人物は、このような和歌や謡曲に関する下知識、教養を備えていた可能性が高いのではないかと。おそらくは若狭だけで育ってきたような人物ではなく、やはりそれなりの文化人との交流の中でこのような知識を仕入れていた可能性のある人物、その人物として斎藤徳元の可能性が最も高いと考えています。

このような歌は、狂歌、戯れの歌ということで、遊び感覚で作られ、通常は詠み捨てられていくのが常であったとされています。特にこの時代、茶会がたびたび開催され、その時には西行が尊重される気風がありました。当時は文化人達が西行の生き様に憧れていた部分があり、西行をモチーフにした掛け軸の絵であったり、先ほどの仮名消息もそうですが、そのようなものが茶会の席に飾られたりしました。それを見て西行の話に一花咲かせるような、数寄談義が行われ、その中の余興で読み捨てられた歌が、いつしか八百姫作、あるいは西行作となって世間に広まっていたのではないかと。このようなプロセスが考えられるわけですね。妙楽寺は西行の仮名消息が伝わってきた寺院、妙徳寺は徳元が句を詠んだ場所ですが、このような寺院もまた俳諧・狂歌を嗜む場であった可能性が高いということは、従来の研究でも指摘されているところです。

（４）ところ富士

これらの歌を作った真の作者を斎藤徳元と想定したわけですが、話のついでに斎藤徳元に関わったと思われる歌をもう一つ、ご紹介したいと思います。

全国各地のシルエットの美しい山を「〇〇富士」という名で呼ぶことがあります。例えば若狭では京都府との境にある青葉山がきれいな三角形の姿で、特に若狭から見た場合、シルエットが際立ちますが、これには若狭富士という呼び名があります。越前では日野山が越前富士と呼ばれています。このような各地の富士山を「ご当地富士」や「あやかり富士」などと言いますが、ここでは「ところ富士」と言っておきます。正確な数はわからないのですが、全国にこの手の「ところ富士」は400以上あると言われていています。福井県内だけでも13か所ほどあります。

表2、ところ富士にまつわる伝承歌が全国に残っていますが、そのいくつかの歌は西行作と伝えられています。しかも、よく似た歌が結構あります。例えば、陸奥の弘前から見える岩木山という有名な山は富士山によく似たシルエットで、みちのくの富士という呼び名がありますが、この山を詠む歌は、「ふじみずばふじとやいはん陸奥のいはきの嶽をそれと詠めん」、「ふし見てもふしとやいはん陸奥の岩城の山の雪のあけほの」、あるいは「しらて見は不二とやいはん陸奥の岩木の山の雪のあけほの」といったように、よく似ています。

福井県で言えば、越前の文珠山について、「富士見てもなにかはせん角原のもんじゅが嵩の雪のあけほの」、「越に来て富士とやいはん角原の文殊か嶽の雪の曙」といった歌があります。また『越前国名勝志』に紹介されている歌に「富士ミテモ何ニカナハセン角原ノ文殊カ嶽ノ雪ノ曙」「富士見スハ富士トヤイハン角原ノ文殊カ嶽ノ雪ノ曙」とあります。これは元々は先の歌を詠ん

だところ、老翁が現れて後の歌に修正したという詠み直しの伝承があります。いずれも「雪の曙」で終わるよく似た歌です。地理的に隔たりながらもよく似た歌が分布しています。

詠み直しの歌に関して、もう一つご紹介したいのが、豊後の由布岳の歌です。これは西行が作った歌として伝承されています。西行法師は由布岳を見て、「豊国の木綿の御嵩は富士に似て雲も霞も絶ぬなりけり」と詠んだところ、突如、由布岳が怒って噴火を始めた。それを見て、慌てて西行法師は「豊国の木綿の御山に富士は似て雲も霞も絶ぬなりけり」と詠み直した。つまり由布岳が怒ったのは由布岳が富士に似ていると言われたためであり、富士山が由布岳に似ていると詠み直したら、噴火が静まったということです。

これらの歌はよく似ていて、しかも西行作という伝承をもっています。ところがこの手の歌は西行作とばかり伝えられているわけでもなく、よくよく見ると同じ歌でも別の人物が作ったとされるものもあります。例えば、先ほどの岩木山の歌の中に、「ふし見てもふしとやいはん陸奥の岩城の山の雪のあけほの」がありますが、この歌は藤原定家作とも伝えられています。いずれにせよ、ご当人が作ったわけではなく、彼らに仮託して歌が伝承されてきたということです。

表2では類歌と見られるものに◎を付けているのですが、その一つに若狭の青葉山の歌があります。「布土なくはふしとやいはん若狭なる青葉の山の雪の明ほの」という歌で、作者が八条宮智仁親王となっております。この八条宮が実際に青葉山のあたりに来たことがあるかと言えば、実は来ています。八条宮は1612年に天橋立と若狭を旅行しているのです。一方で八条宮は富士山を見たことがあるのか。「富士なくば富士とはいわん」と歌っているからには富士山も見ているのではないかと思うところですが、この八条宮の経歴を見ると若狭旅行より前に東国方面に行った形跡はありません。1617年に江戸に参府していますので、その時には富士山の実景を見ているはず。その時系列で言えば、この歌は八条宮作と伝えられてはいるのですが、その信憑性はやはり甚だ怪しいと思われま。

では、これは一体誰が作った歌なのかと考えると、やはり候補として挙がるのは、八条宮とも親交があり、和歌にも通じていた斎藤徳元の可能性がまず考えられると思っています。青葉山の歌にも、おそらく本歌と見られる作品があります。16世紀の有名な歌人、古典学者である九条植通が詠んだ「降り積もる雪のころなおさぞなども都の富士のたけの曙」という歌がそれです。この都の富士とは比叡山ですが、「都の富士のたけの曙」、そして「雪」という文言も含まれていません。青葉山の歌はおそらくこの歌を踏まえて作ったものではないかと思えます。

九条植通の弟子には松永貞徳もおり、彼は斎藤徳元とも交流があったので、当然この歌のことも知り得る立場にあった。やはりこの歌を作ったのは徳元ではないかと考えています。

全国によく似た歌が散らばっていますが、西行作、定家作と伝えられるこれらの歌の大元、特にこの「雪の曙」系の歌のルーツは、実は若狭にあるのではないかと。若狭を起点として全国各地に広まり、徐々に詠み句も変形して伝わったのではないかと。そのようなつもりで見ると、岩木山の歌などはやはり少し田舎じみでいて、うろ覚えで伝わった部分が適当に改変されたような印象もあります。あまたある伝承歌のルーツは、若狭にあるのではないかと考えています。

表2 「ところ富士」にまつわる伝承歌

国名	山名	歌	作者	出典	年代	備考
摂津	角山	有馬ふじふもとのきりは海ににて なみかたとへはをのの松かせ	小野小町	『有馬小鏡』	延宝3年(1675)	
		有馬ふし麓の霧は海に似て 波かとききは小野の松風	—	『迎湯有馬 名所鏡』	延宝6年(1678)	「花山法皇の御製のよし いひ伝ふる」
			最明寺殿 時頼	『有馬山温泉 小鑑』	貞享2年(1685)	
		東見ぬ人の為とやうつすらん ここに有馬の富士の柴山	伊達宗祇	『有馬地誌』	明和7年(1770)	
藤原宗識	『国鎮記』		文化14年(1817)	「有馬地志三の巻」から の引用		
近江	三上山	◎ 都人富士とやいはん近江なる 三上の嶽の雪のあけほの	—	『近江国輿地 志略』	享保19年(1734)	
		◎ 打ち出でて 三上の山を詠めれば 雪こそなけれ 富士のあけほの	紫式部	不詳		
信濃	冠着山	◎ 信濃なる富士とやいはむ冠着の 峯に一夜は月を見むとぞ	西行	「観月之勝地 姥捨山心真	明治27年(1894)	銅版画
陸奥	岩木山	◎ ふじみずばふじとやいはん陸奥の いはきの嶽をそれと詠めん	—	『和漢三才 図会』	正徳2年(1712)	
		◎ ふし見てもふしとやいはん陸奥の 岩城の山の雪のあけほの	西行	『諸国里人談』	寛保3年(1743)	
			藤原定家	『大日本道中 行程細見記』	明和7年(1770)	
		—	『東国旅行談』	天明9年(1789)		
		◎ しらて見は不二とやいはん陸奥の 岩木の山の雪のあけほの 池ニウツル岩木ヲ不二ノ姿ニテ 眺メハ庭ノ三保ノ松原	藤原定家	『西備名区』	文化元年(1804)	登美志山の類歌として引 用
若狭	青葉山	◎ 布士なくはふしとやいはん若狭なる 青葉の山の雪の明ほの	八条宮智 仁親王	『若狭国伝記』	寛文年間 (1661~1673)	
越前	文珠山	◎ 富士見てもなににかはせん角原の もんじゅが嵩の雪のあけほの	西行	『帰雁記』	正徳2年~享保2年 (1712~1717)頃	
		◎ 越二来テ富士トヤイハン角原ノ 文殊カ嶽ノ雪ノ曙	西行	『越前国 名勝志』	元文3年(1738)	
		◎ 富士ミテモ何ニカハセン角原ノ 文殊カ嶽ノ雪ノ曙	—	『越前国 名勝志』	元文3年(1738)	詠み直しの伝承
	◎ 富士見スハ富士トヤイハン角原ノ 文殊カ嶽ノ雪ノ曙	老翁				
野坂山	◎ 見るたびに富士かとぞおもふ野坂山 消えぬが上に雪のふれば	小松重盛	『敦賀風景 八ツ乃詠』	江戸後期		
丹波	波賀尾 岳	◎ 富士に似てふしにはあらぬ大山の 波賀尾嶽の雪のあけほの	廻国上人	『大山記』	貞享年間(1684~ 1688)	
丹後	建部山	◎ 往みても富士とやいはん建部山 みとりの松にかかる白雲	京極高盛	『丹後風土記』	安政3年(1856)	
石見	三瓶山	◎ しらて見は不二とやいはん石見湯 三瓶が嶽の雪のあけほの	西行	『西備名区』	文化元年(1804)	登美志山の類歌として引 用
		◎ 知らで見ば富士とや言はむ石見なる 佐比売が嶽の雪のあけほの	西行	不詳		
備後	登美志 山	◎ しらて見ば不二とやいはん備後なる とみしの山の雪の明ほの	後鳥羽院	『西備名区』	文化元年(1804)	
讃岐	飯野山	◎ さぬきにはこれをやふしといひのやま あさけの煙たたぬ日もなし	西行	『玉藻集』	延宝5年(1677年)	
伊予	石鎚山	◎ 忘れては富士かとぞ思ふ是や此 伊予の高根のみねのしらゆき	西行	『予陽郡郷 俚諺集』	宝永7年(1710)	
肥前	浮嶽	◎ 音にきくつくしの富士を来て見れば 霞にまかふ雲の浮岳	西行	『松浦昔鑑』	宝永年中~嘉永2年 (1704~1849)	
豊後	由布岳	◎ 豊国の木綿の御嵩は富士に似て 雲も霞も絶ぬなりけり	西行	『早見郡志』	天明5年(1785)	詠み直しの伝承
		◎ 豊国の由布の高根は富士に似て 雲もかすみもわかぬなりけり 駿河なる富士の高根は由布に似て 雲も霞もわかぬなりけり				
薩摩	開聞岳	◎ さつま湯急の郡のうつほ嶋 これやつくしのふしといふらん	—	『松葉名所 和歌集』	万治3年(1660)	『歌枕名寄』の収載歌と されるが同書に見えず 「何れの時の国の守にて や有りけん」
	桜島	◎ 島か富士爰はきよみの関ならば す崎のかたは三保の松原	—	『西遊雜記』	天明3年(1783)	

※ 出典は当該歌の初出とみられる明治期までの文献等を挙げた。
 ※ 同じ歌で作者が異なる場合は、それぞれの初出とみられる文献を挙げた。
 ※ 青葉山・岩木山の類歌とみられるものに◎印を付した。

5. まとめ

もうそろそろお時間になります。

最後に若狭の交通に関して、その主要な幹道として越前や近江、京都、そして丹後へと抜けるルートがありますが、当時意識されていた重要な出入り口として丹波とのルートの存在に注目する必要があるのではないかと思います。

若狭という地域と京都の心理的な近さにも注目したいです。絵図では若狭と山城が隣接して描かれることがありましたが、実際にそのような事実はないわけです。しかしその当時の人々の心理を表現した絵図と見ることもできる。京と若狭の近さ、京都のバックヤードとしての若狭という性格を絵図から読み取ることができるのではないのでしょうか。

そして、若狭から全国への文化の伝播、歌の伝承にも見られたような文化の起点としての若狭の性格についても、今後さらに考察を進めていきたいと思っています。

では、以上で私の発表を終わらせていただきます。

旅の記録にみる江戸時代の若狭

滋賀大学 経済学部 教授

青柳周一

ただいまご紹介にあずかりました滋賀大学の青柳と申します。私は江戸時代の交通、旅行の研究をしています。江戸時代は旅行が盛んだったので、当時の旅行者が作成した記録、旅日記や道中記、紀行文と呼ばれる史料が各地に大量に残されています。このような研究をしていると、例えばどこかで報告をして欲しいと言われても、その地域を通った旅日記さえあれば、ある程度の要求に応えられます。今回も松葉さんから若狭で話をしたいと言われて、



「ああ、いいですよ」とわりと簡単に引き受けたのですが、史料を探してみると若狭についての旅日記、道中記を残しているのは、ほとんどが西国三十三所順礼を行った人々です。

松葉さんが作られた資料集、私は講演者なので前もっていただいたのですが、素晴らしいお仕事で 40 ぐらいの旅日記、道中記の若狭を通行した部分を書き抜いて編集しています。順礼の史料でお探しになったと思うのですが、若狭で通行しているところは、図 1 で見れば、松尾寺から高浜、和田、本郷、小浜と来て、それから遠敷、日笠、熊川と通り、近江に抜けて竹生島へ詣でるとい、西国三十三所の 29 番から 30 番へ通る、つまり丹後街道と若狭街道にほぼ集約されます。若狭国内のそれ以外の場所を通っている旅日記の類が、実はなかなかないことに、報告を引き受けてから気づきました。今日、美浜町でお話しをするのに美浜町の記録がなかなか出てこないということで焦ったのですが、改めてちゃんと探すとあるものです。

本日は、まずは江戸時代の最も一般的な順礼ルートを通った女性の順礼の記録、次に美浜町も通りますが、全国各地を修行して歩いた修験が若狭国内をかなりくまなく巡っている記録があり、これもご紹介します。そして、これも若干変わり種ですが、大坂の商人が仕事の都合で若狭を訪れざるを得なくなり、大坂から鯖街道を北へ向かい熊川を経て小浜、それから高浜、和田へ向かうという、順礼とは逆コースを通った記録がありますので、順礼、修験、商人によるこれらの記録を読み解きながら、彼ら、彼女らがいったい若狭で何を見聞きしたのか、何に関心を示したのかといったお話しをしたいと思います。



図 1 正保国絵図に描かれた若狭の街道

1. 西国三十三所順礼の旅

(1) 江戸時代の順礼について

まず、西国三十三所順礼の旅ということで、

29 番松尾寺から 30 番宝巖寺（竹生島）へと向かいますが、その際に辿るコースは高浜から本郷、小浜を経て、遠敷、日笠、熊川へと抜けるのが一般的です。

江戸時代はいわゆる観光旅行、名所旧跡を廻り、地域の美味しいものも食べるという旅がかなり盛んで、その中でも西国三十三所順礼は伊勢参宮や京都・大坂見物とセットになりやすい。



図2 三井寺女人詣の図（『近江名所図会』）

順礼は神仏に願を掛けるということで、本来は宗教目的であったのですが、あるいは順礼という名目だと村の外に出しやすいということで、地域が窮乏した際に一種の口減らしのような格好で出されるケースもあるみたいです。また、病気などで家では養えないという人が順礼に行かされることもあったようで、若狭で行き倒れた人の供養塔があるそうですが、そのようなケースであったのかもしれない。ただ一方で、わりあい気楽に旅行の感覚で旅する人も順礼の中には結構いたようです。

江戸時代の順礼が描かれている図として、近江の三井寺の女人詣での図がありますので、ご紹介します（図2）。『近江名所図会』に出てくるものですが、三井寺は三十三所順礼の1か所で、正確には三井寺の中の観音堂が順礼の札所になるのですが、実は三井寺は江戸時代、中心となる部分は女人禁制、女性がみだりに境内に入ることができないわけです。しかし、旧暦の7月15日はそれが解除されるということで、大勢の女性達が集まります。これを女人詣でと言っていたわけですが、背中に文字が書かれている笈摺を着用しているのが、誰が順礼か一目でわかります。

（2）西村美須『多比能実知久佐』の旅

このような女性の順礼の1人として江戸時代の終わり頃、桜田門外の変が起きた1860年、西村美須という女性が作成した『多比能実知久佐』という名の紀行文をまず最初に紹介します。

西村美須という女性は、生まれは伯耆国の日吉津村、現在の地名で言えば鳥取県西伯郡日吉津村の石原家から出雲国の母里、現在の島根県安来市伯太町の母里の西村家に嫁いだ女性です。母里の西村家で長らく生活していましたが、夫や娘に先立たれ、60歳を過ぎてから世の無常を感じたということや、夫や子供がいなくなり比較的身軽になったということもあったかもしれませんが、美須は一大旅行を計画します。西国三十三所と合わせながら、京都、鎌倉、そして西国順礼としばしばセットになる善光寺などを一気に巡るという、都合158日間におよぶ日本全国順礼の旅を企画するわけです。

結局、彼女が辿ったコースは、西国順礼と合わせて京都、鎌倉、伊勢神宮、善光寺、そして北は日光東照宮に及び、1860年という時代も反映して、この頃にはもう開港していた横浜の外国人居留地なども見物しつつ、富士山にも登ります。

富士山は江戸時代、いわゆる女人禁制で、2合目ぐらいまでしか平常時は登れないわけですが、1860年は60年に1度の庚申年で、その年は制限範囲を緩めるということで、万延元年にはそれを一挙に8合目まで緩めることになったので、女性の登山客たちが殺到するのですね。図3は

1860年に江戸で刷り出された浮世絵ですが、庚申年の富士登山を宣伝する内容で、女性がちゃんと描き込まれています。この年は女人登山が大流行という年で、美須もそれなら登らずにはおれまいということで、急遽、富士登山に行ったということです。

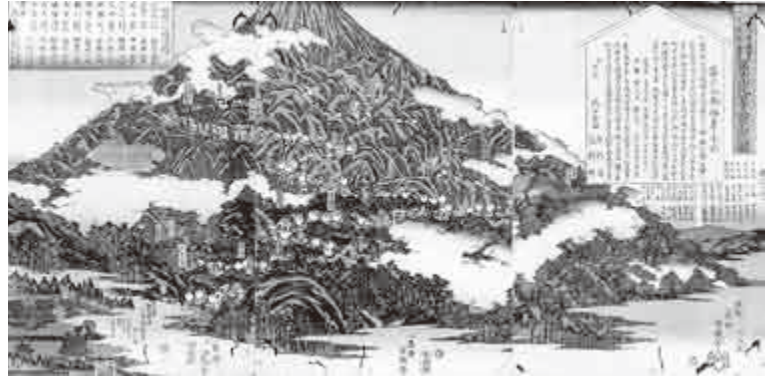


図3 富士山北口女人登山之図（落合芳幾、万延元年）

何とも逞しい女性であったわけ

ですが、この人の残した記録が『多比能実知久佐』というとても面白い史料です【史料1】。ただ、この史料は『日吉津村誌』という鳥取県の自治体史でしか翻刻されていません。それに基づき、お話ししたいと思います。

ところで、女性による西国三十三所順礼の史料は、何冊か確認できています。例えば、手近なところでは私が勤務している滋賀大学経済学部附属史料館で保管している彦根出身の自芳尼という、歳がいつから出家し、順礼の旅に出るという人ですが、この人が残した安政元年の『西国順拝名所記』、あるいは国学にも関わっていた岩佐由衛という人の『西国道の記』という記録など、いくつかあります。

まず、西村美須の『多比能実知久佐』を読み解いていきますが、この後、私が引用している史料は、全て旧仮名遣いを現代仮名遣いに直し、送り仮名やルビを適宜、施しています。原文そのままではないことにご注意ください。

（3）『多比能実知久佐』田辺から八百姫神社まで

さて、フォーラム前の9月、松葉さんの計らいで今回の報告に関わるところを巡見しました。松尾寺ではお彼岸で屋台が出ていましたが、この日は台風が近づき、天気がよくなかったので、大急ぎでの巡見でした。『多比能実知久佐』で美須が松尾寺に行った頃は、1860年8月18日、「橘坂と云うにて中食をしまいけるに、茶屋のおきな町嚙にきょうおうし、漬物等くれければ、いと嬉しくして、つと〜に礼をのべて」、まず舞鶴市の田辺城下を出発し、吉坂で昼ご飯を食べると、茶屋の翁が丁寧に饗応してくれて漬物をもらって大変嬉しいとあります。美須の日記では彼女が女性なため、ところどころで冷たいあしらいを受け、残念で悔しいとたびたび書いているのですが、ここでは親切にされて嬉しかったと書いています。

「本堂南向五間四面寺領二十石、真言宗本尊馬頭観音、青葉山松尾寺と号す、山中ながら二階造りにて結構なる御堂なり」、この頃の旅日記にはお寺に詣でると、建物の形状や朱印地、領地を何石もっているかということわりとよく書くのですが、松尾寺についても、このことを正確に記録しています。「労れ足を引ずりて、高浜と云う処に宿を求め」、旧暦で8月ですから暑かったようで、高浜あたりまで結構歩いて、疲れた足を引きずって、この日は高浜で一泊しています。

少し飛ばしますが、「それより小浜近き所に至る、此の辺とて田は沼にて土深深と見えて、女の高く尻をかかげて田を植るさま、あまり見ぐるしかりければ、早乙女のふけ田に脛の高かかげ岩戸かくれも水鏡見る等と言ひ出」、小浜のあたりでは田んぼが深いと言っています。むしろ、これはお教えいただきたいのですが、小浜周辺でこのような深い湿田があったのでしょうか。このあたりの田畑の様子をお教え願いたいと思います。美須はこれが珍しかったようで、自分と同

【史料1】万延元年（1860）、西村美須『多比能実知久佐（たびのみちくさ）』

（8月18日）ここ（田辺城下）を立出で（中略）橋坂（吉坂）と云うにて中食をしまいけるに、茶屋のおきな（翁）町嚙にきょうおう（饗応）し、漬物等くれければ、いと嬉しくして、つとへに札をのべて、坂道にかかり、程なく大悲の宝前に至る

本堂南向五間四面寺領二十石、真言宗本尊馬頭観音、青葉山松尾寺と号す、山中ながら二階造りにて結構なる御堂なり、札を納め押し終えて二王門にて暫く休み

涼しさに 立つ気忘れぬ 二王門

門を立出で、横に下る坂は五拾町（約 5.5 km）にて石高く、大いに難儀なる道なり、三拾町（約 3.3 km）程行きて中山観世音（中山寺）へ参詣す、此処は丹後・若狭の境なり（中略）勞れ足を引ずりて、高浜と云う処に宿を求め、翌十九日はやく起出（中略）本郷と云う処の沖に、青島、沖の島と云う島山、見えつかくれつ色々景色の替り行く様、よき眺めなり（中略）それより小浜近き所に至る、此の辺とて田は沼にて土深深と見えて、女の高く尻をかかげて田を植るさま、あまり見ぐるしかりければ、

早乙女のふけ田に脛の高かかげ 岩戸かくれも水鏡見る

等と言い出、歩く内、城下へ一町ばかりになりし頃、大なる茶見店（ママ）あり、此の上に八百姫大神とて立岩あり、いざや参詣せんとして石段を登るに、七段ありて本社あり、これすなわち八百比丘尼なり、石段二階下りし所に棧敷を掛、楽屋をしつらえ、芸者舞子あまた集り、様々の興をなす、是、祭礼故なり、人の群集大方ならず、社家に行きて開帳を願うに、すなわち今日は祭礼故、法楽のよし申すゆえ、有難き事なりとて是を拝す、先八百姫の御姿、二段の竹、三段の竹、龍のあぎと（顎）、鬼の牙、天狗の爪、比丘尼の行脚の節持ち給う両面の鏡、食し給える人魚の形、色々拝して、

八百姫の徳 あらわれて夏神楽

それより小浜に至る、綺麗なる城下なり、此の所に組屋六右衛門（正しくは「六郎左衛門」）といえる疱瘡の守を出す家あり、是を尋ねて守を受る、至って旧家なり、町人頭にて七人扶持、塩の運上を取る、一俵に付て半銭宛なれども、年中には金二百両位の得意のよし、学講にて名高き家柄なり、諸人は是を敬うとかや

是よりおにう（遠敷）ひかさ（日笠）に至るに、日も早傾きぬれば、天徳寺に宿らんとせしに、嘶しに紛れて行き過ぎ、くま川の駅に至る

亭主嘶には、閏三月二十八日には大なる氷降りて、瓦を砕き、人命を損じたり、小浜にては二人頭上に穴あき死せしとかや、此の処の名物は隈川（熊川）葛とて、多く製して是をひさぐ、今日の道筋本郷より小浜の間に、かと（加斗）の松原とて綺麗なる処あり、八町（約 880m）の間に蟻一つも居らず、弘法大師昼寝し給いしに蟻多く来てせりければ、かゝる綺麗なる所に居る事人の妨げなりとて封じ給う、よって今に一つも居らずとぞ（中略）

翌二十日、雨天なれども草鞋をきめ、宿を立出で、大方町はづれしと思う所に番所あり、若狭より女の出る事を禁じて立置所なり、昨日茶屋の店の主大そうに云う故、気味あしく思い、よく問う、宿の主は手悟く云う故、大いに安心し、先人をつかいて訳を言わせければ事なく通らしぬ、一里ばかり行きて山中の御番所、これは御公儀の御関所なり、是も安く通る、されども水戸領の者は皆追い返す、気の毒の事なり、わけて坊主は至って面倒なり、何国の者にてても皆しかり（同年3月の桜田門外の変の影響か。中略）

何国にてても関所にては女ばかりひどくとがむる故に

女さえ見ればいじめる役人も さまで嫌の顔つきでなし

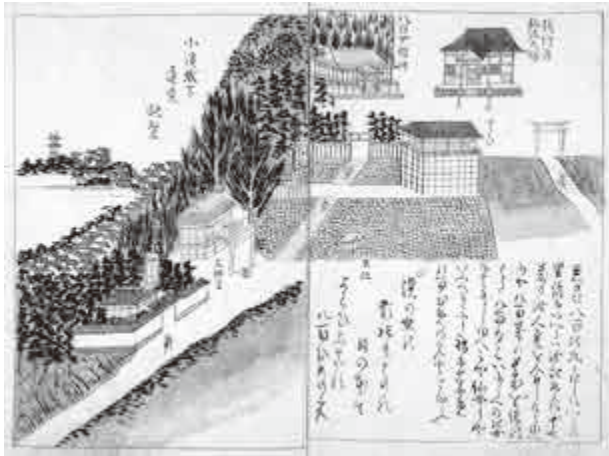


図4 舞鶴市糸井文庫『わかさの記』八百女神



写真1 神明神社

じ女性が働いていますが、どうも見苦しいみたいなのを言って、セクシャルな内容の句を詠んでいます。

この報告を準備しながら参照した『若狭之紀行』は国立国会図書館が所蔵しているのですが、『わかさの記』という同じ内容の史料が舞鶴市糸井文庫にも保管されています。その挿図を見ながら(図4)、ひとまず美須が八百女、八白姫神社にどのようにお参りしたのか確認します。

「八百姫大神とて立岩あり、いざや参詣せんとて石段を登るに、七段ありて本社あり、これすなわち八百比丘尼なり、石段二階下りし所に栈敷を掛、楽屋をしつらえ、芸者舞子あまた集り、様々の興をなす、是、祭礼故なり」、図のように高い位置に神社があり、当時は小浜あたりの芸者さんや舞妓さんが集って、賑やかに演奏などを行っている、お祭りの時に行ったから実に賑やかだと美須は言っています。

「人の群集大方ならず、社家に行きて開帳を願うに、すなわち今日は祭礼故、法楽のよし申すゆえ、有難き事なりとて是を拝す、先八百姫の御姿、二段の竹、三段の竹、龍のあぎと(顎)、鬼の牙、天狗の爪、比丘尼の行脚の節持ち給う両面の鏡、食し給える人魚の形、色々拝して」、社家とは神社に所属している宗教者で、堂を管理している人ですね。ここで開帳をお願いしたところ、祭礼ですからご自由にどうぞみたいなことを言われ、まず八百姫の姿を描いた絵を見て、それから二段の竹、三段の竹、実はこれらについてはよくわからないのですが、龍の顎の骨というのは化石でしょうか。鬼の牙やてんぐの爪は、八百比丘尼に何の関係があるのでしょうか、さまざまなものが展示されています。

八百比丘尼は全国を順礼して巡ったという伝説になっていますが、その際に彼女がもっていた鏡もあり、そして人魚を食べたおかげで彼女は八百歳の長寿を保ったという、その人魚の姿を伝えるものも展示されていた。それらをいろいろと拝して「八百姫の徳 あらわれて夏神楽」といった一句を詠んでいます。

私が国立国会図書館で探してきた道中案内記『西国三十三所道しるべ』という史料に、「八百姫のまもり・竜宮の鏡・姫の御影・人魚の絵」と、八百姫の社のさまざまな宝物が挙げられているのですが、これも実は舞鶴市糸井文庫に同様

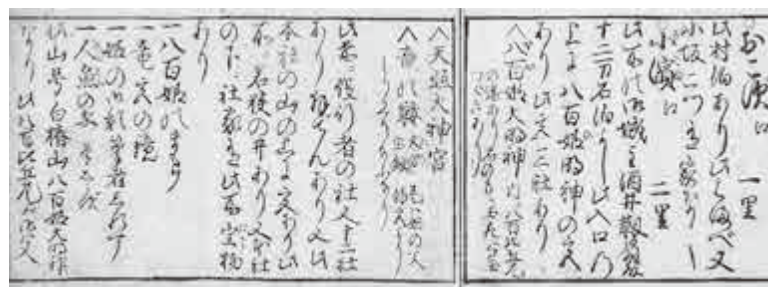


図5 舞鶴市糸井文庫『西国三十三所道しるべ』

の史料があります(図5)。この『西国三十三所道しるべ』の作者は美濃国の養流軒一篁子という人物で、作成は元禄3年(1690)ですが、版本として本屋で販売されています。それに載って西国順礼の道しるべが世間に知れ渡っていて、なおかつ小浜に来た人は八百姫神社に詣でる人が多いということで、その情報もかなりいろいろと書かれています。こうしたものが既に元禄時代には成立し、なおかつ本屋で一般的に売られていた。このような案内記の中で宣伝されていたことがわかるわけです。

神明神社(写真1)の境内摂社、八百姫神社、このお宮は現在の小浜市青井にありますので、松尾寺での参拝を済ませた人が西から小浜方面に来ると小浜の入り口あたりの場所にあたります。西国順礼の人達はここにかなり立ち寄ったみたいで、資料集にも八百姫に関する記述が出てくる頻度が高くなる。かなり定番のコースとなっていたのですが、ここがまた少し不思議ですが、空印寺のことがほとんど出てこないですね。逆に、いつ頃から空印寺が有名になっていくのかということ調べる価値があるのではないかと思います。

早い時期から八百姫神社が知られていたのは、元禄2年(1689)、『^{きし}己巳紀行』で貝原益軒が「小浜の町の西南三里(約12km)計前の、高き所に社有。熊野山と号す。本社は神明也。其少西の方に、役小角の像有。脇社に、白比丘尼又号八百比丘尼十八歳の影有」といったように立ち寄っていることから判明します。貝原益軒の紀行文も本屋で一般的に販売されていたので、八百比丘尼関連の情報はかなり世間で有名で、全国に広まっていたと考えてもよいと思います。また、情報を得た順礼が小浜に来ると立ち寄るといったサイクルもあったのではないかと考えます。

(4)『多比能実知久佐』小浜から熊川まで

美須の日記に戻りますが、美須はここでの参りを済ませた後、小浜の町に入ります。「此の所に組屋六右衛門といえる疱瘡の守を出す家あり、是を尋ねて守を受、至って旧家なり、町人頭にて七人扶持、塩の運上を取る、一俵に付て半銭宛なれども、年中には金二百両位の得意のよし、学講にて名高き家柄なり、諸人は是を敬うとかや」、正しくは組屋六郎左衛門で、疱瘡は天然痘のことで、その病防ぎのお守りを出している家があるということで、美須はお守りももらっています。

組屋と言えば小浜を代表する古来からの商家の一つで、旧家ですが、そこで疱瘡のお守りを配布しています。旅日記の中で小浜でこの守り札をもらったという記録は、今のところ西村美須の例しか見たことがありません。

ただし地元では有名であったようで、例えば寛文2年(1662)から天和3年(1682)にかけて成立した1660年代の地誌、『若狭国伝記』に記述があります。これは漢文を読み下したのですが

【史料2】、日本海側をあちこち行ったり来たりしていた、組屋自身はかつては大陸方面とも貿易取引をしていたとの伝承のある家ですので、日本中を股にかけて行き来をしていたのだと思います。そうしたところ、乗せていってくださいと2人の老人が現れたので、組屋はそれを心よく乗せてあげ、船の中でもてなしをしています。すると、実は自分達は疱瘡神である、ここまでのご恩は決して忘れない、もてなししてくれてありがとう。あなた方、組屋の子孫は疱瘡に罹ることは今後一切ない。そして、あなたの姓と名前を札に書いて門戸に貼り付けなさい、そうすれば疱瘡を防ぐことができると伝えられたので、組屋は自分の名前を記した札を人にも配って、疱瘡守りとして役立てるようになったという伝承が残っています。

組屋の史料は小浜市立図書館に保管されているようですが、『疱瘡守略縁起』という史料にも似たような記述があり【史料3】、こちらは少しバージョンが違って、永禄年間(1558~1570)

【史料2】寛文2-天和3年(1662-82)頃、桜井曲全子『若狭国伝記』岩瀬本、原漢文これ是組屋先祖商舶に乗り、渡りて秋田坂田(酒田)、下は越前より奥州に至る迄下ると謂う也…翁と姥と二人来て、便船を請う、組屋、老人請うを戻さず、既にこれに乗る、舟中饗応他に異なり、またある湊に著き、翁姥云う、我是疱瘡の疫鬼也、頃日の懇情忘却すべからず、汝子孫において疱瘡に悩むべからず、汝の姓名を札に書き、門戸に押すべし

【史料3】年未詳「疱瘡守略縁起」(組屋家文書、小浜市教育委員会蔵)
永禄年間(1558~1570)、航海中に遭難しそうになった当時の当主六郎左衛門は、どこからか現れた一人の老人の助けで危機を脱しました。帰港後、六郎左衛門が老人を自宅に招いてもてなすと、老人は「我ハ疱瘡を司る神」といい、以後、疱瘡から一族を守護すると約束し、そして六郎左衛門に守札のつくり方を伝授して去っていった。

(福井県文書館HP「2017年8・9月 月替展示 概要 the Archive of the Month」より)

ぐらいに、組屋の船が海の上で遭難しそうになって、そこに忽然と老人が現れ、その導きによって船は遭難の危機を脱し、港に帰ったということで、六郎左衛門がありがとうとその老人を自宅に招いてもてなしたところ、実は自分は疱瘡を司る神であって、もてなしの恩に報いるために疱瘡から一族を守護するという約束をして去っていき、その時に守り札の作り方を伝授されたということです。

互いに少しニュアンスが違いますが、少なくともこの頃の小浜の地域では、どうも組屋と言えぱ疱瘡守り札ということが広まっていたみたいで、それをたまたま西村美須が書き留めたということになるかと思えます。

さて、美須は小浜の町を出て熊川に向かいます。「是よりおにうひかさに至るに、日も早傾きぬれば、天徳寺に宿らんとせしに、嘶しに紛れて行き過ぎ、くま川の駅に至る」、この道中、美須は1人では旅をしていません。連れの荷物持ちとして男性を1人同行させています。また、この頃の旅行者は道中何かと危険があるということで、方向が同じ旅行者と連れ立って行くことも多く、このような人々とぺらぺら喋っているうちに天徳寺を通り過ぎたので熊川に泊まることにすると書かれています。

ちなみに、舞鶴市糸井文庫の『西国順礼略打道中記』は西国順礼の道筋を味のある絵と独特な文章で紹介している、かなり貴重で面白い道中記ですが(図6)、各村、各宿の宿泊施設の評価も書かれています。これを見ると、天徳寺には確かに泊まる場所はあるのですが、「見れば三軒あれども汚い」と物言いが率直です。それに対して熊川は「やどや小休み 見ればこのところは中」、まあまあですと書いてあり、美須も熊川まで行ってよかったのではないかと思います。若狭町天徳寺在住の方が会場におられたら申し訳ないのですが、そんな感じで熊川に泊まることになりま

す。
現在の熊川番所は写真2のように復元されていますが、番所の近くには町並みもあって、これが宿場、宿駅として機能していました。「亭主嘶には、閏三月二十八日には大なる氷降りて、瓦を砕き、人命を損じたり、小浜にては二人頭上に穴あき死せしとかや」、宿の亭主の話によれば、閏3月28日に雹ひょうが降ってきて2人が亡くなるという事件があったと聞かされます。このような旅日記の記録は事実を伝えていることも多いです。

というのは、福井県文書館刊行の『福井県文書館資料叢書』に小浜商人の井筒屋勘右衛門の日記があるのですが【史料4】、雹が降ったという万延元年（1860）の箇所を見ると、3月晦日、閏3月ではないのですが、3月末の夕方にかにも不穏な天気になり、真っ暗になったところ、玉子ぐらいの大きさのすさまじい雹が降ってきて、9～10 cmほど地面に積もり、雹が貫通した屋根すらある、これが頭に当たれば確かに亡くなります。

このような記録があって、これが万延元年3月のこととすれば、美須が旅しているのは8月で、5か月前の事件としては生々しい記憶として残っているわけですね。美須の文章にはかなり信憑性があり、井筒屋の日記によって裏づけることができます。



写真2 熊川番所



図6 舞鶴市糸井文庫『西国順礼略打道中記』
おにう・ひかさ・天徳寺・熊川

【史料4】小浜の米穀商・井筒屋勘右衛門の日記

同（万延元年3月）晦日申上刻（午後3～4時）頃より大雷鳴、今にも落ち候哉と存じ候位、段々大黒雲舞い下り、夜の模様相成り候処、大ひやう（雹）降り、大きさ玉子の如く、凡そ半時（1時間）斗に三・四寸（約9～12 cm）斗溜り申し候て、誠に町中如何相成り候哉、一統恐れ居り申し候、屋根瓦われ檜皮屋根は突き通し候処もこれ有り、古今稀成る大變に御座候

『福井県文書館資料叢書3 若狭国小浜町人の珍事等書留日記』2009より。青柳読み下し）

また、「今日の道筋本郷より小浜の間に、かとの松原とて綺麗なる処あり、八町の間に蟻一つも居らず、弘法大師昼寝し給いしに蟻多く来てせゝりければ、かゝる綺麗なる所に居る事人の妨げなりとて封じ給う、よって今に一つも居らずとぞ」、美須は本郷と小浜の間の加斗の松原を紀州の加太の浦のように美しい風景と称えています。小浜市荒木のあたりで、今は松くい虫の被害で松原の松は姿を消してしまったということですが、美須が少し面白い伝承を書き留めています。

加斗の松原では、八町、880mぐらいの間に蟻が一匹もない、これは弘法大師がここで昼寝をしていた時に蟻に噛まれたので、こんなきれいなところに蟻がいるのは人の助けにならんということで蟻を封じてしまった、よって今でも蟻がないという伝承です。弘法大師もかなり大人気ないことをしていますが、こんな変わった伝承があります。

美須の日記に戻ると、「翌二十日、雨天なれども草鞋をきめ、宿を立出で、大方町はづれしと思ふ所に番所あり、若狭より女の出る事を禁じて立置所なり、昨日茶屋の店の主大そうに云う故、気味あしく思い、よく問う、宿の主は手悟く云う故、大いに安心し、先人をつかいて訳を言わせければ事なく通らしぬ」、熊川の番所では若狭国から出る女性を厳しく改めると記しています。昨日、茶屋の店の主に取り調べが厳しいですよとかなり言われたので、気味が悪く思い、いろいろと質問したところ、宿の主はこのように通れば大丈夫です、みたいなことを言ってくれたので、それで安心して、お供の男性かと思いますが、これをまず先に遣って「自分は西国順礼の途中で」と訳を話して、わりと簡単に通り過ぎることができました。

熊川番所の女性改めについては、また後で少しお話ししますが、「一里ばかり行きて山中の御番所、これは御公儀の御関所なり、是も安く通る、されども水戸領の者は皆追い返す、気の毒の事なり、わけて坊主は至って面倒なり、何国の者にては皆しかり」、一里ほど行くと近江側には山中の関所があります。これは幕府が設置して朽木氏が管理している関所ですが、これも簡単に通れた、意外と取り調べが厳しくない、しかし水戸領の者は皆追い返されていて、気の毒だとあります。これは1860年、桜田門外の変があった直後で、水戸の関係者の通行についてはかなり神経を尖らせている様子うかがえるわけです。これは世相ですね。

美須は熊川番所と山中の関所を無事に通って、「何国にては女ばかりひどくとがむる故に女さえ見ればいじめる役人もさまで嫌の顔つきでなし」、いつもは女性ばかり取り調べられるが、今回は簡単に抜けられたということで、一句、嫌々ながら仕事しているようには見えないうえ、役人達も案外楽しいんじゃないのと女性の立場から言っているわけですね。

さて、熊川での女性の改めですが、いろいろな地誌や紀行文に証言が残されています。明和4年(1767)の『稚狭考』を引いておきますが、「本国に女の旅行を制禁あり。…女の出るを改めて入来たる人を禁ぜられず。但し西国順礼の女は禁ぜらるゝに及ばず、其証として御詠歌をうたう事なり」、これは入り鉄砲、出女みたいな言い方でよく説明されますが、藩の立場として女性の出国を禁ずるのは、当時、子供を産むということを期待されていた女性が藩の外に出る、つまり女性だけではなく将来産む子供もいなくなると人口減少につながる、人口管理の目的があった政策ではないかという指摘もされるところですが、小浜藩はわりと女性の出国を厳しく取り締まっていますね。ただし、西国順礼については通行が多く、小浜藩領の人間ではないので出国は禁止されない、番所で御詠歌を歌って見せろというように、本物の順礼かどうかを判断して通過させていたという記事があります。

美須が宿の主熊川番所の通り方をいろいろと説明されたところなのですが、実は『西国順礼略打道中記』には男女二人連れで通る際に役人にどう回答すればよいかという想定問答が付いてい

ます。どこに住んでいるか、いつから順礼に出ているのかと聞かれて、その女は誰だと言って、奥さんであれば奥さん、同行者であれば同行者と答えなさいみたいなことが書いてあるわけですね。手形をもっているか、はい持っています。これへ出せ。出して、これに相違はあるまいと役人が言って、通れと言わずに、通るであろうと言うということで、この言葉を合図に通ってよいということですが、そこまで細かく指示してあるわけですね。これは本当に旅行マニュアルですね（図6、102～104頁翻刻史料参照）。

2. 修験による修行の旅

(1) 『日本九峰修行日記』

続きまして、修験による修行の旅。使う史料は、文化9年から文政元年、1812年から1818年にかけて、野田成亮という名前もありますが、泉光院という修験が日本全国を旅して巡った修行の記録『日本九峰修行日記』です。

泉光院は当山派の修験です。醍醐寺三宝院を本山とする修験寺院の住職で、山中で修行を積むわけですが、図7は泉光院の図ではなく、当時の当山派山伏を描いた図で、このような雰囲気であろうということです。当山派の山伏はこのように剃髪しています。泉光院の晩年の肖像画は頭を剃っていますね。

泉光院は、佐土原、現在の宮崎県宮崎市の真言宗安宮寺の住職でした。宝暦6年（1756）に生まれ、天保6年（1835）に亡くなっています。彼は隠居した後、文化9年から6年2ヵ月をかけて全国各地を托鉢して巡ります。彼は佐土原では領主と血縁にあるかなり位の高い修験ですが、それが一々村を巡って托鉢しながら旅を続けるという、厳しい修行の旅に出るわけですね。

数多くの寺社を訪ね、彼は山岳修行を好んだので、英彦山・石鎚山・箕面山・金剛山・大峰山・熊野山・富士山・羽黒山・湯殿山、全国の霊山九峰で修行を行うという計画を立てて出発します。この記録は結構有名で、『日本庶民生活史料集成』2巻（1969）に全文が載っていますが、興味ある方は石川英輔さんの『泉光院江戸旅日記』（2014）という文庫本も出ていますので、こちらもご覧ください。

泉光院は、文化11年（1814）8月17日に若狭に入り、9月5日頃までかけて若狭国内の丹後街道沿いや三方五湖周辺をくまなく巡回しています。托鉢しながらの旅ですので、順礼や旅行者が普通は行かないところまでかなり入り込んでいるわけですね。

この地域では「朝暮御馳走」といった記

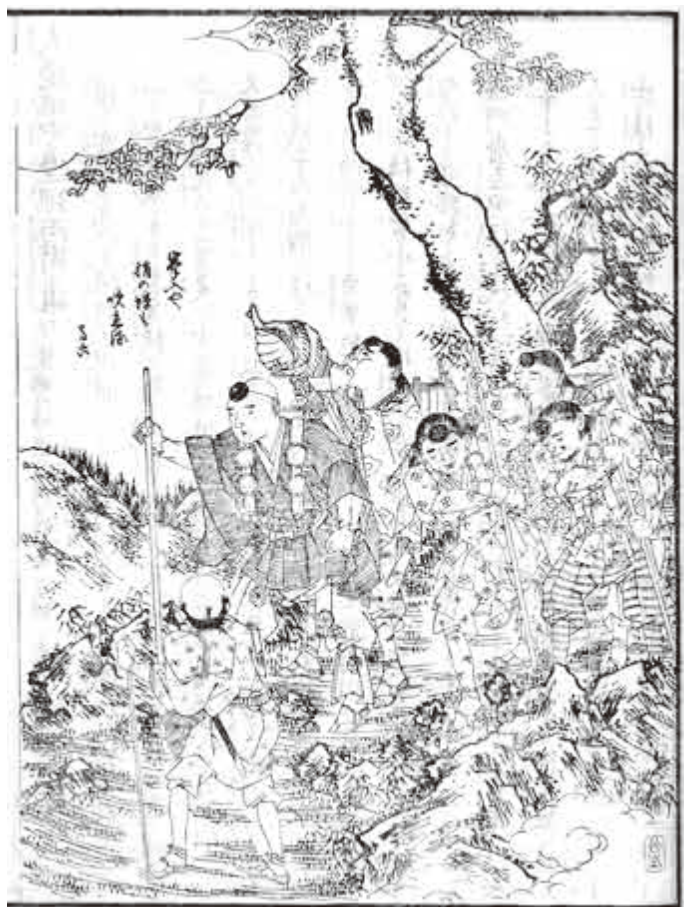


図7 修験の峰入り（大峰登山）（『西国三十三所名称図会』）

述が多く、かなりよい待遇を受けたと書かれています。まず西から、松尾寺を参詣した後、高浜、和田、本郷、小浜というコースを辿ります。小浜ではやはり八百姫神社にもお参りし、若狭一宮にもお参りをしています。国分寺にも行っています。東市場村に泊まり、この間、和田では「当村白米売買の家なし」と白米を売ってくれないと言っています。当時の旅行者は、普通は宿屋でお弁当を作ってもらってそれを持っていくのですが、では今日は昼御飯は弁当ではなく、道中の茶屋で飯でも食おうと思って出掛けたところ、「途中茶屋にて一膳飯服す筈の処、田舎なれば一

【史料5】《文化9年～文政元年（1812～18）、泉光院（野田成亮）『日本九峰修行日記』》

（文化11年8月）二十日 晴天。東市場村出立、朝辰の下刻（午前8～9時）。近江国と越前の分れ道あり。越前の方へ赴く、道々托鉢す。野戸の村（能登野村）甚左衛門と云う宅へ宿す。此間四里（約16km）。朝暮御馳走あり、松茸等種々煮物あり。

廿一日 晴天。野度の村朝托鉢、巳の刻（午前10時頃）出立。藤井村と云うへ五十丁（約5.5km）計り行き、笈頼み置き托鉢す。今晚は一宿せよと申さるるに付、未だ未の刻（午後2時頃）なれ共休息の事とす、勘左衛門と云う宅へ一宿す。

廿二日 半天。道々托鉢。トイ浜村（鳥浜村）助右衛門と云う宅へ宿す。此間半道（約2km）計り、藤井村に向陽寺と云う寺あり、禅宗、先年当所狼多く出て人を害す、因て和尚愍み玉い、狼を縛し骨を抜き玉いしより当山に狼出る事なしと云う。和尚の尊像松の根一間計上ばかりの傍の処に安坐し玉えば山犬下より手を合せ仰ぎ居る画像あり。

廿三日 雨天。トイ浜滞在。ムカサ村（向笠村）と云うに托鉢に行き昼過帰り休息す。（中略）

廿五日 晴天。トイ浜出立、朝辰の上刻（午前7～8時）。方角違いなれども托鉢かたがた見物として半道計りのナリ手村（成出村）と云うに笈頼み置き托鉢す。今日修業先にて振舞あり、当処大いなる湖水（三方湖）あり、婦人一人して棹さし菱を取る、幾艘と云う数を知らず、因て一句、

菱とりや浮雲女の一人舟

此辺菱を多く取り置き朝暮飯の足しにす、又遠方迄売りに行く、当所ナリ手村長左衛門と云うに宿す。

廿六日 雨天。ナリ手村出立、辰の上刻。越前敦賀の方へ赴く、道々托鉢。此処に鵜鷄草葺不合命勸請あり（気山の宇波西神社。中略）木山村（気山村）福昌庵と云うに宿す。今日も二里計り。

廿七日 晴天。大北風。福昌庵出立、朝辰の上刻。日向浦へ行く、未だ未の上刻なれども林村彦兵衛と云ふ善根宿に宿す。朝暮御馳走あり、当村托鉢す。

廿八日 晴天。朝早瀬村と云うへ托鉢。巳の下刻（午前10～11時）出立。久々子村昼前着、饗庭大学殿と云うを尋ね行く。此仁は佐土原城下の産、親は森蔵太と云う。作障ありて浪人となり、先年京都にて叔父饗庭修理と云う医者このじんの養子となり居られたる処、妻の縁に引かされ当村へ下れり、最早廿六・七年以前の事也。予京都にて別しての知音なれば尋ね行く、折柄在宅、久し振に逢う、予が尋ね行く事は夢にも知られざりし事とて是は夢歟現つかと甚だ悦ばれたり（中略）因て三日滞留す。医職甚だ流行にて今日の世帯甚だよろし（中略）

二日 雨天。久々志村出立（中略）又山上村田辺三大夫と云うは大学殿の甥也、此宅へも見舞い昼食等出る。久々志より一里半（約6km）あり。夫より浜の手菅浦（菅浜）と云うに赴き、多右衛門と云う宅に宿す。

（中略）

四日 菅浦托鉢、巳の下刻出立、敦賀の方野上村（野神村）三郎大夫と云う宅へ宿す（中略）
夕飯は御馳走に逢う

若州侯酒井讃岐守殿（小浜藩 10 代藩主の酒井忠進）は当時京都所司代也（1808～15 に京都所司代）。一国を挙て賢君と称す。御末家一万石の御家より養子に御上りの由、当時年齢四十歳計りと云う。一国の民百姓甚だ御いたわりあり、内々にて御領内御巡見にて、困窮の者を御覧じあれば其者へ其由し御尋ねあり、故あれば御憐愍を加え玉い、御救い金米を下し玉うと云う。又文化十年酉の十月菅浦の辺大浪にて塩浜石垣皆々崩れ、其外洪水にて田畠多く破損あり、右の段京都に於て上聞に達したれば、早速御側御用人田中岩五郎殿と云うを檢分に御下しあり、且又小浜城下よりは郡奉行峯尾半七殿、代官役畠中平大夫と云うが相見え、塩浜御普請なし下され、又取立の入用銀子等下されたる由、当時京都御勤めに付御用金多く御入用に候えども、下々困難の砌折角御繰廻成され、町在方へ御用金は仰せ付けられざる由、右に付き町在方、組々申合せ、少々にてても御用金差上度御願ひ申し上げ、只今折角吟味して取り集める様子に見ゆ、御領下賤の者共迄御城下の方へ足を出して寝る事どもは決してこれ無き事也。（中略）

五日 野々村（ママ）出立、辰の上刻。越前の敦賀へ出る（後略）

飯の茶屋なし、酒肴はあれども禁酒精進なれば用うることならず」、田舎なので一膳飯屋が全然ない、酒や魚は売っているが、自分は修行中の身なので酒も飲めないし、魚を食べるわけにもいかないと言っています。米はないのに魚があるあたりが若狭の海岸らしい話かと思うわけです。

（2）泉光院の若狭での旅

小浜に辿り着き【史料 5】、「二十日 晴天。東市場村出立、朝辰の下刻。近江国と越前の分れ道あり。越前の方へ赴く、道々托鉢す。野戸の村甚左衛門と云う宅へ宿す。此間四里。朝暮御馳走あり、松茸等種々煮物あり」、文化 11 年 8 月 20 日、午前 8～9 時ぐらいに東市場村を出発し、近江国と越前の分かれ道を越前の方へ赴くとありますが、これは日笠村の、丹後街道と若狭街道の分岐点のことです。文化 13 年（1816）の日笠の道標（写真 3）には「右じゅんれい道」「左北国ゑちぜん道」と、越前への道と竹生島への道が示されていますが、泉光院は熊川に行かないで、越前方面に向かったということです。道々を托鉢をしながら街道を進んで行きましたが、野戸の村、能登野村の当て字ですが、甚左衛門のところ御馳走を受け、松茸が出されたといったことを書いています。

「廿一日 晴天。野度の村朝托鉢、巳の刻出立。藤井村と云うへ五十丁計り行き、笈頼み置き托鉢す。今晚は一宿せよと申さるるに付、未だ未の刻なれ共休息の事とす、勘左衛門と云う宅へ一宿す。 廿二日 半天。道々托鉢。ドイ浜村助右衛門と云う宅へ宿す。此間半道計り、藤井村に向陽寺と云う寺あり、禅宗、先年当所狼多く出て人を害す、因て和尚愍み玉い、狼を縛し骨を抜き玉いしより当山に狼出る事なしと云う。和尚の尊像松の根一間計上の傍の処に安坐し玉えば山犬下より手を合せ仰ぎ居る画像あり」。

21 日に能登野村を托鉢して藤井村に行き、22 日は道々を托鉢して、ドイ浜、これは鳥浜ですが、ここで泊ります。藤井村の向陽寺については、ある和尚が狼を封じてみせた



写真 3 若狭町日笠の道標

という伝承を記していますね。狼が人を悩ませているので、狼を縄で縛って骨を抜くといった、随分と乱暴なことしていますが、それ以降、狼がこの山に出ることはなかったという伝承があるそうです。これも詳しい方、ぜひ教えてください。

「廿三日 雨天。トイ浜滞在。ムカサ村と云うに托鉢に行き昼過帰り休息す。(中略) 廿五日 晴天。トイ浜出立、朝辰の上刻。方角違いなれども托鉢旁々見物として半道計りのナリ手村と云うに笈頼み置き托鉢す。今日修業先にて振舞あり、当処大いなる湖水あり、婦人一人して棹さし菱を取る、幾艘と云う数を知らず、因て一句、菱とりや浮雲女の一人舟 此辺菱を多く取り置き朝暮飯の足しにす、又遠方迄売りに行く、当所ナリ手村長左衛門と云うに宿す」。

23日に鳥浜から向笠に行き、いよいよ三方五湖方面に参るわけです。25日には鳥浜を出て、三方湖で菱を取っている女性がいる、それがよい風情であったと言っています。インターネットでも調べたのですが、三方湖では最近、菱が増え過ぎて大変とのことですね。この頃から地場産業のようになっているようです。

「廿八日 晴天。朝早瀬村と云うへ托鉢。巳の下刻出立。久々子村昼前着、饗庭大学殿と云うを尋ね行く。此仁は佐土原城下の産、親は森蔵太と云う。作障ありて浪人となり、先年京都にて叔父饗庭修理と云う医者の子となり居られたる処、妻の縁に引かされ当村へ下れり、最早廿六・七年以前の事也。予京都にて別しての知音なれば尋ね行く、折柄在宅、久し振に逢う、予が尋ね行く事は夢にも知られざりし事とて是は夢歟現つかと甚だ悦ばれたり(中略)因て三日滞留す。医職甚だ流行にて今日の世帯甚だよろし」。

少し飛ばして、28日朝、早瀬村に行き、托鉢をして、その後に久々子村に行きます。久々子には饗庭大学という人がおり、謂われがあつて佐土原の藩士から浪人となり、京都で叔父さんの養子となって、医者となったという人物です。それが奥さんの縁で京都から久々子に移り住み、医者を開業しているということで、同じ佐土原の人間で、京都でもいろいろと知り合いであつたので、泉光院は饗庭を訪ねていきます。突然の来訪をととても歓迎してもらえたようです。

美浜町で托鉢し、滞在した村は気山(179戸・793人)、久々子(115戸・450人)、早瀬(203戸・1042人)、日向(133戸・697人)と、19世紀初頭の美浜町域の村々の中でもわりあい戸数、人口が多いところです。むやみに托鉢しているのではなく、豊かな村を狙って托鉢に行っているのではないかという気がします。

そして、「四日 菅浦托鉢」、今度は菅浜に行くわけです。

「若州侯酒井讃岐守殿は当時京都所司代也。一国を挙て賢君と称す。御末家一万石の御家より養子に御上りの由、当時年齢四十歳計りと云う。一国の民百姓甚だ御いたわりあり、内々にて御領内御巡見にて、困窮の者を御覧じあれば其者へ其由し御尋ねあり、故あれば御憐愍を加え玉い、御救い金米を下し玉うと云う。又文化十年酉の十月菅浦の辺大浪にて塩浜石垣皆々崩れ、其外洪水にて田畠多く破損あり、右の段京都に於て上聞に達したれば、早速御側御用人田中岩五郎殿と云うを檢分に御下しあり、且又小浜城下よりは郡奉行峯尾半七殿、代官役畠中平大夫と云うが相見え、塩浜御普請なし下され、又取立の入用銀子等下されたる由、当時京都御勤めに付御用金多く御入用に候えども、下々困難の砌折角御繰廻成され、町在方へ御用金は仰せ付けられざる由、右に付き町在方、組々申合せ、少々にても御用金差上度御願ひ申し上げ、只今折角吟味して取り集める様子に見ゆ、御領下賤の者共迄御城下の方へ足を出して寝る事どもは決してこれ無き事也。」

今回、調べていて面白かったのが、若州侯、つまり小浜藩主の酒井讃岐守、この時代の小浜藩

主は酒井忠進、10代藩主ですが、この頃、京都所司代をしていました。京都の行政上重要な役職ですが、こんな名君はいないと称されています。

御末家一万石の御家、つまり酒井忠進は敦賀鞠山藩から養子にきているので、このあたりの経緯は確かにそのとおりです。当時、年齢40歳ばかりとありますが、忠進が生まれたのが1770年で、泉光院が若狭にきた頃は44歳と、ほぼ正確なことを書き留めています。大変よく民百姓を保護している、領内を巡視した時もいろいろな施しを加えているということで、例えば文化10年に菅浜のあたりで津波があり、塩浜、塩田が破壊された時も早速、京都と小浜から役人を遣わして、その状況を検分して復興費用も分け与えたとあります。このような憐みのあるお殿様で、御用金も殿様からは町や村には掛けないのですが、地元の者達が自主的に納めている、領内の皆々は小浜に足を向けて寝ていないということも言って、尊敬されているわけです。

しかし、『小浜市史』や『福井県史』には酒井忠進のことはほとんど書かれていないのです。泉光院は、この人は御用金を取り立てなかったと書いていますが、『福井県史』を見ると、話が逆で毎年のように取り立てています。ちゃんと調べてみたいのですが、この人の先代の殿様の時に、明和の敦賀一揆や小浜で打ちこわしが起きているので、それに比べれば、という話なのか、なぜこの人が名君と呼ばれているのか、大変知りたい。

文章中に見える殿様の年齢や経歴、小浜藩の役人達の名字は正確なので、泉光院は、地元でかなり信頼のおける筋にこの話を聞いた可能性があり、実際に名君として当時、地域の中で言われていたのではないかということです。旅日記の記録をどう地元の歴史研究に生かすかということかと思いますが、少し興味をもったところです。

菅浜の製塩業は、『美浜町誌』にもかなり盛んであったという記述があります。この後、復興して明治まで製塩が続いたようです。

3. 大坂の狂歌師（商人）による商用の旅

(1) 『若狭乃記行』、『わかさの記』

最後は、大坂の狂歌師による商用の旅です。糸井文庫には『わかさの記』が所蔵されていますが、これに関しては、実は国立国会図書館に同内容の、十叟舎^{じっそうしや}笹丸という人物による『若狭乃記行』という紀行文があります。本文の冒頭には、若狭之紀行、十叟舎^{じっそうしや}麿呂と書いてあり、これが笹丸のことです。作成されたのは、文政十戌余二歳、文政12年（1829）です。十叟舎^{じっそうしや}笹丸は大坂で活動した狂歌師で、本名は立売堀中橋の河内屋武兵衛であり、生没年は不明です。ここまでしかわからなく、いろいろと調べてみましたが、彼の商売が何であったのか、万延元年（1860）の大坂昆布商仲間の史料（『大坂昆布商組合沿革』『大阪経済史料集成』6巻 1974）に「河内屋武兵衛」と、同じ名前が出てくるということしかわからなかったのです。

不詳ですが、和田のあたりの漁村と関わりがある商売であったということは、この後の記述を見ていくとわかります。なぜ彼が若狭にやってきたのかと言えば、銀の催促、つまり借金取り立てです。ついでに八百姫宮、松尾寺、天橋立にも立ち寄り、その経験に基づいて『若狭乃記行』を執筆しています。

大坂からの道筋は、大坂を出発して船で淀川をさかのぼり、伏見で上陸し、陸路を真っすぐ北へ向かい、京都の町中に入り、そこから若狭街道、鯖街道を北上していくわけです。大原や途中を通り過ぎ、朽木で一泊した後、保坂を経て山中と熊川の番所を経由して小浜に向かうというルートです。彼は順礼とは逆を辿っていくわけです。

【史料6】《文政12年（1829）、十叟舎笹丸『若狭乃記行』》 ※国立国会図書館蔵

同（10月）四日（中略。近江の朽木を出発して）山中の御関所より若狭街道にて、是迄の道と引かえ往来もおおくと賑わしかりければ、

○若狭路と聞けば心もはっきりと気付に有ぬ熊川の宿

熊川の宿より小浜迄は弓手に山は見れど、道路に上り下りなく平地成しにいかが仕りけん、俄に足痛して一足も歩行成りがたく、友なる者見かね馬かりくれば、此所を苧屋村（三宅村の集落（仮屋・三宅・市場）の一つ）と聞ければ（中略）

夫より道を急ぎ小浜の城下に出れば夕陽也、清水町檜皮屋といえるに泊る、此座敷、柱敷・鴨居・二階高欄・踏段迄黒ぬりの如くなりければ

漆もてぬりしごとくに家の内ようふき立てた檜皮屋の宿（中略）

「此たらいをいただきし女は、小浜城下にて、野婦或いは漁婦、青物或いは肴杯を入れて城下の市町中を徘徊し、魚類青物に限らず売の声分けず、たとえば鯛やかれ（鰈）、鱒にぼら、市ない市ない、青物とても此詞に準ず、多く女商人にて男はまれなり、此市ないといえる詞は市なみに売といえる詞を略してかくいう也

代呂物はこうべに高くいただけどあたい（値）は安う市ない市ない」

「此男は魚荷物をかつぎ、小浜より京へ通う商人也、上に屋ねのごとくむしろをかけしは、雨露をふせぐ用意なり、小浜より京へもまた江州大津辺へも通う

翌六日檜皮屋を立出、世井坂（勢坂か）といえる山路にかかる（中略）

元来此街道は、丹後宮津或いは成相松の尾の順礼道ゆえ、淋敷して、万事不自由なり、おお高津（岡津か）に至る（中略）

此所（本郷）にて支度ととのい、昼過頃に和田の漁村にいたる、此所に銀談の入り組みし用向き有けるゆえ、四・五軒計り掛け合けれども、一応にては調いかね、甚だ当惑の体成りければ、

○村中のむねに当るや大矢数いい通したる和田のかね言

当村にて止宿せんと問い合せけるに、当村に絵馬屋甚右衛門といえる馬借にて、然るべきようおしえけるに任せ、彼所を頼みけるに、折しも障る事有しにや、よぎなく断り申せしゆえ、すべきようなく、外に旅舎有りやと尋ねしに、主申けるは、当村にてはわれ一軒のみ也、是より半道南に当たって高浜の駅には旅舎数多有り、彼所にて止宿有るべし（中略。絵馬屋に紹介された宿屋（いわしや庄平）でも断られ、最後は船屋九兵衛の所で宿泊）先々心落ち付き、夫より髪月代をせんと髪結を尋ねしに、当駅中には只二軒也、則そを尋ね至りしに、此髪ゆいの家居、垣生のわらぶきにて、折しも徒然成りけるにや、此髪結鍬など遣い、耕作なしけるを頼み、月代なしけるに、其いたさとえがたく、又髪をゆいければ、櫛取の不束さ、され共あたい（値）は大坂と同じ事也（中略）

高浜に止宿なしける内、日毎に和田村へ行き来なしけるが、己れ黒の羽織に釦かたばみの紋付を着し、一刀さして日々歩行いたせし体を、百姓・馬士・荷かち持（徒荷持。荷物運び）・野夫、己れが体を見ては過急に道路にぬかづき、其さまいとていねい（丁寧）に頭をうなだれ敬いける、初めの程は心付きざりしが、日毎に斯の如く成るゆえ、此事どうもいかがと考えしに、己れが紋は則酒井讃岐候と同紋ゆえ、拝領の衣服着するは、由緒有る役向きの人と心得たるにと初めて心付きければ、

○百姓が辞義するもうべ殿様のけんかたばみの威にや恐れて

(中略。船屋から和田村の絵馬屋へ移る) 此絵馬屋といえるは馬借ゆえ、馬も二疋有り、頃しも秋の取り入れ頃とて、此辺都てそうぞう敷(騒々しく)、庭には稲を山のごとくつみ重ね、から棹打ち、もみ挽き杯して、又折々にはえならぬ匂いしていとむさくろし(中略)

旅の最大の目的地は、和田の漁村です。おそらく和田に融資などをして、それが滞ったので催促ないしは回収に訪れたということのようです。具体的な詳しい経緯は書かれていません。そのような理由で、和田と近隣の高浜に宿をとり、いろいろ商売向きの活動をしていますので、現地の住民の日常生活をその時に目撃しています。ただ、狂歌師なのでわりあい面白おかしく物事を書こうとします。あと、大坂の人間ですから、どうも都会の者が地方を見下すようなニュアンスがあり、どこまでリアルな体験記なのか、少し疑ってかかった方がよい部分もあるかもしれない。あとは地名に当て字が多いですね。現地で聞いたそのままを書き留めたのでしょう。

(2) 十叟舎笹丸の若狭での旅

「同四日(中略。近江の朽木を出発して)山中の御関所より若狭街道にて、是迄の道と引かえ往来もおおくと賑わしかりければ」【史料6】。若狭に入り、小浜へ向かうのが10月です。近江国内よりも若狭に抜けた後の方が随分と賑やかであったようです。さすが小浜の港を控える場所ので、やはり旅行者も商品流通も多いのでしょう。

「熊川の宿より小浜迄は弓手に山は見れど、道路に上り下りなく平地成しにいかが仕りけん、俄に足痛して一足も歩行成りがたく、友なる者見かね馬かりくれば、此所を苜屋村と聞ければ」、左手に山が見え、道路に上り下りがなく平地ばかりなのに、どうしたことか足が痛くなったようで、仮屋村で馬を借りたという、さほど面白くもないジョークを狂歌師なりに飛ばしているわけです。三宅村には街道松が残され(写真4)、若狭街道には昔は枝ぶりのよい松がたくさん植わっており、このような風景を眺めながら行ったのであろうということです。



写真4 三宅の街道松

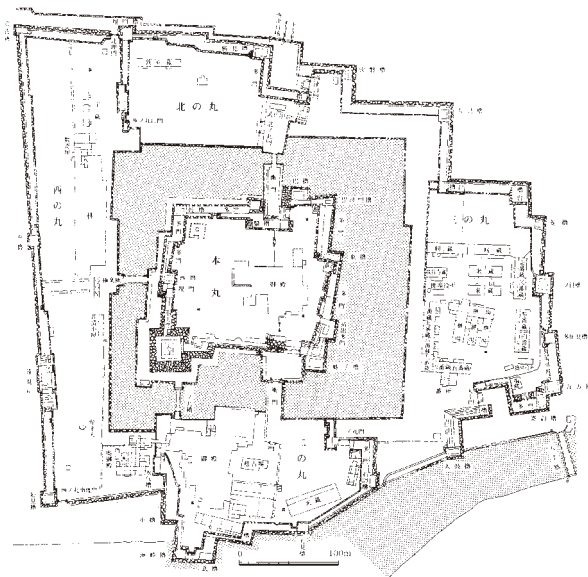


図8 江戸時代後期小浜城図



①小浜城の図



②小浜城下の魚・青物売り



③働く女性たち



④和田漁村（八百女明神から望む）



⑤高浜・青葉山

図9 舞鶴市糸井文庫 『わかさの記』

「夫より道を急ぎ小浜の城下に出れば夕陽也、清水町檜皮屋といえるに泊る、此座敷、柱敷・鴨居・二階高欄・踏段迄黒ぬりの如くなりければ 漆もてぬりしごとくに家の内ようふき立てた檜皮屋の宿」、清水町は小浜城下の西端で丹後街道沿いに位置しています。清水町のあたりは小浜でも旅籠がわりあい集中していて、延宝9年(1681)には旅籠7軒が認可されています。檜皮屋は「ひわだや喜右衛門」などの名でいくつかの道中記にも登場します。順礼がよく使う旅籠屋であったようですね。十叟舎は小浜城の図を描いていて(図9①)、海に面した水城の様子がよく表現されているようにも思えますが、これも巡見の時に現地を見てきたのですが、昔の小浜城は、堀があり、西ノ丸があり、またしばらく陸地になっていて(図8)、本丸が直接海に面していることはなかったようで、どこまで実態に即して描いた絵であるのか、少し疑問に思っています。

「此たらいをいただきし女は、小浜城下にて、野婦或いは漁婦、青物或いは肴杯を入て城下の市町中を徘徊し、魚類青物に限らず売る声分けず、たとえば鯛やかれ、鯆にぼら、市ない市ない、青物とても此詞に準ず、多く女商人にて男はまれなり、此市ないといえる詞は市なみに売といえる詞を略してかくいう也 代呂物はこうべに高くただけどあたいは安う市ない市ない」。

小浜で見かけた魚売りや青物売り、たらいに魚や青物を入れた女性達が小浜の町中で、鯛や鯆、鯆や鰯を「市ない、市ない」という声を掛けて売って回っている(図9②)、これは主に女性の仕事であるとしています。市ない、市ないと言うのが、とても印象的であったようで、この一首はわりとよくできた狂歌かと思います。「此男は魚荷物をかつぎ、小浜より京へ通う商人也、頭上に屋ねのごとくむしろをかけしは、雨露をふせぐ用意なり、小浜より京へもまた江州大津辺へも通う」、男性は魚荷物を担いで小浜から京へ通う商人で、頭上に屋根のように箆を掛けているのは雨露を防ぐということで、このような格好で鯖街道、あるいは近江に魚を売りに行ったと書いています。

『稚狭考』には、「農家の男子は田園に耕し、漁家男子は海上に釣り、其婦女の輩は小浜に出て魚をうりいただき、右手に擁し左手は空しうし、うつむきて事を弁ずる時は左右の手をはなす、戴く所の目量拾貫目(約37.5kg)にも余れり、酒米の類までにも及ぶ」とあります。

小浜から和田・高浜に移ります。小浜で上記のような観察をした後、「翌六日檜皮屋を立出、世井坂といえる山路にかかる(中略)元来此街道は、丹後宮津或いは成相松の尾の順礼道ゆえ、淋敷して、万事不自由なり、おお高津(岡津)に至る」、翌6日、檜皮屋を立出して勢坂を越え、街道は順礼道だから寂しいという観察は少し面白いというか、意外ですね。十叟舎が若狭にやってきた時期は晩秋頃で、このシーズンは順礼も少なかったようで、順礼以外の通行も少ないということでしょうか。

「此所にて支度ととのい、昼過頃に和田の漁村にいたる、此所に銀談の入り組みし用向き有けるゆえ、四・五軒計り掛け合けれども、一応にては調いかね、甚だ当惑の体成りければ、○村中のむねに当るや大矢数いい通したる和田のかね言」、本郷で昼飯を食べて、昼過ぎ頃に和田の漁村に至るということで、図10は『西国順礼略打道中記』の和田漁村の出口、海に面しているあたりの様子です。このあたりの街道が寂しいと言っているのは、結構、船で行き来があったからではないかという気がします。陸上交通と同じぐらい船便がこのあたりは発達していて、それで歩いている人は少ないということかもしれません。図9④は十叟舎が描いた、遠目に和田浜の漁村を見るの図です。

和田の漁村にはお金のことで相談があって来た、4、5軒とにかく当たってみたが、なかなか整わない、つまり上手くことが進まないということで、これは長期戦で、しばらくはここに拠点

を構えるしかないということとなりました。

「当村にて止宿せんと問合せけるに、当村に絵馬屋甚右衛門といえる馬借にて、然るべきようおしえけるに任せ、彼所を頼みけるに、折しも障る事有しにや、よぎなく断り申せしゆえ、すべきようなく、外に旅舎有りやと尋ねしに、主申けるは、当村にてはわれ一軒のみ也、是より半道南に当たって高浜の駅には旅舎数多有り、彼所にて止宿有るべし」。

絵馬屋甚右衛門、この人は地誌の『稚狭考』にも「大飯郡和田村、画馬屋とて駅長ありて、和田村にて年貢の内三十石を免じて駅の料として除かる」と名が見える人で、馬借で宿屋



図10 舞鶴市糸井文庫『西国順礼略打道中記』和田

も兼ねていた人物ですが、泊まるなら絵馬屋に泊まると聞いて行って見たところ、何か支障があったようで断られ、この村で宿屋をしているのは自分1人なので、高浜（写真5）まで行けば宿屋はたくさんあると言われます。図9⑤は、彼の描いた高浜あたりの図です。高浜でも2軒ばかり断られた末に宿が見つかって、その顛末をドタバタ的にいろいろと書いています。

「先々心落ち付き、夫より髪月代をせんと髪結を尋ねしに、当駅中には只二軒也、則そを尋ね至りしに、此髪ゆいの家居、垣生のわらぶきにて、折しも徒然成りけるにや、此髪結鍬など遣い、耕作なしけるを頼み、月代なしけるに、其いたさとえがたく、又髪をゆいければ、櫛取の不束さ、され共あたいは大坂と同じ事也」、高浜の町で月代、つまりちょんまげの剃ってある部分が伸びてきたので、これを剃ろうと髪結いを探したところ、ここには2軒しかなく、そのうちの1軒を尋ねたところ、藁葺きの家で、店の者は鍬を握って耕作をしていたようで、剃ってもらったところ、剃刀が研げてなく、すごく痛かった、上手ではなかったが値段は大坂と一緒にと書いています。

「高浜に止宿なしける内、日毎に和田村へ行き来なしけるが、己れ黒の羽織に鈕かたばみの紋付を着し、一刀さして日々歩いたせし体を、百姓・馬士・荷かち持・野夫、己れが体を見ては過急に道路にぬかづき、其さまいとていねいに頭をうなだれ敬いける、初めの程は心付きざりしが、日毎に斯の如く成るゆえ、此事どうもいかがと見えしに、己れが紋は則酒井讃岐候と同紋ゆえ、拝領の衣服着するは、由緒有る役向きの人と心得たるにと初めて心付きければ、○百姓が辞義するもうべ殿様のけんかたばみの威にや恐れて」。

この後、高浜から和田に通っていたところ、お金の話をしに行くこともあり、黒の紋付羽織を



写真5 高浜町高浜



図11 小浜酒井家家紋

着て、刀を差して歩いていたら、地元の百姓、馬士、荷かち持は荷物運びの人々ですが、このような人々が自分を見て丁寧にお辞儀をする。何で毎日毎日、俺は土下座されるのかと考えたところ、自分の紋は劍酢漿草^{かたばみ}で、小浜藩酒井家の紋と一緒に（図 11 の右側）、あれは酒井公からいただいた拝領の衣服に違いないということで、由緒のある商人、もしくは武士と思われたのか、それでは百姓達が俺にお辞儀するのも無理はない、劍酢漿草の家紋の御威光を恐れたのかということで、初めて納得したということを行っています。

「此絵馬屋といえるは馬借ゆえ、馬も二疋有り、頃しも秋の取り入れ頃とて、此辺都てそうぞう敷、庭には稲を山のごとくつみ重ね、から棹打ち、もみ挽き抔して、又折々にはえならぬ匂いしていとむさくろし」、この頃は刈り入れシーズンであったようで、和田の絵馬屋のあたりも庭には稲を屋根のごとく積み、から棹打ち、もみひきなどで大変であったとあります。

「此賤^{この}の女の図は、おのれ絵馬屋といえる旅亭に舍りし時、斯^{かく}のごとき女往き来なしけるを見て、書したためぬ、極田舎にはあらね共、女のくろう（苦勞）はいう計りなし、是を見て京大坂の女の日頃の住居にかかるくろうはなし、いか程金富家^{ほいか}にてもそのゆたか成るを思うてかんず（感ず）べし、和田村馬借にて諸方より入つどいくる（集い来る）諸荷物運送はおおく女也、何程おもくともになう（担う）なり、凡^{およそ}目かた廿二・三貫匁（約 82.5～86.3 kg）より三十貫匁（約 112.5 kg）計り也」「此ふねも凡二十貫匁（約 75 kg）計りも有らん敷」
「此女のせおいし船は、水田に用ゆる農具也」

図 9 ③は絵馬屋甚右衛門のところ泊っている時に、大荷物を担いだ女性達が往来しているのを見かけ、その姿を描き留めたものです。女性達の苦勞は見ていて、とても大変と言うしかない、京都、大坂に住んでいる女性達にこんな苦勞をしている者がいるかと言っているわけですね。いかに自分達の生活が豊かであるか、京都、大坂の人間は思い知るべきだと殊勝なことを言っています。

物を運ぶ仕事は多く、女性が受け持っているようで、単純に計算して 82.5～86.3kg、90kg 近い荷物や、100kg を超すものを彼女達は背負っています。右下の女性が担いでいるものは、田舟ですね。先ほどまで農作業をしていた女性なので、泥の足跡を付けているのですね。田んぼに足を深く入れていたからでしょう。田舟は湿田で稲などを運ぶ時に船に乗せて浮かべて運搬する道具ですが、『わかさ美浜町誌』によれば、この地方の田舟は、幅 600mm、長さ 1,600mm とあって、60cm、1 m60cm なので背負っている田舟のサイズと近いかと思います。

このように、面白おかしく旅を記録した十叟舎でしたが、地元の人々の暮らしの大変さも垣間見て、都会の人が見た地域の暮らしにも関心を寄せている。交通、街道というよりはむしろ旅行者がこの地域をどう眺めていたのかといったお話となりました。

地域の歴史をいろいろ研究され、解き明かす際の何かのヒントになれば幸いです。拙い報告ですが、以上です。

道しるべや道中記にみる若狭路

舞鶴市郷土資料館 学芸員 小室智子

舞鶴から参りました小室智子と申します。青柳先生の朗々としたお話しに聞き入ってしまい、そのまま続けてお話ししていただきたいのですが、我に返って少し道しるべのお話しをさせていただきたいと思います。よろしくお願ひします。



1. 安田重晴氏の道標調査

皆さんはなぜ舞鶴市の私が若狭路のことを話すのか、疑問にお思いかもしれません。実は舞鶴市には安田重晴さんという、舞鶴市内の道しるべの悉皆調査をなさった方がおられます。安田さんはシベリア抑留を経験されていて、現在、99歳です。3年ほど前に自分はもう96歳になったので、舞鶴市引揚記念館でのシベリア引き揚げの語り部としての仕事に専念したい、道しるべは長いこと研究してきたが、後身の人に託したいということで、舞鶴市郷土資料館にいろいろな資料を預けてくださいました。

安田さんは、平成2年(1990)に舞鶴の道しるべについて、『まいづる田辺の道しるべ』という本を出版されました。地方史の本は図書館や公民館に寄贈しても100部か、200部売ればよいところですが、800部作られて、あっという間に完売して、平成2年からほぼ30年近く経つのですが、未だにこの本はないかという問い合わせがあるような本です。そして、安田さんから預けていただいた資料を見ると、舞鶴のことだけでなく、近隣諸国の道しるべも調べておられたということがわかりました。

これをこのまま資料館に資料として並べてもよいのですが、もっとたくさんの方々を知っていただきたいと思いました。ちょうどその時に京都府立大学と一緒に古文書調査をしていましたので、大学で毎年出版されている文化遺産叢書というシリーズの本に載せたらどうかと言っていたので、この安田さんの調査成果をエクセルの一覧のデータにして掲載させてもらいました(『京都府立大学文化遺産叢書第14集 舞鶴・京丹後地域の文化遺産』京都府立大学文学部2018)。

京都府の北部では、だんだんと人口が減少して、舞鶴市や福知山市のような大きい都市の地方史研究は盛んですが、小さい自治体の郷土史研究会は解散するところが多く、人口減少が続く舞鶴も他人事ではありません。舞鶴では安田さんがこのような本を出版されたことで、それを辿って歩きたいと言って、定年後に1か所ずつ訪ねて歩いておられる方が何人もおられます。このように後継者を生み出す安田さんのお仕事をぜひ知っていただきたいと思い、文化遺産叢書に掲載してもらいました。



写真1 舞鶴市内の道標1



写真2 舞鶴市内の道標2



写真3 舞鶴市内の道標3

安田さんが調べられた道しるべは、京都府で572基、うち舞鶴市184基、兵庫県181基、滋賀県78基、岐阜県14基、大阪府8基、奈良県2基、三重県2基、長野県1基、そして福井県で32基です。舞鶴市だけで184基もあるのに、なぜ福井県は32基と少ないのかと思っていたのですね。

よく考えると、丹後街道は東から西に1本道で、さほど道しるべも要らないのかもしれないと思ったりもしました。ちょうど自分でもいろいろと調べていきたいと思っていたところへ、今回の歴史フォーラムのお誘いがあったので、お受けしました。そこで、今日は安田さんの辿られた順礼道の32基の道しるべの今の状況がどうなっているのか、皆さんと一緒に辿りたいと思っています。

舞鶴市のお話を少ししますが、184基のうち、松尾寺に向かう道しるべは48基です。3分の1から4分の1ぐらいは松尾寺へ向けたもので、成立年代は元禄5年(1692)から昭和時代ぐらいまでありますが、65%ぐらいは江戸時代の成立のものです。自然石に「ひだりまつのを」と書いてあるものや、文政13年(1830)にできた「ひだりまつのを」と書いてある角柱、このように形も大きさも字体もさまざまなのがたくさんあります。

2. 若狭路の道しるべ

表1は、若狭路の32基の道しるべの一覧で、現在、松葉さんは70基以上の道しるべを確認されているので、倍ぐらいに増えています。

図1、舞鶴市糸井文庫の『西国順礼絵図』を見ると、29番札所松尾寺から順礼道を高浜に出てきて、丹後街道を東に進み、熊川を越えて琵琶湖竹生島の30番札所宝厳寺まで行きます。私が今日、お話しするのは松尾寺から熊川までとなります。

松尾寺の境内にある道しるべは「ひだりまつのをみち」とあり、



図1 舞鶴市糸井文庫29-43『西国順礼絵図』抜粋

表1 安田重晴氏調査による若狭の道標一覧

	所在地		標 示	質・形状	年号・建立者（備考）
1	高浜町	今寺	☞まつのを、☜ちくぶ志ま、道	角柱	大正六年十月、 施主当区稻生女 右兵ヱ門
2	高浜町	高野	右ちくぶ志ま道、左中山道	角柱	天保六未四月、 世話人高野邑南部新右ヱ門
3	高浜町	東三松	道供養塔	仏像型 自然石	文政六未年一月
4	高浜町	中寄	右たなべ道、左せきや道	自然石	
5	高浜町	立石	右志ゆん禮道、小濱江五里竹生島□□迄十四里半	角柱	文政六癸午九月一、 願主石橋氏
6	高浜町	立石	丹後道、高濱町畑、高濱町鐘寄	角柱	
7	高浜町	立石	丹後道、高濱町宮崎、高濱町菌部	角柱	
8	高浜町	菌部	右ちくぶ志ま道	角柱	
9	高浜町	菌部正善寺内	左順礼、ミ、ち	自然石	
10	高浜町	和田三区	右志ゆん礼道	角柱	
11	高浜町	上瀬水ヶ浦の 越登口	[・・・]	角柱 舟型	
12	高浜町	日引	右やま道、左う王せ村	仏像型	文化八
13	高浜町	日引寺下	[梵]、右うわせむら、左やまみち	角柱	
14	高浜町	宮尾	右みやお日引右かまくら右山中たかはま、 左かまくら左まつお、山中左宮尾日引	角柱	明治四未四月、日引藤五良
15	高浜町	下産靈神社	右丹後とちお、左かまくら、大山道、 右かまくら右下村みやを、左下むら左か王な遍	角柱	明治十六未五月、仲西氏
16	高浜町	鎌倉	右大山村大うら、左とちをかわなべ	自然石	
17	高浜町	山中日枝神社前	[梵]	角柱	(応安七年頃のもの)
18	高浜町	山中西林寺内	[梵] 世尊我一心順命盡十万、 法性真如海報化等諸佛	角柱	応安七年八月
19	高浜町	山中西林寺内	[梵] 世尊我一心帰命盡十万、 無礎光如来与佛放相応	角柱	応安七甲寅八月時正敬白
20	おおい町	尾内	高濱町□里三十五町四十間、距福井市照口上町元標 三十二里二十八町五間、小濱町三里二十六町三間佐 分利右山へ二里九丁	角柱	
21	小浜市	小浜市図書館 (元青井)	右田辺福知宮津但馬、 左能勢妙見宮園部亀山京都従是三里	角柱	文久元年辛酉九月、 世話人五人發起人糸屋利兵衛
22	小浜市	小浜市図書館 (元大宮と和田の 三叉路)	右志ゆん連い道	角柱	嘉永四年辛亥八月、 世話人煙州屋清左衛門
23	小浜市	小浜市図書館 (元大宮と 神田の間)	丹後道、小浜町大宮、小浜町神田	角柱	
24	小浜市	資料館 (元湯岡出口)	左志ゆん連い道	角柱	
25	小浜市	市図書館	すぐ志ゆん連い	角柱	
26	小浜市	市図書館	すぐ田だ道、やくし如来	自然石	
27	小浜市	明通寺参道	すぐ明通寺、左池ノ河内	角柱	明治四十二年七月、 施主光明院
28	小浜市	明通寺入口 三叉路	小浜市場衆明通寺是□□、左池河内経□□□	角柱	
29	小浜市	口田縄角	右なたの庄、左□□□村	自然石	
30	若狭町	日笠	右志ゆん連いみち、左北國ちせん道	角柱	文化十三丙子二月吉日、 願主小泉氏川戸氏 世話人當村義兵衛
31	若狭町	三宅	すぐちくぶ志満道、右村道、左吉田	自然石	文久二未八月



名称	懐孔道
形状	
場所	橋ノ子 今寺
スケッチ	

名称	道標
形状	角柱 花崗石
場所	高取町 今寺
スケッチ	



名称	懐孔道
形状	今寺の 高野
場所	橋ノ子 高野
スケッチ	

名称	道標
形状	角柱
場所	橋ノ子 高野
スケッチ	

【1. 今寺】

【2. 高野】



名称	道標
形状	角柱
場所	高取町 高野
スケッチ	



名称	懐孔道
形状	
場所	高取町 高野
スケッチ	

名称	洞道
形状	
場所	高取町 高野
スケッチ	

【2. 高野】

【2. 高野】

図2 安田重晴氏の道標調査ノート(1)



名称	道標	石
種類	角柱	花崗石
場所	高浜町 東三松	
立体図		

【3. 東三松】



名称	道標	石
種類	石	花崗石
場所	高浜町 中寄	
立体図		

【4. 中寄】



名称	道標	石
種類	角柱	花崗石
場所	高浜町 立石	
立体図		

【5. 立石】



名称	道標	石
種類	角柱	花崗石
場所	高浜町	
立体図		

【6. 高浜町(立石)】



名称	道標	石
種類	角柱	花崗石
場所	高浜町	
立体図		

【7. 高浜町】



名称	道標	石
種類	角柱	花崗石
場所	高浜町 園部	
立体図		

【8. 園部】



図3 安田重晴氏の道標調査ノート(2)



石群	道標	地	尾内
形題	高柱	日引石	
場所	尾内町高柱 尾内寺		
文様図			

【9. 園部正善寺】



石群	道標	地	和田三區
形題	高柱	日引石	
場所	和田三區 尾内寺		
文様図			

【10. 和田三區】



石群	道標	地	尾内
形題	高柱	日引石	
場所	尾内町高柱 尾内寺		
文様図			

【11. 尾内】



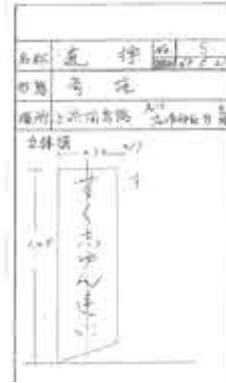
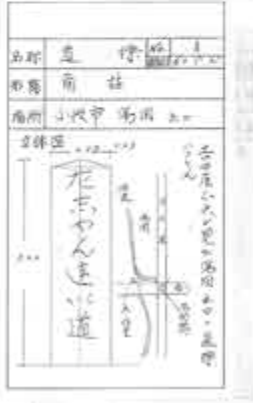
石群	道標	地	小浜市図書館(青井)
形題	高柱	日引石	
場所	小浜市図書館(青井)		
文様図			

【21. 小浜市図書館(青井)】

石群	道標	地	小浜市図書館(大宮・神田)
形題	高柱	日引石	
場所	小浜市図書館(大宮・神田)		
文様図			

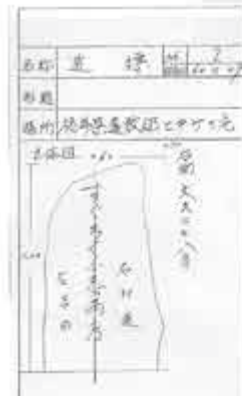
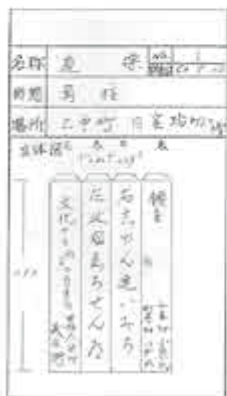
【22. 小浜市図書館(大宮・神田)】

図4 安田重晴氏の道標調査ノート(3)



【24. 湯岡】

【25. 小浜市図書館(広峰神社前)】



【30. 日笠】

【31. 三宅】

図5 安田重晴氏の道標調査ノート(4)

元々は山の麓の街道に立っていたものが今、境内に上がってきています。そして「すぐちくぶ志ま道」と書いてあるものは松尾寺を出て、福井県側に坂を下りてすぐのところにある道しるべです。先ほど青柳先生がお話しされた巡見にも私も同行し、確認してきたものです。これは新しいもので、明治8年(1875)のもので、

さらに坂を下ると、高浜町今寺の道しるべに着きます。図2～5は安田さんの調査ノートです。昭和56年に調査された時の写真も貼っておられますが、今、私達が現地に行ってもやはり道しるべが横に寝ていて、ずっと30年間寝続けている道しるべです。ですが文字は今でもはっきりと読めます。全然風化してない、ちゃんとした道しるべです。

次に高浜町高野の道しるべです。まだ街道を下まで降りていない、今寺からすぐの田んぼの中にあります。安田さんが調査されたのが昭和59年(1984)です。やはり田んぼの真ん中ですが、今は有害獣の電柵が周りにしっかりと張ってあって、当時と現在と違う状況があります。これも字は読めますが、蔦が絡まっているのを取らないといけないという感じになっています。天保6年(1835)の建立なので、このころの道はここを通っていたことがわかります。これらの道しるべは今の人にとっては必要ないものですが、ちゃんと当時の場所にある。そこに立つと江戸時代の人の目線で風景を見ることができる。このことはすごく重要だと思います。

東三松の道しるべは、三松のすぐ入り口にあります。墓地の入り口で、最初、気づきませんでした。かなり風化が激しく、読み取りにくく、これだと気づくのに時間がかかりました。よく見ると右から左へ「道供養塔」と書いてあります。道を供養して順礼者の安全を願ったり、あるいは行き倒れになった順礼者の霊を慰めるものでしょうか。今でも花が供えられ大事にお祀りされています。

中寄の道しるべは国道27号から入ったところの三叉路にあり、本当にこれかなという感じで、見つけるまで時間がかかりました。国道へ戻ったり、関屋に向かう踏切の方へ行ったりウロウロしました。安田さんの資料に大きさが書いてなかったら見逃すところでした。しかし、この位置にしかないはずだと思って腰を屈めて探したところ、この道しるべに辿りつけました。



写真4 高浜町今寺の道標



写真5 高浜町高野の道標



写真6 高浜町中寄の道標



写真7 高浜町立石の道標



写真8 高浜町菌部・宮崎の道標

次のは、高浜の入り口、立石というところに昔、コンクリート工場があり、その近くにあった道しるべだそうです。これが現在は高浜町郷土資料館の裏庭に、字が読める状態で移設されています。立石には、もう一つ「丹後道」の道しるべがありましたが、この行方がわかっていません。『西国順礼略打道中記』にも登場する岩神さんの祠の横に寝ている道しるべに「道」という文字がわずかに見えるのですが、この上が欠損しているので、これが立石にあったものかどうかは確認できません。この道しるべは各村の境にあったはずなので、ひょっとすれば岩神と菌部の間にあったものかもしれません。

宮崎と菌部の間には「丹後道」の道しるべがあります。昭和56年(1981)に安田さんが調査されたノートを見ると、正善寺さんの大般若経のお札が貼ってありますが、現在も同じように立っています。道沿いの石垣も昭和56年当時と同じです。

立石と菌部にあったという道しるべがあるのですが、所在がずっとわからず、歴史フォーラムの直前に高浜町郷土資料館の収蔵庫にあることがわかりました。今から収蔵庫に入るの？といった感じで、現物は確認できませんでした。ただ、間違いなくなくなっているとは思いません。

高浜町の正善寺の道しるべも、今も以前と同じような状態です。お寺の境内なのでお声かけさせてもらったのですが、お留守だったようで写真だけ撮らせていただきました。

そして、和田の道しるべは、安田さんが調べられた時が昭和56年で、その当時は道しるべがかなり埋没していますが、その後の道路工事でこれが見えるように工事してくれたようで、みんなに見守られている道しるべは得やなと思って、すごく嬉しかったです。

そのまま進むと、おおい町に入ります。安田さんが花房橋で尾内の道しるべを調査されていますが、これは現在、おおい町立郷土史料館の収蔵庫に入っています。

次、小浜ですが、安田さんの資料では昔、小浜市立図書館があったところで、現在は働く婦人の家があるところに道しるべが集められていました。青井の三叉路や神田の三叉路にあったもの、大宮と神田にあったもの、広峯神社にあったもの、これらが小浜市立図書館のところに移設されていたと報告されています。これらの道しるべは現在、廃校になった小学校の裏に寝ています。



写真9 高浜町和田三区の道標

福井県立若狭歴史博物館の前には元々、小浜市湯岡にあった道しるべが移設されています。順礼道は小浜の市街地を抜けると湯岡から南川を西から東へ渡ります。湯岡の出口に道しるべがあったということは橋もここにかかっていたことになります。その位置は現在の橋よりも南側に50mほど行ったところになります。普段は車で国道を走るので、それに平行した小さな道にはいることはありませんが、訪ねてみると昔の街道を彷彿とさせて、道しるべを辿ったら丹後道など昔の道を復元できるのかと嬉しくなります。



写真10 小浜市湯岡の道標



図6 安田重晴氏調査の道標位置図(1) (縮尺 1/75,000)



図7 安田重晴氏調査の道標位置図(2) (縮尺 1/75,000)



写真11 若狭町日笠の道標



写真12 若狭町三宅の道標

日笠の道しるべは、鉄道の線路の横にあるもので、現在も同じ位置に立っています。左手に行くと越前に、右手に行くと順礼道に続いています。案内や説明の看板がいくつか立っていて、この石碑を目当てにここを訪れる人がいることがわかります。

三宅の道しるべは丹後街道筋でも少し道が折れるところにあります。安田さんが調査された30年前に比べて、道しるべの周囲を大きな石が周りを囲み、車が当たっても潰されないようにもっと堅固になっている感じがします。

このように、安田さんが調べられた道しるべが現在、どうなっているか見てきました。

3. 舞鶴市糸井文庫と若狭関係史料

舞鶴市糸井文庫は、皆さん、あまり聞かれたことないかもしれません。京都府の与謝野町出身の糸井仙之助さんが東京で銀行家になられ、丹後が恋しく、丹後と名の付くものなら何でも集めたという史料です。江戸時代から明治、大正のものまであり、2,000点ほどの史料があります。

今回、調べると若狭関連の史料が32点ありました。斎藤徳元の俳句や、順礼や旅行記などもあります。小浜や若狭のことが少しでも書いてある史料を表2にしました。明治時代以降の史料はデジタル化していないので、『斎藤徳元集』と昭和に発行された『巡禮日記』はだめですが、その他の史料は全てデジタルアーカイブになっているので、インターネットでご覧になることができます。1ページずつページを拾って画像で見たいので、ぜひ若狭の皆さんにも活用していただきたいと思います。

表2 舞鶴市糸井文庫が所蔵する若狭関係資料一覧

部	項	目	番	資料名	著者名	発行日
2	9		1	桂陽懐史	松木淡々編	宝暦6年板行
2	10	口	11	宮津俳人玄化堂甫尺 荒木万籟俳諧摺物巻物		
2	14	ハ	1	斎藤徳元集	笹野堅著	昭和11年発行
5	29		20	諸国名物往来	山本屋平吉	寛政年中板行
5	29		21	日本名所記		寛政年中板行
5	29		22	日本地名鑑		寛政年中板行
5	29		24	日本往来	龍章堂閑齋書 菴閑牛画	文政年中板行
5	29		35	諸国宿屋鑑		文久2年大增補再刻
5	29		36	西國三十三所順礼縁起	藤屋伊兵衛編	延享5年正月板行
5	29		37	西國順礼手引案内		寛政元年板行
5	29		38	順礼道しるべ		安永3年板行
5	29		39	西國三十三所道志流遍	養流軒一筆子著	元禄3年板行
5	29		40	西国順礼記		享保年中板行
5	29		41	西国順礼道中繪圖		文化年中板行
5	29		42	西国略打順禮記		安永2年3月板行
5	29		43	西国順禮細見絵図全		文化4年5月板行
5	29		44	西国順礼細見絵図		寛政3年板行
5	29		45	西国順礼細見記	下河邊拾水子	寛政3年板行
5	29		46	西国順礼細見大全	俣野通尚著編	文政8年板行 天保11年増修版
5	29		47	西国三十三霊場 奮闘記	松本喜三郎	明治12年4月発行
5	29		48	増補船路細見記	加藤祐一編	
5	31		13	西廻記 乾坤		享保中
5	31		14	西国三十三所順礼道中記		享保6年、寛政元
5	31		15	西国巡礼畧打道中記 下	吉田屋正六筆	文政3年
5	31		16	和語狭廻記	十叟舎笹麻呂自筆	
5	31		18	西国巡礼方言修行金草鞋	十返舎一九著	
5	31		25	畿道巡回日記 第一～三篇	生田精著	明治14年9月発行
5	31		29	巡禮日記	古城貞吉著	昭和4年5月発行

4. 道中記に見る道しるべ

『西国順礼略打道中記』、このように絵入りの道中記が珍しく、実は各地の博物館などに貸し出すことも多く、どんどんボロボロになっていくので、そのような意味でもデジタル化してよかったですと思います。吉田屋正六の著で、残念ながら残っているのが下巻だけで、中山寺を出発して谷汲寺まで行き、伊勢から大坂に帰ってくるという内容です。おそらく大坂の商人ではないかと思っています。巻末には貸本をしていたようなことも書いてあります。

この道中記に描かれた若狭の道しるべにどのようなものがあるかということですが、若狭路、丹後街道では小浜の八幡宮の門前に「左じゅんれい」という道しるべが一つあります。八幡宮まで行ってみましたが、今現在、この道しるべはありません。そして、近くにもう一つ道しるべがあり、「右ちくぶ志ま」、まっすぐは北国加賀越前道となっています。これも今現在は見つかっていません。図9は小浜城下町の図ですが、船から陸に上がると正面の道をまっすぐ行くと八幡宮に着き、左に曲がってから少し行ったところを右に行くと順礼道、まっすぐ行くと加賀越前に行くというような位置関係です。

湯岡の道しるべは、先程お話しした若狭歴史博物館の前に移設されたものです。

もう一つ、日笠の道しるべは実際に現地にあるものと、『西国順礼略打道中記』の文言が違うのですが、この道しるべは文化13年(1816)に立てられたもので、吉田屋正六が歩いた文政年間よりも前に建てられているものです。史料のスケッチは少し間違えていますが、この道しるべであることには間違いのないと思っています。

「丹後道」の道しるべも、明治時代になってから福井県が作ったものかと思うので、舞鶴にないのは当たり前かと思うのですが、立派な角柱に「じゅんれい道」と書かれている道しるべは、実は舞鶴にはありません。まつのおさんへ行く、あっちの村へ行くといったような道しるべはあるのですが、道として捉えるということが若狭の道しるべの特徴なのかと思います。若狭のしっかりとした角柱の道しるべを見て、違いを感じました。

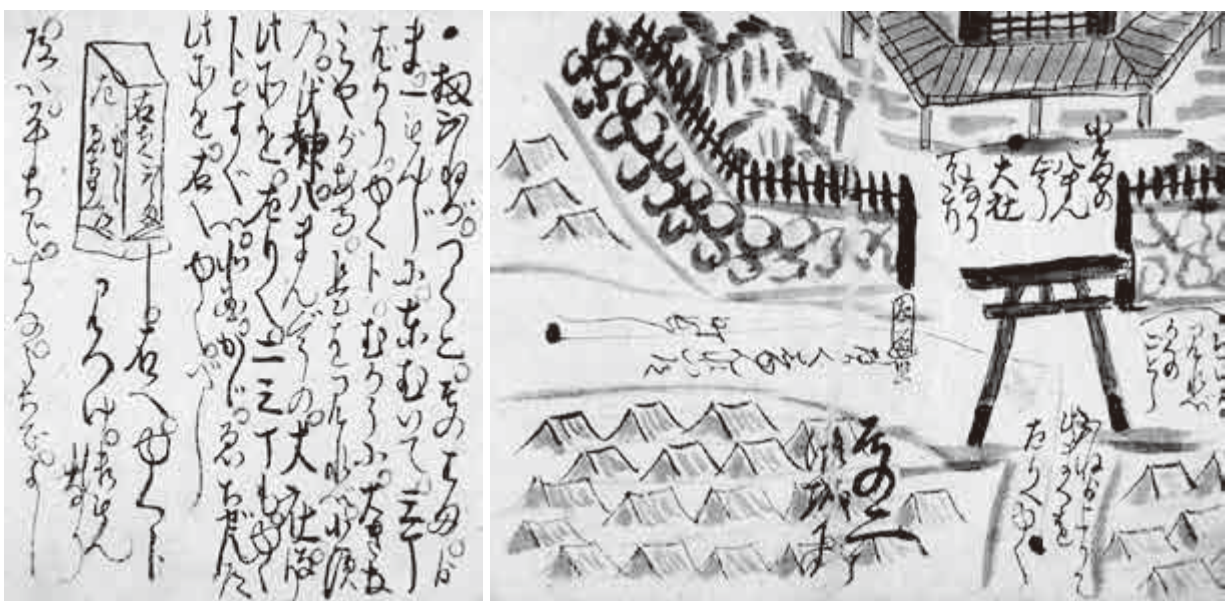


図8 舞鶴市糸井文庫『西国順礼略打道中記』に描かれた若狭の道標(1)

そして、『西国順礼略打道中記』には、松尾寺を出て、丹後と若狭の国境の絵が描かれています。その境には榎や松があり、石柱の道しるべを立てるまで、このような木が道しるべになっていたこともうかがえます。吉田屋正六が描いた道しるべは、文政年間に書かれています。1820年代ですが、道しるべが立てられたのも、さほど古い時代のものではなく、舞鶴市糸井文庫の道中記などの史料も見てみましたが、道しるべのことが書いてある道中記はあまりありません。道中記に道しるべが出てくること自体が珍しいと思っています。それまでは、やはり榎や松などを頼りに行ったのではないかと考えられます。

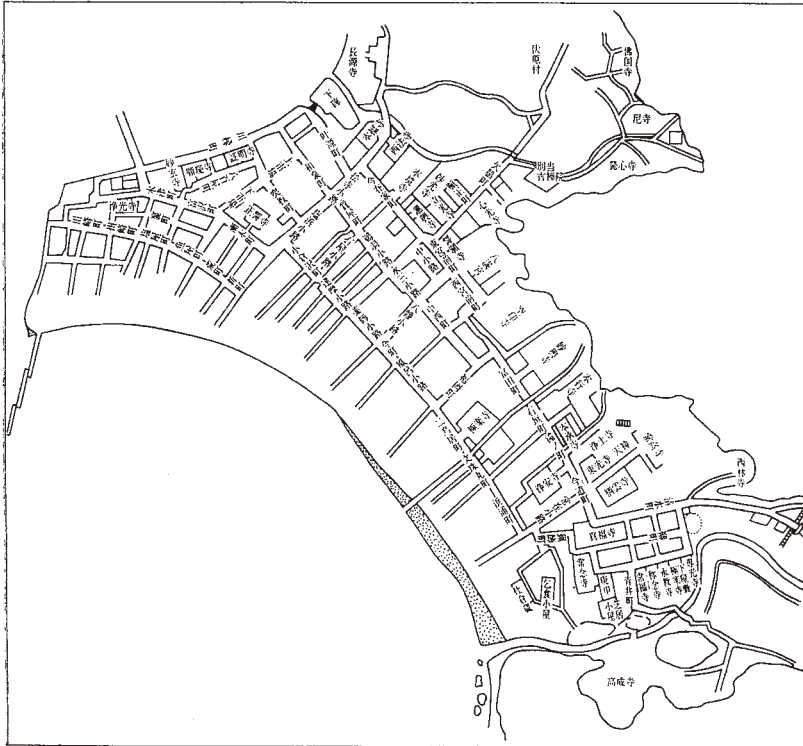


図9 小浜町絵図

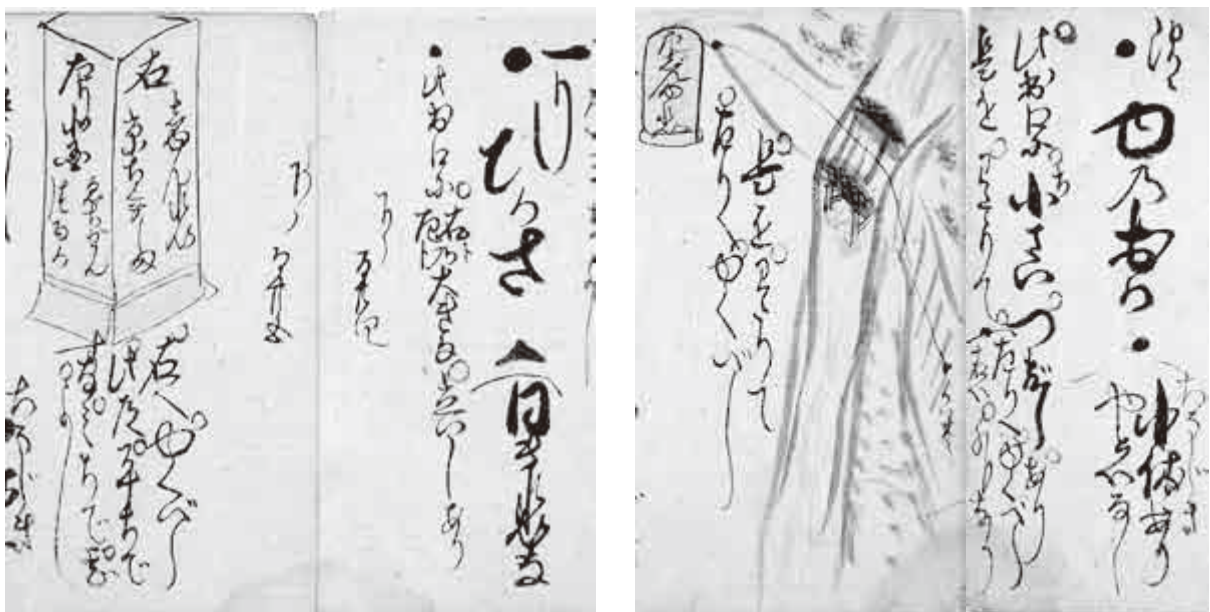


図10 舞鶴市糸井文庫『西国順礼略打道中記』に描かれた若狭の道標(2)



図 11 舞鶴市糸井文庫『西国順礼略打道中記』に描かれた丹後と若狭の国境

安田さんが調べられた道しるべのうち年号のあるものを調べると、1800年以降に建てられたものが約半数あります。道しるべは中世のものも稀にありますが、江戸時代以降がほとんどなのです。舞鶴では65%が江戸時代と言いましたが、全体では75%くらいが江戸時代です。舞鶴が近代に発展した町だということがこれでもよくわかる気がします。江戸時代で一番古いものは寛永18年(1641)ですが、寛永18年から1800年以前が大体4分の1、1800年以降から幕末までが2分の1、明治以降が4分の1という割合です。文化、文政の時期に一気に建てられたことがわかります。糸井文庫の道中記は文化、文政より古いものが多いので、道しるべの記事が少ないのかもしれない。

『西国順礼略打道中記』では、丹後の宿屋は汚いと書かれ、田辺の御殿様は貧相と書かれてもいるので、翻刻しにくい、あまり人に見せたくない、嫌だと思っているのですが、若狭では景色よし、宿屋きれいななどと書かれています。東西に1本の道が抜けているので行きやすく、私は美浜町のことをあまり知らないのですが、今回の歴史フォーラムの話を受けてから、何度か、来させてもらったのですが、朝は朝日に向かって走れば美浜町に着くし、帰りは夕日に向かって走ったら舞鶴市に帰れるという感じで、道しるべはあまりいらぬのではないか、みんな、心地よく旅をしたのではないかと思います。

5. 丹後の石工、加藤寅之助

松葉さんが若狭の順礼道標を調べると同じ物を手がける石工の集団がいたのではないかと指摘されておられるのを聞いて、少し思い出したのでご紹介します。私は4、5年ほど廻船の船頭の古文書の目録取りをしているのですが、元々は舞鶴市で、今は宮津市ですが、由良の加藤長助という北前船の船頭の文書です。

加藤長助さんは、明治37年(1904)にもう利益が上らないので、船を売って、陸に上がります。お父さんが船を上がった時、子供の寅之助君はまだ小さく、大きくなって石工になります。由良には由良石があるので、石工になるにはそんなに抵抗がなかったのではないかと思います。6年間ぐらいの間にお父さんとのハガキのやりとりがあり、私としてはつけ足しのつもりで取っ

た目録ですが、目録をとりながら面白いと思いました。

大正時代の話で、たった6年間の話で、何の役にも立たないかもしれないのですが紹介します。

この寅之助君は大正8年(1919)から石工を始めて、最初のうちは丹後の与謝郡加悦町のあたりで石工をするのですね。それも1人の親方のところにずっといるのではなく、ちょこちょこいろいろなところへ行きます。大正9年に小浜の上原長次郎のところへ行き、盆に熊川の忠魂碑を造るので帰れないという手紙を送ってよこしたのですね。ひょっとしてこの石碑はまだあるのではないかと思って行ったら、ちゃんとありました。大正9年に建てた熊川の忠魂碑が、現在、熊川小学校にあります。平成何年かには、立派な添え書きのような案内板、忠魂の思いを込めた石碑が建っていました。



写真13 熊川小学校忠魂碑

『熊川村史』を見ると、150人でこれを作った、金額がいくらだとか、そのようなことも全て書いてあり、京都府の由良の石工が小浜にいたからだと思うのですが、駆り出されています。

この仕事を半年ほど、4月28日から11月12日までしているのですが、その後また丹後で点々と石工の仕事を行います。友達から、「お前は手に職があつていいな」という手紙をもらったり、「いや、仕事がない」みたいなやりとりもしているのです。大正12年(1923)7月22日から12月5日までは八日市の記念碑を木村豊吉の元で作っています。その後、石工の仕事がなく、東京へ出てまいります。

私はこの史料を見た時に、舞鶴でいろいろな古文書調査をしていると、例えば江戸時代の庄屋の文書の中に、敦賀と琵琶湖の運河を通す話のことが出てきたり、明治時代の商家の長男が近江の商業学校に行ったり、舞鶴は丹後の東端ですが、舞鶴の人は自分達が丹後の人間だという意識がすごく薄く、舞鶴の人が丹後がという時は、大抵、宮津よりも西のことを丹後と言うのですが、若狭や近江の影響がすごく大きいということは、日頃から思っていたのですね。

表3 京都府宮津市由良の石工、加藤寅之助の6年間

年 月 日		動 向	
1919年	大正8年	7月7日～8月3日	与謝郡大下工場
		9月7日～(9年)1月16日	加悦町廣瀬重吉
1920年	大正9年	3月7日～4月18日	加悦町石田繁蔵
		4月28日～11月12日	小浜上原長次郎(熊川忠魂碑)
1921年	大正10年	1月4日～22日	加悦町廣瀬重吉
		4月3日～10日	与謝郡吉田千蔵
		4月30日～7月29日	加悦町廣瀬重吉
1922年	大正11年	1月2日～8月30日	宮津鈴田幸治
		9月10日～26日	竹乃村北村好一
		10月5日～11月10日	宮津鈴田幸治
1923年	大正12年	5月3日・9日	中郡中前中
		7月16日	宮津鈴田幸治
		7月22日～12月5日	江州神崎郡八日市木村豊吉(記念碑)
1924年	大正13年	1月9日～3月1日	伏見中村
		4月2日～	京都市菊屋旅館
		6月18日	東京へ

仕事を求めてかもしれないし、よくわかりませんが、寅之助君はたった6年間ですが、近江、若狭、丹後で仕事をしていたということを見た時に、うーん、それはあるだろうなと思いました。近江、若狭の文化圏の西の端に舞鶴があるのではないか。昔、森浩一先生が講演会で、越の国と出雲世界の間の丹の地域をもっと調査して発信していったらいいというようなことをおっしゃっていたのですが、出雲と越に挟まれて都を北からぐるっと囲むように近江・若狭・丹の国々があって、その中でも西の丹の国々と若狭近江の文化が少し違うような、近江若狭の文化圏があるのではないかといいことを、今回、フォーラムの仕事をさせていただいて思いました。

6. おわりに

最後になりますが、安田さんが若狭で調べられた道しるべも、30～40年ほど経っていますが、あるのがわかったものも含めてですが、4基が未確認でした。時間の流れが今と昔で違うのかもしれませんが、200年前の『西国順礼略打道中記』に描かれた2基の道しるべが現存していることは、すごく貴重なことだと思っています。

博物館、資料館に道しるべがあるということは、保存の最終手段と思っていますが、私も資料館に勤務する人間ですが、道しるべを資料館に入れればなくなりますが、それでよいのだろうかと思います。道しるべを調べて歩くところに丹後道があったのかといったように、歩きながら感じていく歴史が折角ある中で、突如、資料館へ行って調べに行くという、何か現実には引き戻されたような感じがします。現地へ行って初めてそこに道しるべがあることが納得できます。立てた人の思いや、ここに道しるべがあって迷わずに行けてよかったという旅人の思いも実感できます。その時代の人々に近づくには、道しるべのようなものの力は大きいです。保存のあり方を含めて、一緒に考えていただけると嬉しいと思います。やはり見守ってもらっている道しるべは残っていきます。ぜひ関心をもっていただき、若狭の道しるべももっと発見されるというようになるとよいと思っています。以上です。

若狭と近江をつなぐ道

高島市教育委員会 文化財課 主監 山本晃子

それでは、改めまして皆さん、こんにちは。お隣りの滋賀県の高島市教育委員会から参りました山本と申します。これまでの先生方のお話しが本当に楽しく、面白く、すっかり若狭の勉強をしにきた一参加者になってしまいました。今から何を話そうか、本当に迷っていますが、本日の私の役割はどちらかと言えば若狭を出て、近江に入ったところが中心です。私はこれまでの先生方の研究報告のようなお話しができないので、現地のご紹介が中心となりますが、最後の報告としてお付き合いいただければと思います。どうかよろしくお願ひします。



今日はテーマの1つとして道標が挙げられると聞いていましたが、滋賀県高島市の保坂というところに道標があります。順礼道と書いてあるように、まさしく29番松尾寺から30番宝厳寺へ行く途中の、西国三十三所観音順礼の道中にある道標です。ただ、この道を通ったのは、もちろん順礼者だけではありません。逆にそもそもこの道が整備され、多くの人々が通ることになったのは、やはり荷物の運搬道として整備されたからですね。若狭から近江へどのような道があったのか、なぜこの道が整備されていったかというところをざっとお話ししたいと思います。

1. 若狭・近江間の街道

今日は日本海、そして若狭と近江を結ぶ道がテーマということで、その近江側の起点には竹生島に渡る港がある今津と木津があります。近江国はそもそも日本海と琵琶湖を結ぶ道だけではなく、琵琶湖を中心として街道が多い地域です。そして、日本海を通じて北国一円から集められた荷物を敦賀、小浜などの大きな港から大津、京、大坂へ運ぶために集められた場所が、琵琶湖北方の今津と木津の港です。

小浜に集められた荷物は九里半街道を通りますが、敦賀に集められた荷物は七里半街道や塩津街道と呼ばれる道を通して、海津、大浦、塩津などの琵琶湖の港に集められます。まずはやはり日本海の荷物を琵琶湖の水運を使って京、大坂に運

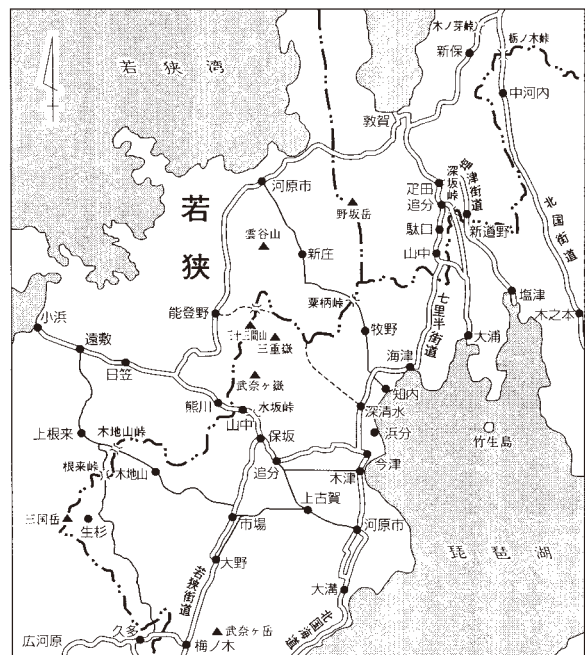


図1 今津浦をとりまく街道図

ぶためには、琵琶湖北部にある港に集めないといけない。小浜や敦賀といった日本海沿岸地域と琵琶湖の北部を結ぶ道は、早くから整備され、発展してきたという歴史があります。

私が高島市などで街道のお話しをさせていただく際には、よく街道の名称のつけ方について説明します。近江、琵琶湖の周りにはたくさんの街道が通っていると言いながら、わりと定まった名称がなく、それらを説明するにも当然、地図を見ながら、最近パワーポイントを使って話しますが、どの道を指しているのかわからないということがよくあるのです。よく聞かれるのが、いつ、誰が、街道の名称を決めたのか、いつから定まっているのかということで、それぐらい街道が多いということもあるのですが、原則というよりも今までも使われているとおり、官道など定まった道以外、街道の名称は目的地の地名を指してつけられています。同じ道を指していても、どこに住んでいるかで道の名称が変わってきます。近江と若狭を結ぶ道を私は若狭道とも言いますが、若狭の方は若狭道とは言わないですよ。道標などでは京道、今津街道と書かれていると思うのですが、同じ道を指していても呼び方が違う。北国海道も、当然、北国へ向かうための街道ですが、北国海道でややこしいのは琵琶湖の東岸にも北国街道、北へ向かう道があるので、琵琶湖の西岸を通る道には北国海道と海という字が当てられています。これも定まった名称ではなく、実際に史料を見たり、古い絵図を見ると街道と海道、両方の字が使われているのですが、使い分けるために琵琶湖の西側の道は北国海道と書いたりもします。

それぐらいに定まった名称がない街道ですが、その中でも地名を使わずに呼ぶ場合がありますよね。先ほどから話が出ている順礼道も、史料では九里半街道と呼ばれることもある。これは里程、距離を表す名称で、今津と小浜との間は約38kmあることから、九里半街道という名称が使われています。

目的地を指す場合もあり、その道を通る人の目的を使うこともあり、そして、その道の状態や里程を表した名称が用いられることもある。街道の名称はいろいろあるということをご紹介して、次に若狭と近江をつなぐ道の役割を考えたいと思います。

先ほど北国各地からという言葉を用いましたが、江戸時代には日本海側の日本海沿岸の港に、北陸も含めて北国各地の藩の蔵米や産物などが多く運ばれています。それを小浜に集めた場合、順礼道でもあったこの九里半街道を通ることになりますが、どれぐらいの荷物が通っていたのかと言うと、明和4年(1871)の『稚狭考』の記録では、延宝9年(1681)の小浜の米・大豆・小豆の入津量が24万3千俵で、本当に北国各地から運ばれています。大名からの蔵米が、加賀、秋田、津軽、柴田(新発田)、高田の他、越前、丹波、但馬の諸藩から来ています。米だけではなく、一般の商人の荷物も記録によれば、佐渡、能登、越中、出雲、松前の諸物産、筑前の磁器、出雲の鉄、播磨の塩、津軽の材木、日本海沿岸諸藩の四十物が集まっていたと書かれています。日本海沿岸だけではない、各地の荷物が小浜へ集まってきて、それを運ぶために使われた道が順礼道と言われることも多い、この九里半街道であるということが出来ます。

道を通る人の様子は、今は史料でしか読むことができません。西国順礼をする人達の道中記には、当然、順礼者の話が出てきますが、一方で道中記ではなく、荷物を運ぶ人達の記録も古文書にはよく残っています。それを見ると、どれぐらいの人が通っていたのかを想像することが出来ます。西国三十三所の札所巡りの順礼者が通るといってもありますが、特に九里半街道では多くの荷物を運ぶために大きな道に整備されています。

日本海の荷物が運ばれる先の琵琶湖の港について、これも大前提になりますが、琵琶湖の水運がどれぐらい整備されて、琵琶湖の中でどのように船が動いていたのかということをし見してお

きたいと思います。

江戸時代、琵琶湖岸の各港に船があり、琵琶湖特有の丸子船という船を使って荷物を運んでいたということは、よく知られています。

大きく分けると、琵琶湖の中の三つの地域で支配が行われていたと考えられています。特に大きな港として、幕府の手厚い保護を受けていた大津、堅田、八幡の港。諸浦の親郷を名乗った大きな港です。次に湖北四カ浦と呼ばれる今津、海津、塩津、大浦の港は、日本海運との結びつきのあった港です。一方で琵琶湖の東側には松原、米原、長浜の湖東三カ浦と呼ばれる、東国からの窓口になる港があります。ここは江戸幕府の船奉行の支配外にあり、彦根藩の保護をうけて発展していった港です。この中で、特に湖北四カ浦は日本海と結びついていたというのが前提です。

もう一つ、琵琶湖水運の特に有名なルールとして、慶長3年（1589）に「ともおり法度」として明示された蘆折廻船という決まりがあります。これは船尾が先に浜に着いた船から荷物等を積み込むことができるというのですが、このようなルールを決めて、琵琶湖水運は統括、統制され、そして発展していきます。

北国一円の荷物が届く湖北の四カ浦ですが、九里半街道の琵琶湖側の先にある今津は金沢（加賀）藩の領地でした。寛永7年（1630）、金沢藩代官の甚右衛門に今津での蔵屋敷の建設を命じる記録が『国事雑抄』に残っています。湖北の四カ浦は北国各地はもちろん、特に金沢藩と大きなつながりがあったということを指摘しておきたいと思います。

2. 栗柄越え（新庄道）

琵琶湖の前提のお話をさせていただいたところで、具体的に若狭から近江へと向かった道を順に見ていきたいと思います。

栗柄越えについては、皆さん、ご地元ということもあり、よくご存知かと思いますが、近江側は街道の整備がされているというよりマキノ高原からのハイキングコースという使われ方をしています。峠には石仏や石畳の道が残っています。

元々、近世は若狭でも東寄りの三方郡の荷物は美浜町新庄を經由して栗柄越えから牧野を通過して、海津または知内へ出ていました。知内は海津より少し南側の港ですが、人が通っただけではなく、江戸時代中期には荷物も運ばれることがあったそうです。

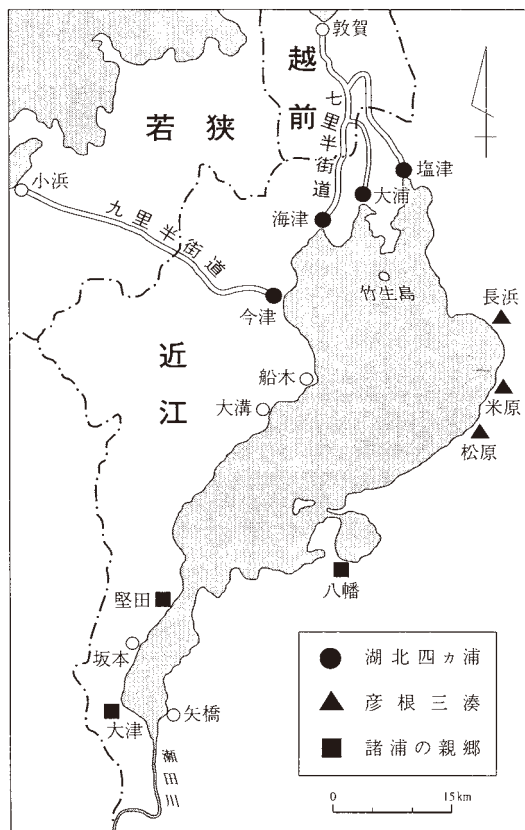


図2 琵琶湖の諸浦



写真1 栗柄峠に残る石仏

若狭から近江へ行くいくつかの道で荷物が運ばれることは当然ですが、実は馬借という荷物を運ぶ仕事をしていた人達にとっては、いろいろな道を通られることは困ったことであったようです。

江戸時代中期以降に西回り航路が整備されると、日本海から近江の琵琶湖へ運ばれる荷物はやはり少なくなります。日本海各地の荷物は西回り航路で瀬戸内海を通過して直接、船のまま大坂へ運ばれますので、敦賀や小浜から陸路を通過して琵琶湖まで運ぶ荷物が少なくなったのです。荷物が少なくなると、特に九里半街道で荷物運びを仕事にしていた人達は、他の道が使われることを極端に恐れて、栗柄越えで荷物が運ばれた時は、九里半街道の途中にある熊川宿の役人達はその取り締まりをすることもあったようです。

九里半街道が主に使われていた一方で、若狭から日本海沿岸の荷物を運ぶ際の抜け道、もう一つのルートとして使われていたのが栗柄越えであったことも触れておきたいと思います。



写真2 峠道の石畳

3. 九里半街道

やはり主なルートとして使われていたのが、若狭小浜と近江今津を結ぶ九里半街道ですが、この里程を表す九里半という名称は早くから史料に出てきたようで、中世の『今堀日吉神社文書』には「九里半階道路」、「九里半」と書かれています。江戸時代の古文書には、若狭へ向かう道なので若狭街道と呼んでいるものもあり(『日置神社文書』)、若狭海道という書き方も史料に残っています(元禄8年(1695)「熊野山山論絵図」)。また、九里半街道のちょうど中間に置かれた番所があった熊川宿、ここに残っている『熊川宿御用日記』という役人が書いた記録では今津海道という呼び方もされています。

では、この道はなぜ江戸時代にたくさんの荷物が通ったのか。その理由が【史料1】です。天正11年(1583)、羽柴秀吉、後の豊臣秀吉が若狭からの荷物を独占的に今津に着けるように定めたことから、九里半街道の発展は始まったと言われています。

秀吉から今津へ渡された書状を含む『河原林文書』は、『今津町史』という自治体史では加越能文庫という金沢の図書館にある写本を出典としていますが、近年、原本が発見されて、現在、若狭歴史博物館に所蔵されています。最近も展示されていたので、ご覧になられた方もおられるかも知れません。まず、秀吉が小浜からの荷物を今津へ着けて、今津の港の発展の基盤を作ったという史料があり、その後、若狭一国を支配することになる浅野長吉という人物も、この秀吉の政策に倣って九里半街道の馬借に全ての荷物を今津から積み出すように命じている史料が残ってい

【史料1】「河原林文書」『加越能文庫』〔羽柴秀吉判物〕天正11年6月1日
若州より往還の高荷船等の事、先々の如く当浦へ相着くべし。若し違犯の輩これ在るにおいては、成敗を加うべきものなり。

天正十一

六月朔日

江州高島郡

今津浦中

秀吉(花押)

【史料2】「河原林文書」『加越能文庫』〔浅野長吉書状〕天正15年（1587）カ3月13日

以上

若州へ立ち候海道の馬借、先々の如く小浜において相違有るべからず候。これに仍て荷物並びに家中の八木たりといえども、御朱印の旨に任せ、当浦へ出すべく候。一切余の浦へ出すべからざす候。少しも新儀の事、曲事たるべく候なり。謹言。

三月十三日

弾正少弼

長吉（花押）

今津惣中

【史料3】「河原林文書」『加越能文庫』〔裁許状〕寛永九年（1632）12月21日

以上

今度、熊川より木津え新道ヲ止め、前々のことく今津通り往還たるへし。但し、木津ハ京極若狭守領地為る間、若狭守並びに家中の荷物は、其の心次第木津え相通す儀、相違あるへからざる者也。

寛永九

伊賀守

十二月廿一日

御印

丹後守

御印

信濃守

御印

讃岐守

御印

大炊守

御印

江州

今津

まず【史料2】。長吉はこの時、街道の中間点に位置する熊川宿の整備も進めました。

その後、今津へ荷物を着けるということに関して、今津のすぐ南側にある木津という港がやはり異を唱えます。全ての荷物が今津へ行ってしまうと、木津から運び出すものがなくなってしまうので、後の時代には旅人や順礼者の取り合いもし、荷物の取り合いもしています。港で荷物の積みおろしをする人々にとって、やはり荷物の量は大変重要で、木津にも荷物を回して欲しい、順礼者を回して欲しいという争論が何度も起こるのですが、江戸時代前半の段階には幕府の裁許状が出ていたこと、そして秀吉の書状の効力が生きていたことから、若狭からの荷物は原則、今津に着けて、木津は若狭小浜藩領であったので、藩の荷物だけは一部、木津に着けてもよいといった記録が出てきます【史料3】。お許しは出ますが、それでも原則は今津に荷物を運んでいたのが九里半街道の役割で、今津に向かってたくさんの荷物が運ばれた理由です。

4. 街道を通った人々と街道沿いの史跡

それでは、【史料4】、貝原益軒の『己巳紀行』を見ながら九里半街道周辺の史跡を写真で紹介したいと思います。始まりは熊川で、小浜より四里半というところから始まっています。史料4の3行目が若狭と近江の境です。3行目に「その中ほどに谷川あり、これ若狭と近江の境なり」とありますが、写真3が現在の様子です。熊川を抜け、近江側へ進むと、現在、福井県の下大杉と滋賀県の上大杉という集落が並んであり、その中間に今も谷川が残っています。地元の皆さんからワンダタンと呼ばれてる谷川ですが、史料にある若狭と近江の間の谷川が写真3です。

東へ向かってこの川を越えると、近江国に入ります。道中、街道であったことを示す史跡がいくつか残っています（写真4）。現在、寒風川を渡る橋は寒風トンネルの手前に架け替えられていますが、かつてはトンネルの少し横に橋が架かっていました。その橋を渡ったところが、現在は上大杉と合併して杉山という地区ですが、番所のあった山中村です。『西国順礼略打道中記』には山中番所の挿絵も出てきますが、熊川番所よりは少し大きめに描かれていますね。現在もまだ集落はありますが、もうほとんど家がなくなり、道だけが残っています。おそらくこの周辺にあったのであろうという山中の関跡付近の現在の様子が写真5です。

山中を抜け、水坂峠（写真6）を越えると、旧道が少し山手に残っていますが、現在は明治時代に整備された、旧国道のアスファルトの道が通っています。水坂峠を越え、旅人が休んだ石（写真7）の前を通り抜けると保坂という集落に至ります。保坂集落の西端に、金毘羅神社（写真8）が祀られていますが、神社境内に小浜の両替飛脚が寄進した御神灯（写真9）が残っています。若狭の商人がたくさん行き来していたということになるかと思えます。

弁天宮の前を通り、保坂集落（写真10）内の今津方面へ真っすぐ行く道、朽木・京方面へと向かう鯖街道と呼ばれる国道367号へ通じる道が分岐する三叉路に立っているのが、保坂の道標（写真11・12）です。左へ真っすぐ、ほぼ直進の今津へ向かう道が順礼道で、右、すなわち南へ行くと京道です。京から来て、見える面には左、若狭道とあります。この道標を立てた人の名は「施主 京都桑村氏」とあります。京都桑村氏の名は大津市途中の折れた道標にも書かれていますが、京都の商人がこれらの道標を寄進をしたということになります。



写真3 大杉（国境の谷・ワンダタン）



写真4 寒風の石碑



写真5 山中関跡付近（現杉山）



写真6 水坂峠



写真7 ヤスミト(腰掛石)



写真8 保坂・金毘羅神社



写真9 金毘羅神社の御神灯



写真10 保坂の集落

【史料4】「己巳紀行」元禄2年(1689) 『新日本古典文学大系』

熊川小浜より四里半あり。熊川より朽木へ四里、今津へ五里。此の辺四十八町を一里とす。宿駅也。町長し。女をとゞむる関所あり。券なければ女を通さず。熊川より八町許東に、上大杉、下大杉とて民家つゞけり。其の中程に谷川有り。これ、若狭と近江の境也。若狭国、長さ十七里、横は一二里、或四五六里、所によりてかはれり。山中村近江の内。朽木監物殿領也。関所あり。朽木氏の家人、番をつとむ。芳坂山中より一里有り。是より朽木谷へ行道有りて、山中に入。追分村山の中に民家有り。大溝と今津へ道有り。故に「追分」と云う。是より大溝へ四里、熊川へ二里半有り。今津は湖中に出たる町にて、嶋の如し。西の方纔に陸につゞく。此の辺、今津、貝津中村に、松平加州太守の采地二千三百石有。

(琵琶湖の説明、略) 今津より勢田十七里、大溝へ四里、京へ十七里、越前敦賀へ十里半。敦賀より京へは廿七里有り。今津に民家四百余有り。

今津より竹生嶋へ、湖上三里有り。(竹生嶋説明、略)

予、東近江へ遊観の志あれ共、今日、逆風吹て行事あたはず。竹生嶋より又、今津へ帰り、朽木谷を通て京へ帰らんとおもひ、籃輿らんよにのりて西の方へゆく。今津より荒川村へ三里あり。其の間に南北壱里、東西一里半余の茅野有り。熊野山と云。土地よしといへども、田園なし。民家も亦なし。荒川は朽木谷の口也。(以下略)



写真11 保坂の道標1



写真12 保坂の道標2



写真13 今津・泉慶寺庫裏下の道標



写真14 追分の黒福橋



写真15 追分の集落



写真16 北国海道との分岐点
(阿志都弥神社常夜灯)



写真17 弘川の分岐点



写真18 弘川村地券取調総絵図
(明治6年・部分)



写真 19 今津の町並み



写真 20 今津浜の石垣

この道標については、もう一つご紹介したいことがあります。道標が示す順礼道の行き先である今津の浜通りにある泉慶寺の本堂基壇に道標が使われています（写真 13）。「左 わかさ道」と読めるのがわかるでしょうか。私は建物の縁の下に潜らせていただき、道標の裏側と上側を見ましたところ、保坂の道標に書いてある文字とほぼ一緒でした。一つだけ抜けていた文字があつて、保坂の道標には、順礼道の下に今津街道と書いてあるのですが、泉慶寺本堂の下の道標にはその文字だけがありませんでした。それが今、今津の寺院の本堂の下に寝ています。どういうことかわかりませんが、作成をしたのに何かの理由で使えなかったのもので、お寺の基壇に転用したのかなと思っているのが、この道標です。

少し省略をして今津に向かって進みたいと思います。

弘川の集落で街道をまっすぐ行くと今津港、そして北へ向かうと北国海道、敦賀へ向かう道に分岐します（写真 16）。今、この場所には近くにある神社の灯籠だけが立っているのですが、昭和初期頃の写真を見ると灯籠の横に道標が立っていたことがわかります（写真 17）。道標はやはり外に立っているので、なくなったりもします。実は、今回、フォーラムのお話をいただいてから高島市内の道標をいくつか確認したのですが、情けないことに昭和 40 年代にはあると書かれているのに、もう所在が確認できなくなっていたものもありました。この弘川の道標も明治 6 年（1873）の地券図には絵が描かれています（写真 18）。

弘川の分岐を過ぎると目に入ってくるのが今津の町並みです（写真 19）。今津は金沢藩領で、蔵屋敷が建てられていました。ただ、江戸時代を通じて金沢藩領として発展した今津ですが、現在は湖岸の一部に石垣が残っているくらいで（写真 20）、港の名残はもうあまり見られなくなっています。

このように九里半街道を辿ると、多くの人や荷物がこの道を通ったことを、史料や地元に残っている史跡、いろいろなものから感じることができます。私のお話しはこれまでにしたいと思います。ありがとうございました。

座談

近世若狭の交通と往来 ～道、旅、道標～

舞鶴市郷土資料館 学芸員
滋賀大学 経済学部 教授
高島市教育委員会 文化財課 主監
福井大学 教育学部 教授
進行 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員

小室智子
青柳周一
山本晃子
門井直哉
松葉竜司

【松葉】では、最後のプログラム、座談を進めたいと思います。今回の座談のテーマは「近世若狭の交通と往来」ということで、フォーラムのサブタイトルに掲げた「道、旅、道標」について、それぞれ取り上げていきたいと思えます。



1. 近世若狭の道を考える

【松葉】まず江戸時代の街道のイメージについて、先生方にお聞きしたいと思います。例えば時代劇などでは茶屋があり、細い山道を通っていくようなシーンを見ることもあります。若狭には現在も丹後街道の名残が残っていますが、実際、どのようなイメージを感じておられるでしょうか。

【門井】私の報告ではもっぱら絵図を用いて街道の写真などを提示することはなかったのですが、後の先生方のご発表でいろいろとお話しもあり、大いに参考になりました。

平野部や拓けたところは別として、山間部に入っていくような間道はかなり道幅も狭く、通行が不便なところが多かったのではないのでしょうか。ちなみに正保年間の越前国絵図では国境付近の記述に、特に冬場は雪が深く通行できない、牛馬も通行できないなどの記述があります。特に峠を越えていく道はあまり整備もされず、きっちりとした通りやすいような整備までは至らないという状況があったのではないかと思います。

【松葉】青柳さんと小室さんとは丹後街道を中心に若狭を一緒に横断しましたが、実際に感じた印象などはありますか。

【青柳】報告の中でもお話ししたように、9月にフォーラムに関係する場所を松葉さんの運転で辿りました。松尾寺を出て、丹後街道から熊川に出て、近江の保坂まで行ったところで引き返し、三方郡を抜けて菅浜まで行き、最後は敦賀駅で解散というコースを、台風が迫る中で大急ぎで移動しました。

街道のイメージではないかもしれませんが、お陰様で若狭国の範囲、実際にどれくらいの広さがあるのかということがとてもよくわかりました。また、丹後街道が若狭を一つの道として突き抜けているので、交通的にはある意味すごくわかりやすい。さまざまな間道もありますが、やはり丹後街道が基本線で、何せ近江が琵琶湖を中心に蜘蛛の巣みたいに道があるところなので、若

狭はわかりやすい世界かと思いました。そして、若狭湾、小浜湾には船が走っているので、やはり船の移動との関係、水上交通と陸上交通の両方を考えないといけないと思います。以上です。

【小室】私も一緒に行かせていただきましたが、本当に道がわかりやすいと思いました。現在の道にも標識がたくさんありますが、丹後街道、私は丹後街道とは言わず若狭街道と言っていますが、高浜の町も小浜の町も、海を前に、山を背に細長くつながっているの、旅人は迷わずに往来できたのではないかと思います。ただ、現代、私達は逆に山道を歩かないし、午後5時を過ぎてもう真っ暗な夜道は歩かないですね。ですが、昔の人はそのようなことに馴染んでいた、歩けるようなシステムであったのではないかと思います。

【松葉】今、若狭や舞鶴あたりのお話をいただきましたが、山本さんは近江、今津から見られていかがですか。

【山本】私の道の印象としては、周辺に道標や神社がよく残っていることもあって、大変整備された、わかりやすい道であったと思っています。当然、旧道の横には新道が造られたりもするのですが、高島市内も実際に辿ってみると旧道がよく残っている場所です。やはり、人の行き来も多く、よく整備がされていたのではないかと思います。

【松葉】これは七里半街道のことでしょうか。ありがとうございました。

丹後街道は国道27号に平行したり、あるいは斜めに交差したり、結構、街道の景観が残っているところも多く、最近では若狭町のあたりの丹後街道沿いで意図的に松を植えて昔の街道の風景を復元しようとしているような取り組みをされているようです。

今、船での移動、水上交通のお話しもありましたが、若狭の場合、順礼者は陸地を行っても、高浜から小浜の間を船で行っても、どちらでも移動できたようで、道中記などの史料にも船に乗ることができると書かれています。表1、40ほどの順礼旅日記や道中記などの史料のうち、若狭を通るものについて一覧にしたのですが、これらの史料の3分の1から4分の1は船での移動のことを書き上げています。「高浜から小浜に船に乗ることもできる」といった感じで、ルートの一つとしては意外と書かれているのですが、実際にこれらの船に乗ったという記録があまり書かれていないので、実際の使用頻度はどれほどだったのかとったりします。実際のところ、青柳さん、どうなのでしょう。

【青柳】それはよくわかりません。『西国順礼略打道中記』には船について書かれていますが、実際はどのように使用されていたのか、史料ではほとんど見たことがありません。

【松葉】そうですね。門井さんにお聞きしますが、ご報告の中で国絵図にみられる地名を丹念に拾われて、「古地図に見える若狭の地名」として一覧表にされていましたが（フォーラムⅠー表1）、舞鶴市糸井文庫には江戸時代後期の西国順礼絵図も何点か現存しているのですが、国絵図に示される地名と順礼絵図に見られる地名について、相違や特徴などはあるのでしょうか。

【門井】特に六十余州図はかなり細かく村の名前を挙げていますので、この絵図と西国順礼絵図の地名は重なるものがあるのではないかと思います。ただ、これも日本図になると地名もかなり省略されてしまいます。日本図の場合、交通の分岐点になるようなところや、ポイント、ポイントの地名が出てくるような傾向があるかと思っています。



【松葉】図1に示したものは西国順礼絵図の一つで、舞鶴市糸井文庫所蔵の『西国順礼道中絵図』です。文化年間の刊行で、粉川町大阪屋長三郎梓の製作とされているものです。私の私見で恐縮ですが、道中記や順礼旅日記に記載があるような、泊まるところ、宿があるところの地名、集落名が結構、順礼絵図にも地名として描かれているのではないかと思います。青柳さん、いかがでしょうか。

【青柳】そうだと思いますよ。『西国順礼略打道中記』には基本的に宿や小休止できる茶屋などがある集落が書かれています。そして1里、2里、3里などの距離が書かれています。3里は結構な距離があります。

和田、本郷のあたりにあまり茶屋がないということが泉光院の日記にも出ていましたが、それは実際にそのようで、表1に載っている史料の中にも、そのようなものがありますよね。陸上を行かずに、船で行き来する人もいるから、そのあたりには逆に茶屋などがなくてもよかったのではないかと。街道を使う人達は困るかもしれないのですが、大概是1里か2里ほど行けば何らかの宿や集落はあるので、西国順礼絵図にもおそらくここまで辿り着けば何とか休んだり泊まれたりするという場所が書かれているのであろうというのは、そうだと思います。



図1 舞鶴市糸井文庫所蔵『西国順礼道中絵図』

【松葉】小室さん、丹後の往来はどうでしょうか。

【小室】『西国順礼略打道中記』には、丹後の方では船に乗る必要がないみたいなことが書かれてあり、若狭の和田のところには船に乗ればこれが見える、陸を行ったらこれが見えるみたいな感じで肯定的に書かれています。やはり、吉田屋正六は陸の道で行ったと思うのですが、この人はいろいろな情報を集めながら道中を過ごしたのではないかと思います。丹後では確かにさほど船を使うような必要もないかと思います。成相寺から松尾寺までは12里半で、青柳先生の言われるように、1里から2里毎に宿や小休所があるので、急ぐ旅でなければゆっくりいけたのではないのでしょうか。



写真1 木津港と竹生島

【松葉】今日の山本さんのご報告では、順礼というより人や物の移動、往来に力点をお話しされていたかと思います。琵琶湖の北の方には木津と今津の港があって、秀吉以降、物資を運ぶのは今津港に集約されていくということで、そうであれば隣接している木津と今津の港は仲が悪く、喧嘩ばかりしていたのも当然かと思います。その後、実際にはどのように争っていくのでしょうか。

【山本】『西国順礼略打道中記』の吉田屋正六は、保坂から今津へ向かうのですが、図1の西国順礼絵図は道が二股に分かれて、今津と木津の港へのそれぞれの道が描かれています。この絵図には描かれていないのですが、分岐点に追分という村があり、ここで再三、客の取り合いをするのです。豊臣秀吉の政策によって原則、荷物は今津に運ばれますが、木津港も生き残りのために順礼者を呼び込むことをしています。

順礼者はどちらの港からも竹生島に向かいます。今津も木津も両方、船をもっているのですが、当然、荷物が多かったこともあり、船や問屋の数が多いのは今津で、一方で木津はせめて順礼者だけは運びたいということで、随分と呼び込みをしています。実際には途中で水難事故も起きました。やはり今津の問屋は元々、琵琶湖水運の中で堅田とも結んで保護されていた、そのような勢力の違いがかなり大きかったように思います。ただ、江戸時代後半は木津からもたくさんの順礼者が竹生島に渡ったという記録は残っています。

2. 近世若狭の旅を考える

【松葉】ちょうど話題が順礼にシフトしていますので、近世若狭の旅について、特に順礼に主眼を置きながらお話しを進めたいと思います。

資料集には40ほどの史料の翻刻を集めました。いろいろな道中記、順礼旅日記があることがわかったのですが、表1はこれらのまとめの一覧となっています。そもそも、若狭を通過する西国順礼者の史料を見て、単純に面白いと思ったのは、東北や関東から順礼に来る場合、まずは奥州街道を通過して、江戸で江戸見物をしてから、東海道を移動し、富士山も見ながら伊勢に参って、そこから和歌山に渡って西国三十三所順礼の旅を始めます。途中で讃岐に渡って金毘羅山に行くから、また西国順礼に戻り、若狭を通過して、最後は美濃で札納めをして、中山道を通って善光寺に行き、帰って行くという行程をとる人がかなり多いという印象を受けました。

これが東北や関東の人達の順礼の旅のパターンなのかと史料を集める中でわかったのですが、西日本から西国順礼の旅に出る場合も当然あり、青柳さんのご報告では西村美須さんの史料を取

り上げられていましたが、西日本から順礼の旅に出たという史料もいくつかあります。実は若狭を出発する史料も二つほどあります。福井県文書館所蔵の史料で、表1の史料17、『順礼若狭ヨリ道案内』では若狭から竹生島に向かいます。若狭から西国順礼を巡り、伊勢に参ってから西国順礼に戻るという行程です。香川県立文書館所蔵、表1の史料35、『西国順礼道中記』、讃岐を出発して西国順礼を巡り、伊勢に参ってから帰るという行程もあるのですが、史料が少ないながらも西日本在住者の西国順礼の場合は意外に寄り道をあまりしない印象ですが、そのあたり、どうなのでしょう。

【青柳】そうですね。まず全体的なこととして、今、史料として残っていて、それが確認されている道中記などで、伊勢、西国三十三所順礼の記録は東日本にも残っていることがかなり多いですね。関東、東北の人が伊勢参詣、西国にお参りに来るというパターンが多い。関東から来る西国順礼を「カントベ」と呼ぶ地域があったようです。私も東日本の出身者ですが、「関東っぺ」といった意味でしょうか。

もちろん西日本からも順礼に行きます。栗柄越えで、村の女性達が大勢連れ立って伊勢参詣に行ったという美浜町の女手形の史料もありましたが、女性達の年齢を見ると皆、若いですね。20歳未満の子達です。それは、伊勢参詣が一種の成人儀礼のようになっていて、世間を知るために旅に出ることが以前から指摘されているのですが、その典型的な史料かと思います。

近江にも似たような史料がありますが、西日本の村々でも伊勢には行く。その場合、やはり最短のコースを辿るので、東国の旅行者があまり使わない道を使ったり、西国順礼は三十三所めとして、谷汲山を最後に巡ることは動かないのですが、それ以外は何番から巡り始めてもよいのです。わりと1番からは巡らず、巡りやすい順序で巡り、最後に谷汲山に行き、さらに善光寺に行くか、それとも最後に伊勢参詣を残しておいて、『西国順礼略打道中記』の吉田屋さんは大坂の人なので、帰り道に伊勢を辿った方が帰りやすい。どこを出発地にするかによって、ルートはわりあい可変的とひとまず申し上げておきます。寄り道先も含め、ある程度は住んでいる地域によってパターン化できるのではないかと思います。

【門井】今の流れに乗って教えていただきたいのですが、今日、ご紹介いただいた西村美須さんは三十三所全てを巡っておられるのですか。

【青柳】回ってますね。

【松葉】ちなみに表1で挙げた史料には、漏れなく八百比丘尼の記述があるのですが、見るべき名所という位置づけで道中記などに挙げられるのでしょうか。

【青柳】若狭の中で、紀行文や道中記に必ず記される名所として、小浜のあたりでは八百姫ですね。順礼者の残した記録には、小浜に入る途中に八百姫を詣でたという記述がほぼ確実にあります。例えばその中で、特に面白いと思ったのが、表1の史料12、享和元年(1801)の『享和元年西国巡礼旅日記』ですが、「小浜の入口ニ八百姫大明神社あり。宝物沖のと中の三本竹式本竹かゝみじやこつ。其外色々あり。順礼ニハ銭なしニ開帳成候。御守ハ三十一文のと十八文のがあり」、八百姫のお守りは31文と18文で買えると値段が書いてあり、高いものと安いものがあったようです。そして、八百姫の坐像かと思いますが、これを開帳する時には順礼は無料であるとあります。順礼によるそのような要求も多かったのではないかと。

逆に言えば、一般参詣者からはお金をとって開帳して見せていたことがわかります。現在、寺院の秘仏公開の拝観料は高いのですが、あのような拝観料を取るようなシステムを導入したのは、やはり江戸時代であったようです。

八百姫の記述については、多くの史料に出てくるのですが、逆にこれは何故なのかとと思っているのが、空印寺に立ち寄ったということがあまり出てこない。現在、小浜市で八百姫と言えば空印寺ですが、そのことが江戸時代の順礼道中記にあまり出てこないのはどういうことなのか。八百姫伝承の変化、時代ごとにも違うという感じもして、個人的には調べてみたいと思っています。むしろ、もしお詳しい方がおられたら、おうかがいしたいです。

【松葉】史料を見ると、順礼者が立ち寄った場所は圧倒的に八百比丘尼の神明社が多いようですが、それ以外はあまりないような気がします。ちなみに丹後の場合、天橋立が多いようです。逆に近江、今津の場合はどこかの名所に行くというより、船待ちで今津で何泊か泊まってから竹生島に渡っていくパターンが多いです。

八百比丘尼のお話しは門井先生のご報告にもありましたが、丹波と若狭との親近性を取り上げられる中で、矢田部の坂を越えて八百比丘尼の神明社がある青井村まで来るということを考えても、若狭の正面観のようなものが意識されているのでしょうか。

【門井】私の発表では、近世のメインルートとして丹後街道、そして敦賀方面に向かう越前道がある中で、もう一つ、近世初頭の絵図には周山街道につながっていく知井坂（血坂）越えの道があることを指摘しました、この道は中世以来、京都と若狭をつなぐ重要なルートとして機能していたのであろうと思っています。西行清水や西行の呪い歌は南川沿いにあります。実際に西行がやってきたかどうかは別として、やはり知井坂越えから南川流域に入って、矢田部坂を越えて青井へと入ってくるルートが、特に中世にはかなり有力なルートとして機能していたのではないのでしょうか。また知井坂越えのルートからは外れますが、京都の陰陽師・土御門家が応仁の乱を避けて移り住んだ地が、南川の上流部・旧名田庄村の納田終であるということも、京都から丹波を経由して若狭に入るルートの重要性を物語っているように感じます。

【青柳】名所とは少し違いますが、若狭の中で必ず記されるものとして熊川の番所の女改めがあります。番所では女性が調べられ、生国、出身地を言えと言われます。情報量の多い、少ないはあるのですが、順礼であれば番所を通れるということは、かなりの頻度で記されていますね。

一つは、そこまで女性の通行に厳しい番所は珍しかったということで、取り調べるにも熊川番所ほど厳密にするところは実は少ないのですね。往来手形と関所通行手形さえあれば、この時代、一般の番所では女性は普通に通れます。

そして、なぜ道中記や紀行文が記されると言えば、中には十叟^{じっそうしゅ}舎^{しゃ}笹丸のようにひょっとしたら面白おかしい体験を出版したかったという商業ベースの理由もあるのですが、基本的には地域の人や家の後々の世代に対して旅行の体験を伝えるという目的があります。伊勢参宮がいわゆる成人儀礼のようなものと先ほど話しましたが、後の世代の人でも旅行をするわけです。その場合、どの道を通ればよいのか、どこでどのような取り調べがあるのかということを、紀行文や道中記によって伝えていくわけです。そのために記録として大量に残すのであって、その中で熊川に行く時は女性は注意しなさいということは、やはり伝えるべき情報であったと思うのですね。珍しさ、そしてやはり旅行の経験として重要であったということです。

【松葉】ありがとうございます。表1にまとめましたが、道中記などを見ながら、実際に若狭の周辺ではどこに泊まって、どのように移動していったのかということ調べてみました。若狭で泊まっているところは熊川か日笠、小浜が多いようです。高浜に2日ほど泊まっている場合や本郷で泊まっている場合もある。『西国順礼略打道中記』の宿の評価のお話しもありましたが、ちなみに若狭に入る前はどこに宿泊しているのかと言えば、松尾寺のあたりに泊まっている場合もあ

れば、田辺城下の場合もあり、結構ばらつきがありますが、小室さん、これを見られて何か傾向はありそうですか。

【小室】傾向はわかりませんが、いろいろなところに泊まっていると思いました。今津はたくさんさんの宿があるので、ほとんどの人達は今津に泊まると思うのですが、丹後では宮津に泊まったり、田辺に泊まったり、1日の移動の行程も田辺から小浜に行った人もいれば、宮津から遠敷まで行った人もいて、むしろ私が聞きたいです。こんなにいろいろなところに泊まるものなのでしょうか。全然、傾向がないような気がします。船を使うかどうかとか、観光地にどのくらいいるかとかもっと細かく分析したらおもしろいかもかもしれませんね。

【松葉】本当におっしゃるとおりで、丹後での宿泊地には本当にばらつきがあって、松尾寺の一つ前の札所、28番の成相寺のあたりで泊まっている傾向があるような気もするのですが、そんなに旅を急いでいる様子もなく、丹後では天橋立の見物を含めて、ゆっくりと巡っていると感じますが、逆に若狭は結構急いで駆け足で通過するパターンが多いように感じます。

ちなみに若狭の次はだいたい今津で泊まっているパターンが多い。ほぼ今津に泊まって、なおかつ波が高く、なかなかすぐに竹生島に行けないということもあると思いますが、何泊かすることも多いようです。今津の町には旅籠や木賃宿の名残が結構残っていると思いますが、いろいろとわかっているのでしょうか。

【山本】宿の数は記録でも出てきますので、多かったことは間違いありません。余談ですが、『西国順礼略打道中記』での吉田屋正六の宿の評価は、実は近江に入ると宿屋は全て「きれいな」と書いています。私は近江側の部分しか読んでいなかったのですが、基本的に全て「きれいな」と書いてあると思っていたのですが、違うんですね。そうではない評価のところもある中で、若狭を越えると、保坂や生見にも宿屋はあるのですが、全て「きれいな」です。当然、今津は順礼者もいましたが、荷物運搬に関わる人が多かったこともあり、宿屋の数はかなり多かった。なおかつ船待ちをする期間を見越していたので、数日の間泊まることがあったと記録にも残っています。

【松葉】今津に泊まった以後の行程もまとめてみました。若狭を通って今津まで行けば、当然、竹生島に渡るには渡ると思いますが、渡った後、どのようなコースを辿るのかということも確認してみたのですね。

これで見ると、1700年代前半までは竹生島から今津や木津に戻って、陸路で堅田まで行ってから、次の31番札所の長命寺を目指すというパターンが多い。あるいは、そうではなくやはり長浜の方まで行くというパターンもあり、あまり定まらないのが、初見では1799年、1700年代の末頃から1800年代にかけて竹生島から船で長浜、そして陸路で美濃に向かうというパターンに集約されていく。

ということは、途中の長命寺や観音正寺という31番、32番の札所をもっと早い段階で巡っているという想像はできるのですが、最初にこれに気付いた時はすごい発見をしたと自画自賛したのですが、実はこのことは順礼研究の第一人者でおられた田中智彦さんがかなり以前に既に論文に書かれています。石山寺から逆に巡って長命寺や観音正寺に行って、そして三井寺に行くことをしているのが、結局、竹生島からそのまま長浜に行って美濃に行けるということを描かれています。当然、これにはいろいろな事情が背景にあるのではないかと思います。青柳さんは名所のご研究でも著名ですが、近江八景と絡めて何かわかることがあるのでしょうか。

【青柳】竹生島に行った後は、船で八幡の長命寺まで渡って、そして観音正寺に行ってから美濃国の谷汲山まで行くのが本来の順礼のコースですね。ただ、琵琶湖を船で行けば、竹生島と長命

寺の間の距離が長いので、わりあい事故が多くなる。それでこのコースが忌避されるようになり、長浜までの短いコースをとるようになった。そうすると、どうしても竹生島、長命寺という順に巡れないので、別のコース、いわゆる逆打ちが一般的になったということが、田中さんのご研究であったかと思えます。

今津から竹生島に渡ってから、もう一度、湖西に戻り、堅田に行くルートもありますが、堅田の近江八景は堅田の落雁です。堅田からもう少し南へ行けば唐崎の松があります。確かにそれらを巡りながら行く順礼のコースも時々見かけます。それより一般的なのが、石山寺から陸路で現在の近江八幡あたり、長命寺や観音正寺へ先に行くというコースです。また、竹生島から長浜まで行けば、長浜から南へ下って米原まで行くと、すぐに中山道に出られます。米原と中山道の番場宿が道でつながっているのです。竹生島から長浜を経由して米原、中山道に出て谷汲山へと簡単に行けるわけです。合理的なコースが選択されていったという理由が一番説明しやすいですね。

【松葉】 門井さん、地理的に何か言えそうなことはありますか。

【門井】 竹生島が琵琶湖の中にあるだけに、順番どおりの移動は難しいところがあると思います。今、青柳さんが指摘された合理的な選択が一番理解しやすいと思いました。

【松葉】 ちなみに琵琶湖の水難事故はよくあったみたいですね。よく知られた水難事故もありましたよね。

【山本】 竹生島が琵琶湖にあるので、水路になるのは仕方がないのですが、今津から竹生島を通過して、対岸の長命寺までの区間は琵琶湖の波が高いことで知られています。有名な比良おろしという強風に当たりやすいところで、水難事故も多く発生しています。江戸時代後期には有名な水難事故も何回かあって、順礼者を乗せた船が遭難して、なおかつ今津側では遺体の回収がなかなかできず、今は東近江市ですが、対岸の能登川に流れ着きました。今も碑が残っていますが、大きな水難事故が何度か起こっています。

【青柳】 船の話ですが、もちろん今津から竹生島に船で渡るのが一般的ですが、今津からの船が強風などの理由で出なかった場合、一つは札流しをして渡ったことにするということが最も手取り早い解決法ですが、どうしても竹生島に渡りたい人は、今津ではなく湖北の海津や大浦まで行って、そこから船に乗るといったケースが時々あります。

そして、もう一つ余談ですが、『わかさの記』を書いた十叟舎笹丸は、帰り道、熊川まで戻って来て、その後、保坂の隣の追分まで行き、そこから大溝に出るのですが、そこまで辿り着けば琵琶湖を渡る船が出る、これで楽に帰れると思っていると、強風で船が出ずにぶつづつ言いながら大津まで歩いて行って、思うに任せないとか言いながら大坂に帰って行きました。近江国の交通は水運が便利ですが、一番計算できないのも水運です。

【松葉】 寶暦5年(1755)3月17日、琵琶湖で大きな水難事故があったようで、兵庫県播磨町に残っている『御月見日記』【史料1】という古文書にこのことが記されています。先ほど山本さんご紹介された碑は写真2、順礼三昧碑【資料1】といわれるものが東近江市にあり、実際に亡くなられた方々の人数などが刻まれています。その東近江市に残っている『福堂共有文書』【史料2】にも同じ水難事故が書かれていますが、『竹生島文書』にもこの事故が書かれているということで、相当な大きな水難事故であったことは想像できます。



写真2 順礼三昧碑(滋賀県東近江市)

【資料1】「順礼三昧碑」(滋賀県東近江市所在)

302cm×71cm×47cm、花崗岩製、
宝暦六年(一七五六)三月一七日建立

[正面]南無阿彌陀佛

[右面]宝暦六丙子年三月十七日建立

[左面](建碑の由来が書かれている)

[背面]

一人男	二人男
・若州四人内	播州四人内
三人女	二人女
二人男	五人男
作州三人内	淡州一〇人内
一人女	五人女
七人男	九人男
播州二十人内	紀州十六人
十三人女	七人女
備州七人男	……(中略)…… 三人水主

【史料1】宝暦5年(1755)春『御月見日記』

(前略)

比年の春、当村伊勢参有、其跡ニ而当村・大沢村・森安村・明石との西国竹生嶋の船三月十七日難風にて諸国乗人・船人共以上七拾人相果大騒働、当村瓜生平七妻、かの川惣兵衛妻、瓜生の喜兵衛の娘、西ノ喜右衛門孫娘ノ五人、大沢孫兵衛、同村吉兵衛相果、就夫村役人遠慮被仰付難儀被致候、(後略)

【史料2】宝暦5年(1755)4月16日『福堂共有文書』

覚

- 一 金子貳拾貳兩壹歩
- 一 銀子壹貫貳百七拾八匁二分
- 一 錢貳拾貫五百五拾六文 以上

ノ

右者先日十七日高島郡木津浦助作船破船仕、順禮六十九人并加子三人共致水死候ニ付、御改御帳面之通私共へ御預被成、慥ニ受取申候。御下知次第何時ニても差上可申候。爲後日仍如件。

寶暦五年亥四月十六日

江州神崎郡福堂村

庄屋 興左衛門 印

年寄 庄五郎 印

石原清左衛門様 御手代

服部丈右衛門殿

3. 近世若狭の道標を考える

【松葉】最後に、近世若狭の道しるべ、道標ということで、お話しを進めたいと思います。今日、小室さんがお話しされた安田重晴さんが若狭の道しるべをかなり調べておられ、私の道標調査もそのご研究に負うところがかなり大きかったと感じています。日笠や湯岡の道標がそうですが、『西国順礼略打道中記』に描かれた道しるべと現地にある道標を同定できるものもあります。

表1の史料17、福井県文書館所蔵の『順礼若狭ヨリ道案内』という史料にも道標の記述があって、これは保坂の道しるべのことかと思いますが、「一方坂 今津へ三り 村はずれニ楯石有 右へ竹生 京道 左り今津道」と、絵ではなく文字で示された道しるべもあります。ただ、刊本、印刷された出版物として『西国順礼細見記』という史料があって、この史料はこれとほぼ記述が同じなので、おそらくそれを見本に書いているとは思いますが。

会場から「そもそも道しるべは、製作、設置、管理等の主体は各藩であったのか、それとも地域の住民なのか」というご質問をいただきました。小室さん、いかがでしょうか。

【小室】藩が道標を設置したということは聞いたことがありません。舞鶴にある道しるべは願主などと書かれていますので、それぞれ個人の人達が設置したものと思っています。江戸の人が京都の清水寺と舞鶴の金剛院、もう一か所、丹波にも寄進したという記録もあるので、そのような人達の思いを地元の人が受けて寄進するのではないかと思います。

【松葉】実際、講であったり、日笠の道標では滋賀県の神崎郡の方が施主であったりします。個人や地域、講、いろいろな人達が設置したようです。

小室さんがご報告の中で面白いお話しをされていましたが、若狭の道標には「じゅんれい道」、「竹生島道」などの表現で順礼の道であることを示す道標が多い、舞鶴や丹後にはあまりそのような道標はないというご指摘をされていました。若狭を出て今津のあたりは九里半街道と北国海道が交差するような場所に当たりますが、山本さん、今津の道標に何か特徴はありますか。

【山本】道標は北国海道沿いにもたくさん残っていて、現在ももちろん見ることはできますが、特徴としてすぐに思いつくことはないです。また、残念なことです。北国海道沿いの道標もなくなっているものがあります。昭和40年代に木村至宏さんが調査をされて、昭和46年に『近江の道標』という本を出されていますが、それに載っている道標が現在確認できないという例も、北国海道沿いには多いです。

【松葉】高島市教育委員会が平成31年(2019)3月に出版された『近世の北国街道を歩く』という冊子を私は個人的にいただきました。これにも結構、道標が載っていますので、皆さんもご覧いただければと思います。

今、失われている道標も多いというご指摘がありました。若狭の道標も文化財指定が図られているものもあれば、安田さんの先行研究には掲げられてはいるのですが、残念ながら実際、現地で確認できないものもあり、このような世の中で盗難なども心配で、現地での保存もなかなか難しいご時世なのかなと思います。



表1 道中記・順礼旅日記等関係史料一覧

史料番号	史料名	著者	居住地	順礼ルート ①江戸、②伊勢、③西国順礼、④金毘羅、⑤善光寺	順礼期間	若狭周辺の宿泊日・宿泊地			今津以降の行程(⇒舟路→陸路を指す。) ①竹生島、②今津、③長浜、④長命寺、⑤美濃方面	出典 (所蔵)	備考
						宿泊1	宿泊2	宿泊3			
史料1	西国道中記	繁之	下総	①～中山道～②～③～東海道～①	宝永3年(1706)5月28日～8月13日	7/26松尾村	7/27熊川	7/28長命寺	①⇒④	文献1	
史料2	西国三十三所順禮道中記	前田氏(写)	福知山カ	③	享保2～6年(1717～1721)カ	—	—	—	①⇒②→西近江路→堅田村⇒④	文献2	書写は寛政元年(1789)、部分
史料3	万覚日記	依田長安	甲斐	東海道～③～中山道	享保6年(1721)2月9日～4月22日	4/10松尾寺	4/11ひかた	4/12こうづ	こうづ⇒①⇒④	文献3	
史料4	西廻記	不明	伊勢	②～③	享保年間(1716～1735)	—	—	—	①⇒④	舞鶴市糸井文庫	部分
史料5	安永三年西国道中附	後藤元平	豊後	瀬戸内海～③～②～③	安永3年(1774)6月19日～8月26日	7/9久田	7/10小濱	7/11今津	①⇒②→西近江路→かたた⇒八幡⇒④	文献4	
史料6	天明三年二月白石三次西国道中記	三次秀前	磐城	奥州街道～東海道～②～③～中山道～⑤～日光	天明3年(1783)2月6日～6月27日	5/27市場	5/28～5/31高浜 5/31小浜	6/1今津	①⇒③→東海道→八幡⇒④	文献5	
史料7	伊勢参宮并西国三十三所順禮道中記	前川善太郎	伊万里	(船)～④～③～東海道～(船)～博多	寛政元年(1789)5月17日～9月25日	7/23中山	7/24高浜 7/25小浜	7/26保坂	①⇒③→東海道→④	文献6	
史料8	西国道中記	不明	陸奥	—	寛政2年(1790)2月9日～6月24日	4/11ゆら	4/12高浜 4/13熊川	5/26今津	①⇒海津・塩津・木ノ本村→③→⑤	文献7	
史料9	西国順禮路用	備中足守 錦屋治七	備中	③～②～③	寛政11年(1799)2月～	3/13田辺	3/14本郷 3/15井口村	3/16今津	①⇒③→⑤	岡山県立 記録資料館	部分
史料10	西国三十三観音札所巡拝道中記	関根万吉	磐城	東海道～②～③～中山道～⑤	寛政12年(1800)5月27日～8月13日	7/24くんだ村	7/25高浜	7/26今津	①⇒塩津→北国海道→③⇒④	文献8	
史料11	伊勢参宮・西国巡禮道中記抄	杉瀬志道	安房	(東海道)～富士登山～②～③～中山道～⑤	寛政12年(1800)5月28日～9月9日	8/14宮津	—	8/16今津	—	文献9	『伊勢参宮・西国 巡禮道中記』の抄録
史料12	享和元年西国巡礼旅日記	幸吉	遠江	(東海道)～③～(東海道)	寛政13年(1801)1月31日～ 享和元年(1801)3月31日	3/20松のお	3/21平野村	3/22今津	かい津・大浦・しほ津⇒①⇒早見村→⑤	文献10	部分
史料13	享和三年道中日記	小林儀兵衛	武蔵	東海道～③～中山道	享和3年(1803)正月5日～2月6日	1/27田邊	1/28本郷	1/29今津	①⇒米原→⑤	文献11	
史料14	金毘羅山 并二若州より西ノ諸州道中記	古河教泰	若狭	若狭～西国諸国	文化元年(1804)8月～	—	—	—	—	福井県文書館	
史料15	道中参所附	小泉角右衛門	武蔵	東海道～②～③～④～③～中山道～⑤	文化3年(1806)正月6日～3月15日	2/28田辺カ	2/29小浜カ	2/30今津カ	①→⑤(経路記載なし)	文献12	
史料16	西国道中記	三谷嘉十郎	備後	山陽道～③～中山道～⑤～①～東海道～③	文化3年(1806)2月19日～(4月26日)	2/27中山村	2/28本郷村	2/29今津湊	①⇒③→⑤	文献13	部分
史料17	順礼若狭ヨリ道案内	古河	若狭	若狭～③～②～③	文化8年(1811)3月～	—	—	—	①⇒大溝→西近江路→堅田⇒④	福井県文書館	
史料18	西国順礼道中記	益子廣三郎	常陸	東海道～②～③～④～③～中山道～⑤	文化9年(1812)正月4日～4月4日	3/11くんだ	3/12高浜 3/13熊川	3/14長濱	①⇒③→⑤	文献14	
史料19	文化九年西国道中日記帳	大熊氏	下総	①～東海道～②～③～中山道～⑤～坂東十三番	文化9年(1812)1月11日～4月1日	3/8ぐんだ村	3/9本郷村	3/10今津	海津⇒①⇒③→⑤	文献15	
史料20	西国伊勢道中日記	妙順尼	姫路	③～②～③	文政元年(1818)9月1日～10月29日	9/13田辺	9/14小浜 9/15遠敷	9/16今津	①⇒④	文献16	
史料21	伊勢・熊野・金びら道中記	花塚兵吾	下野	①～東海道～②～③～④～③～中山道～⑤	文政2年(1819)1月9日～4月1日	3/13ゆら	3/14高浜	3/15今津	①⇒③→⑤	文献17	
史料22	文政三年西国道中附	後藤徳左衛門	豊後	④～③～②～③～四国	文政3年(1820)2月21日～5月3日	3/11宮津	3/12三ツ松 3/13小浜	3/14今津	①⇒③→⑤	文献18	
史料23	西国順礼略打道中記(下巻)	吉田屋正六	不明	③	文政3年(1820)	—	—	—	①⇒④、①⇒③→⑤、①⇒八木浜→③→⑤、 ①⇒今津→堅田⇒この浜→④	文献19～21 舞鶴市糸井文庫	部分
史料24	不明(表紙欠)	横山家先祖	駿河	②～③～④～③	文政5年(1822)正月18日～(2月20日)	2/13松尾	2/14熊川	2/15まへ原	①⇒③→⑤	文献22	部分
史料25	西国順礼道中記	小柳藤太	越後	⑤～②～③～(北国海道)	文政6年(1823)4月23日～7月20日	7/2松ノ尾	7/3ひかさ	7/4今津	①⇒③→⑤	文献23	
史料26	道中泊休覚之帳	不明	常陸	①～東海道～②～③～④～③～⑤～ ～秩父三十三所巡礼	文政7年(1824)12月10日～ 同8年3月9日	2/16田辺	2/17小浜	2/18今津	①⇒③→⑤	文献24	
史料27	伊勢参宮道中日記	吉兵衛	会津	奥州街道～①～東海道～②～③～④～③～⑤～ ～北国街道～会津街道	文政13年(1830)正月9日～3月8日	3/19吉坂	3/20いノ口	3/21長濱	①⇒③→⑤	文献25	
史料28	天保七年順礼道中日記	大和屋庄兵衛	姫路	③～中山道～⑤～②～③	天保7年(1836)2月21日～6月朔日	3/5市場	3/6小浜	3/7追分	①⇒②⇒③→④→⑤	文献26	
史料29	西国道中記	角田藤左衛門	陸奥	奥州街道～東海道～②～③～中山道～⑤	天保11年(1840)12月11日～ 同12年(1841)2月8日	閏正月/17 中山	閏正月/18 本郷	閏正月/19 追分	①⇒③→⑤	文献27	
史料30	伊勢参宮道中日記帳	小林吉兵衛	会津	奥州街道～①～東海道～②～③～④～③～⑤～ ～北国街道～会津街道	天保12年(1841)正月5日～3月10日	2/15宮津	—	2/16保坂	①⇒③→⑤	文献28	
史料31	天保十二年二月西国道中日記帳	大熊氏	下総	③～④～四国～山陰～③～中山道～⑤～榛名山	天保12年(1841)2月1日～3月20日	3/3市場	3/4おにやう村	3/5竹生嶋	①⇒③→⑤	文献29	部分
史料32	西国順礼道中記	飯田氏	武蔵	①～東海道～②～③～中山道～⑤	天保12年(1841)6月1日～8月15日	7/28宮津町	8/1高浜	8/2追分村	追分村⇒③→⑤(今津の記載なし)	文献30	
史料33	西国順礼万日記	甚五郎	摂津	③～②～③	天保12年(1841)7月20日～(8月21日)	7/22ゆら村	7/23小浜	7/24今津	①⇒はや崎→③→⑤	文献31	部分
史料34	伊勢参宮名所旧跡・ 西国順礼道中日記	富右衛門	陸奥	奥州街道～①～東海道～②～③～④～③～⑤～ ～北国街道～会津街道	弘化4年(1847)5月12日～8月24日	7/28あやべ	7/29高浜 7/30熊川	8/1今津	①⇒③→⑤	文献32	
史料35	西国順礼道中記	不明	讃岐	③～②～③	弘化5年(1848)4月～	—	—	—	①⇒③→⑤	香川県立文書館	部分
史料36	伊勢・西国道中録	木内清左衛門	下総	～③～④～③～中山道～⑤～①	嘉永6年(1853)7月4日～8月21日	8/2中山村	8/3小浜	8/4今津	①⇒春照宿→⑤	文献33	
史料37	伊勢西国道中記	志村源右衛門	武蔵	①～東海道～②～③～④～③～中山道～⑤	安政3年(1856)12月15日～ 同4年3月24日	3/1宮津	3/2～3/3遠敷	3/4今津	①⇒③→⑤	文献34	部分
史料38	伊勢大々西国三拾三所順道中日記	青木茂十郎	武蔵	東海道～②～③～④～③～中山道～⑤	安政4年(1857)正月10日～(4月22日)	4/2三松村	4/3熊津	4/4今津	①⇒③→⑤	文献35	部分
史料39	西国三拾三所巡拝道中記	不明	山城	③	安政4年(1857)3月13日～4月17日	4/10松尾寺	4/11小浜	4/12今津	①⇒③→⑤	文献36	
文献40	多比能実知久佐	西村美須	伯耆	山陽道～③～②～③～中山道～⑤～日光～日光街 道～①～鎌倉～富士山～東海道～山陽道	万延元年(1860)2月28日～7月8日	4/18高浜	4/19小浜	4/20今津	①⇒③→④→⑤	文献37	
史料41	道中手扣	不明	陸奥	奥州街道～①～中山道～③	万延3年(1862)2月18日～4月7日 (文久2年カ)	3/12長命寺	3/13熊川	3/14松尾寺	八幡⇒④⇒①⇒今津→若狭方面	文献38	逆打、部分
史料42	伊勢太々西国順礼・ 諸国参詣日記印	栗原喜三郎	下総	①～東海道～②～③～④～③～中山道～⑤	文久2年(1863)12月17日～ 同3年4月28日	4/11市場村	4/12小浜町	4/13今津町	①⇒③→⑤	文献39	

4. 近世若狭の交通と往来に寄せて

【松葉】ちょうどお時間となりましたので、最後に皆さんから一言ずつコメントをいただき、フォーラムのまとめにしたいと思います。

【山本】今日は若狭、丹後について勉強させていただきました。高島市にも街道の周辺の史跡がたくさん残っていますので、ぜひ皆さん、お越しいただきたいと思います。ありがとうございます。

【小室】舞鶴は若狭湾の端で、若狭のことをもっと勉強しなければと思っていたところに、今回、フォーラムのお話しをいただき、本当にいろいろと勉強させてもらいありがたかったです。道しるべも舞鶴と若狭で随分と違いますが、似ているところもあり、それが若狭からの影響なのかと言えば、わからない部分があるので、やみくもに舞鶴の文化は若狭の影響が多いのではなく、これは違う、これは似ている、これは同じと言えるようにもっと勉強していきたいと思っています。ありがとうございました。

【青柳】今回は若狭でのお話しということで、国立国会図書館に行って、いろいろと史料を探したのですが、同じものが舞鶴市の糸井文庫にありました。わざわざ国会図書館に行かなくとも、若狭の地域の研究はできるということを改めて思い、糸井文庫のすごさを改めて確認したのが一つです。

そして、平成31年4月に改正された文化財保護法の施行によって、文化財は保存より活用といった感じで、今の政府はどちらかと言えば文化財は観光に活用できる、見栄えする文化財だけを残せと誘導している気もするのですが、それだけではなく、地に足の着いた、地域の人にとって身近で大切な歴史、文化をどのように活用し、継承するのか。そのことを考える時に、やはり道や道標は、日頃、我々が暮らしの中でいまだに使い、いまだに目にするものですから、このようなことも美浜町は文化財保存活用地域計画の中に盛り込んでいただきたいのを切にお願いしたいと思います。滋賀県もちゃんとしなきゃいけないんですけどね。このようなことを思った次第です。

【門井】今日は、私の発表はさておき、西国順礼について大変勉強になりました。私自身は、これまで古代をメインに研究してきたので、先生方の発表を聞きながら、改めて近世というのは史料が豊富だなと思った次第です。道中記を読んでも、近世の交通の事情がリアルに、当時を生きた人々の様子が目の前に浮かび上がってくるような面白さを感じました。

そして、その当時に設置された道しるべが今も残っている、そのような事実にもやはり感動を覚えます。松尾寺の近く、高浜町今寺に割と大きな通りに面していながら、30年以上にわたって寝たままの状態が保存されている、誰も動かさないということにも震えるような感動を覚えました。ご発表でも指摘されていましたが、道標はやはり現地にあつてこそという文化財だと思うのです。なくなる危険性もあるから資料館で保存するというのでは、やはり興ざめしてしまうところもあります。今寺の道標のように寝た状態であっても現地にあるということに意味があるのではないかと思います。ですが、このような文化財をどのように保護していくのかということは、これからの課題です。どちらかと言えば、道しるべは放置されるままというものが多いような気がするのですが、それらにも目を向けていく必要があるかと感じた次第です。どうもありがとうございました。

【松葉】今日は最後までフォーラムにお付き合いいただき、誠にありがとうございました。

【表1 道中記・順礼旅日記等関係史料一覧 関係文献出典】

- 文献1 海上町史編集委員会『海上町史研究』第25号 1985
- 文献2 深澤茜他「文献翻刻「西国三十三所順禮道中記」」『京都府立大学文化遺産叢書第五集 丹後・宮津の街道と信仰』
2012 京都府立大学文学部歴史学科
- 文献3 国立文献館「万覚日記」『文献館叢書7 依田長安一代記』1985 東京大学出版会
- 文献4 松本政信「安永三年 西國道中附」『西國道中記』1990
- 文献5 蒼田宏「第四編 近世 第四章 交通 第一節 街道・宿場・問屋」『大越町史』第二卷 資料編I 1998 大越町
- 文献6 前山博『伊万里地方史研究文献第二輯 伊勢参宮并西國卅三所順禮道中記』1995
- 文献7 川瀬雅男『西國道中記』1972
- 文献8 表麦村文化財調査委員会「西国三十三観音霊場巡拝道中日記」『表郷村郷土資料集』第十六集 1977
表郷村教育委員会
- 文献9 山口杉庵「伊勢参宮・西國巡禮道中記抄」1939
- 文献10 『舞阪町立郷土資料館資料集第八集 享和元年西国巡礼旅日記』2004 舞阪町立郷土資料館
- 文献11 青梅市教育委員会『青梅市史文献集』第五十四号 2008
- 文献12 世田谷区教育委員会「文化三年 道中参所附」『伊勢道中記文献』1984 世田谷区教育委員会
- 文献13 福山城博物館友の会『西國道中記 一三谷家文書一』1993
- 文献14 大子町史編さん委員会「西国順礼道中記」『大子町文献』別冊9 1986 大子町
- 文献15 松戸市誌編さん委員会「一九九、文化九年 西國道中日記帳」『松戸市史』文献編(一) 1971 松戸市役所
- 文献16 田中智彦「七 街道 2) 人々の交流」『姫路市史』第七卷上 資料編 自然 1998 姫路市
- 文献17 湯津上村誌『湯津上村誌』1984
- 文献18 松本政信「文政三年 西國道中附」『西國道中記』1990
- 文献19 青柳周一「近世における若狭・熊川番所の通行について - 「西国順礼略打道中記」に見る -」
『地方史研究』316 第55巻第4号 2005 地方史研究協議会
- 文献20 青柳周一「江戸時代の越前・若狭を旅した人々」『福井県文書館研究紀要』12 2015 福井県文書館
- 文献21 杉江進・八杉淳「文献編 第四章 農村の変容 江戸時代中ごろの道中記に記された山中関」
『今津町誌』第4巻 資料編 今津町史編集委員会編 2003 今津町
- 文献22 小須戸古文書研究会『江戸時代越後納門之旅日記』1988
- 文献23 水海道市教育委員会『道中泊休覚之帳』1971
- 文献24 高郷村史編集委員会「伊勢参宮道中日記」『会津高郷村史』 1981 高郷村
- 文献25 松本秀信「第六章 江戸時代庶民の生活概観 十四、道中記」『石川町史』下巻 1968 石川町教育委員会
- 文献26 高郷村史編集委員会「伊勢参宮道中日記帳」『会津高郷村史』 1981 高郷村
- 文献27 松戸市誌編さん委員会「二〇一、天保十二年二月 西國道中日記帳」『松戸市史』文献編(一) 1971 松戸市役所
- 文献28 岩槻市役所「第十三章 家・旅行」『岩槻市史』近世文献編IV 地方文献(下) 1982
- 文献29 三田市『市史研究さんだ』第11号 2009
- 文献30 前沢町史編集委員会「第三章 民間信仰 一、伊勢参宮」『前沢町史』下巻(二) 1988 前沢町教育委員会
- 文献31 海上町史編集委員会『海上町史研究』第29号 1989
- 文献32 狭山古文書勉強会『狭山古文書叢書第八集 続伊勢西國道中記』1991
- 文献33 騎西町史編さん室「第七章 交通 第二節 旅」『騎西町史』近世資料編 1989 騎西町教育委員会
- 文献34 瀧口宜男「近世 13 陸上交通」『久御山町史 文献編』1992 久御山町
- 文献35 熊谷章一「六、道中手扣」『花巻市史』資料編一 1975 花巻市教育委員会
- 文献36 野田地方史懇話会『伊勢・西国巡礼旅日記 ～古文書から見えた野田船形村農民の江戸時代の旅』2011
- 文献37 播磨町野添土地区画整理事業完工誌編集委員会『御月見日記』 1984 播磨町野添土地区画整理組合
- 文献38 山口昭二「第三章 中・近世 第五節 人々のくらしと文化 2 信仰と社寺仏閣」『阿閑の里』1982
播磨町町史編纂委員会編 播磨町

資料「嶺南地方における道標一覧」

【凡例】

1. 表1は令和2年(2020)1月31日現在で所在等を把握した道標を一覧としてまとめたものである。道標の所在確認調査では金森浩美氏、谷川陽子氏、山口かおり氏の協力を得た。
2. かつては存在が知られたものの、現在、所在が不明な道標についても、一覧表に掲げた。
3. 盗難等の恐れもあることから、一覧表中の位置情報については市町名・地区名に留めた。
4. 一覧表中、法量の柱部長(高さ)については、角柱の場合、柱部と基部との境が見える場合は柱部長として実数字で示し、地中に埋もれている場合は括弧書き数字で示した。自然石については基部との境が不明瞭なため、いずれも括弧書き数字でその高さを示した。
5. 一覧表中、法量の基部長については、倒壊等している場合など全体の形状がうかがえる場合、その基部の長さを実数字で示し、基部の一部が露出している場合などは括弧書き数字でその長さを示した。
6. 一覧表中、道標の銘文が判読ができない場合、字数が明らかなものは□で表し、字数が明らかでないものは[]で表した。
7. 位置図中、黒丸は道標が所在する位置を、白抜きはかつて道標が所在した位置を示した。
8. 道標に関する出典文献は以下に掲げた。先行研究等で所在が知られている場合でも、今回所在確認調査を実施できなかった道標については、一覧表の備考欄に「未調査」と記した。

【出典文献】

1. 敦賀市立博物館『郷土の碑文展』1996
2. 敦賀市立博物館『続 郷土の碑文展』1997
3. 藤井譲治「海と湖をつなぐ山塊の道 敦賀から京へ」『日本の街道3 雪の国 北陸』1981 集英社
4. 柴田亮敏・田代章子他「第三章 道の現状 北陸道」『歴史の道調査報告書第2集 北陸道Ⅱ・丹後街道Ⅰ』2002 福井県教育委員会
5. 柴田亮敏・田代章子・大同芳男・中西昭二・森川治・山本和男・吉村哲雄・中塚正雄「第三章 道の現状 丹後街道Ⅰ(敦賀市域～上中町域)」『歴史の道調査報告書第2集 北陸道Ⅱ・丹後街道Ⅰ』2002 福井県教育委員会
6. 福井県教育委員会「沿線主要文化財一覧」『歴史の道調査報告書第2集 北陸道Ⅱ・丹後街道Ⅰ』2002
7. 小牧實繁・木村憲治「江若の國境栗柄峠」『地球』第二十六巻第三號 1936 京都帝国大学理学部地質学教室内地球學團
8. 『わかさ美浜町誌』第一巻 暮らす・生きる 2002 美浜町誌編纂委員会編 美浜町
9. 『わかさ美浜町誌』第二巻 祈る・祀る 2006 美浜町誌編纂委員会編 美浜町
10. 岡尾正雄・白石晴義・三谷銀治・西村心一・一瀬久男「第四章 道の現状 丹後街道(小浜市域～京都府との府県境まで)」『歴史の道調査報告書第集 丹後街道Ⅱ・周山街道』2003 福井県教育委員会
11. 藤本新一・田歌昇「第四章 道の現状 周山街道(小浜市域～名田庄村～京都府との府県境界)」『歴史の道調査報告書第3集 丹後街道Ⅱ・周山街道』2003 福井県教育委員会
12. 福井県教育委員会「沿線主要文化財一覧」『歴史の道調査報告書第3集 丹後街道Ⅱ・周山街道』2003 福井県教育委員会
13. 小浜市史編纂委員会「一 石造物 七 道標」『小浜市史』金石文編 1974 小浜市
14. 『小浜市口名田郷土誌』2002 小浜市口名田郷土誌編纂委員会編 小浜市口名田公民館
15. 多仁照廣「第三章 大飯地域石造遺物調査データ」『大島半島のニソの杜の習俗調査報告書 一資料編一』2018 おおい町教育委員会
16. 安田重晴『まいづる田辺道しるべ』1998 出版センターまひつる
17. 小室智子「安田重晴氏「近隣府県西国街道道しるべ」」『京都府立大学文化遺産叢書第14集 舞鶴・京丹後地域の文化遺産』2018 京都府立大学文学部歴史学科

表1 嶺南地方の道標一覧

No.	市町名	地区	位置	街道名	種別	形状	法量(cm)			碑文	石種	設置年		出典文献	備考
							柱部長(高さ)	基部長	幅			元号	西暦		
1	敦賀市	拳野	杉津からの峠道	北陸道	交通路標	角柱	42.0	35.0	28.5	16.0	奥行		2, 4	位置情報は坂東佳子氏ご教示現在、敦賀市立博物館保管	
2	敦賀市	栗原	集落内の旧道分岐点	北陸道	交通路標	自然石	(49.0)		30.0	30.0		寛政3年	1791	2, 4	下部が埋没「右えちぜん、ふくい道、左山」
3	敦賀市	井川	市道沿い	七里半	交通路標	自然石	(71.0)		30.0	33.0				4, 6	
4	敦賀市	中	栗道津内藤林線沿い		不明	不明	約60		不明	不明			4	元の所在地、現在の所在ともに不明(位置情報は文献4を参考にした)	
5	敦賀市	疋田	市道沿い	七里半	交通路標	角柱	-	-	-	-		文政8年	1825	3	現在の所在は不明
6	敦賀市	疋田	市道沿い	七里半	交通路標	自然石	(157.0)		80.0	45.0		明治6年	1873	1, 3, 6	
7	敦賀市	山泉	旧栗道の脇道沿い	七里半	交通路標	角柱	76.0	(9.0)	15.5	15.5		大正10年	1921	2, 4	
8	敦賀市	松島町	気比松原の南東隅		社務導標	角柱	150.0		23.0	20.5		大正5年	1916	2	
9	美浜町	竹波			交通路標	自然石								10	昭和42年(1967)までは実在 銘文は写真から判読 現在の所在は不明(位置情報は文献10を参考にした)
10	美浜町	佐柿	旧医王寺跡付近か	丹後	交通路標	角柱								9	現在の所在は不明(位置情報は文献9を参考にした)
11	美浜町	麻生	集落への道沿い		不明	角柱	50.0	(24.0)	12.0	12.0				-	
12	美浜町	新庄	集落入口の県道沿い	栗柄越	供養塔・交通路標	自然石	93.0		55.0	33.0		安政6年	1868	-	付近から移設 元々は山の斜面に立て掛けようにあったらしい
13	美浜町	新庄	松島集落内	栗柄	交通路標	自然石	(48.0)		23.0	26.0				10	
14	美浜町	新庄		栗柄	交通路標									7	元の所在地、現在の所在ともに不明
15	美浜町	河原市	街道沿い	丹後	境界標	角柱	(63.0)		13.0	13.0				-	

No.	市町名	地区	位置	街道名	種別	形状	法量(cm)			碑文	石種	設置年		出典文献	備考
							柱部長(高さ)	基部長	幅			元号	西暦		
16	若狭町 (旧三方町)	藤井	向陽寺参道入口 (街道との交差点)	丹後	社 誘導標	角柱	(141.0)	24.5	24.5	24.5	1867	5	横に向陽寺の碑		
17	若狭町 (旧三方町)	藤井	向陽寺参道 (お室の前)		社 誘導標	角柱	70.0	(6.5)	14.0			-			
18	若狭町 (旧三方町)	藤井	集落内の街道沿い	丹後	社 誘導標	角柱	(184.0)	27.5	27.5		1905	-			
19	若狭町 (旧三方町)	横渡	集落内の街道沿い	丹後	社 誘導標	角柱	(154.0)	24.5	23.0		1913	5	付近から移設か 19の道標と隣接して所在		
20	若狭町 (旧三方町)	横渡	集落内の街道沿い	丹後	社 誘導標	角柱	(116.5)	22.0	22.0		1899	5	付近から移設か 18の道標と隣接して所在		
21	若狭町 (旧上中町)	未野	東比寿神社(須部神社) 右標柱脇	丹後	社 誘導標	自然石	(61.0)	31.0	26.0			5			
22	若狭町 (旧上中町)	未野	東比寿神社(須部神社) 馬居前	丹後	社 誘導標	自然石	(66.0)	44.0	28.0			5			
23	若狭町 (旧三方町)	田上	集落入口	交通 道標	自然石	自然石	(59.0)	53.0	32.0			-	若狭町在住の方から所在のご教示		
24	若狭町 (旧三方町)	無惑	集落入口	交通 道標	角柱	角柱	56.5	17.0	16.5		1902	-	若狭町在住の方から所在のご教示		
25	若狭町 (旧上中町)	安賀里	日枝神社(山王宮)	境界標	角柱	角柱	63.0	(32.0)	13.0			5	神社境内に移設か		
26	若狭町 (旧上中町)	熊川	街道沿い	境界標	角柱	角柱	(56.0)	13.0	13.0			-	水路の脇に移設か		
27	若狭町 (旧上中町)	三宅	信主神社馬居前 街道沿い	巡礼 路標	自然石	自然石	(98.0)	55.0	28.0		1862	5	文献17、安田重晴氏調査「福井県31」道標		
28	若狭町 (旧上中町)	三宅	若狭街道沿い	境界標	角柱	角柱	(58.0)	13.0	13.0			-			
29	若狭町 (旧上中町)	市場	街道沿い	境界標	角柱	角柱	(53.0)	13.0	13.0			-	左面は埋もれているが、「井ノ口」か 左右、逆に移設されている		

No.	市町名	地区	位置	街道名	種別	形状	法量 (cm)			碑文	石種	設置年		出典文献	備考
							柱部長 (高さ)	基部長	幅			元号	西暦		
30	若狭町 (旧上中町)	天徳寺	三宅小学校前 街道沿い	若狭	境界標	角柱	(55.0)	13.0	13.0	奥行			5		
31	若狭町 (旧上中町)	日笠	旧小浜線 第1日笠路切横	丹後	巡礼 路標	角柱	160.0	29.0	30.0			文化13年	5, 17	文献17、安田重晴氏調査「福井県30」道標	
32	小浜市	明通寺	明通寺参道	社 誘導標	寺	角柱	59.0	18.0	15.0			明治42年	17	文献17、安田重晴氏調査「福井県27」道標	
33	小浜市		明通寺入口三叉路	社 誘導標	寺	角柱					不明		17	文献17、安田重晴氏調査「福井県28」道標 所在を確認できず	
34	小浜市	多田	国道27号沿い	丹後	社 誘導標	角柱	(115.0)	20.5	19.0		花崗岩	大正7年	10		
35	小浜市	湯岡	若狭歴史博物館 (元は湯岡出口)	社 誘導標	寺	角柱	(179.0)	28.0	24.5		花崗岩		10	背面未調整 文献17、安田重晴氏調査「福井県24」道標	
36	小浜市		旧小浜市図書館	社 誘導標	寺	自然石					不明		17	文献17、安田重晴氏調査「福井県26」道標 所在を確認できず	
37	小浜市	青井	旧小浜市図書館 (元は青井)	丹後	交通路 標	角柱	118.0	24.0	27.0		凝灰岩	文久元年	13	小浜市青井のわかれ道にあったものを昭和44年5月8日 に小浜市立図書館敷地内(現在の働く婦人の家付近) に移設 現在は旧阿納尻小学校に保管 文献17、安田重晴氏調査「福井県21」道標	
38	小浜市	大宮・ 和田	旧小浜市図書館 (元は大宮と和田の 三叉路)	丹後	巡礼 路標	角柱	158.0	50.0	30.0		凝灰岩	嘉永4年	13	小浜市大宮と神田の三叉路にあったものを昭和44年5 月8日に小浜市立図書館敷地内(現在の働く婦人の家付 近)に移設 現在は旧阿納尻小学校に保管 文献17、安田重晴氏調査「福井県22」道標	
39	小浜市		旧小浜市図書館		巡礼 路標	角柱					不明		17	文献17、安田重晴氏調査「福井県25」道標 所在を確認できず	
40	小浜市	大宮・ 神田	旧小浜市図書館 (元は大宮と神田の間)		境界標	角柱					不明		17	文献17、安田重晴氏調査「福井県23」道標 所在を確認できず	
41	小浜市	不明			社 誘導標	角柱	(95.0)	25.0	23.0		花崗岩		-	旧阿納尻小学校で保管 元の所在地は不明	

No.	市町名	地区	位置	街道名	種別	形状	法量(cm)				碑文	石種	設置年		出典文献	備考
							柱部長 (高さ)	基部長	幅	奥行			元号	西暦		
53	おおい町 (旧大飯町)	本郷	街道沿い	丹後	巡礼 路標	自然石					左順礼ミチ	不明		10		かつて船岡吉田橋付近にあり 現在の所在は不明
54	おおい町 (旧大飯町)	野尻	六社神社		交通 路標	角柱	(111.0)	16.5	16.5		[正面]愛宕山道 [左面]従長二百六十メートル [右面]大正十四年六月建立	花崗岩	大正14年	1925		
55	おおい町 (旧大飯町)	佐分利	県道1号沿い (バス停の近く)		里程標	角柱	92.5	25.0	25.0		[正面]佐分利道路元標 [背面]大正十三年四月建立	花崗岩	大正13年	1924	-	県道拡幅により撤去、おおい町郷土史料館で保管 川島清人氏ご教示
56	おおい町 (旧大飯町)	石山	熊野神社		交通 路標	自然石	(42.0)	25.0	8.0		[正面]右山道 [左面]京	砂岩か		15		
57	おおい町 (旧大飯町)	神崎	粟師堂		社 寺 路標	自然石	(46.0)	22.0	14.0		[正面]やくし道	凝灰岩		15		自然石の一部を加工
58	高浜町	和田	若狭高浜観光協会付近		境界標	角柱	(57.0)	13.0	13.0		[正面]丹後道 [左面]和田村下車口 [右面]和田村馬居寺	花崗岩		-		
59	高浜町	和田 三区	街道沿いの交差点	丹後	巡礼 路標	角柱	(65.0)	20.0	19.0		[正面]右志ゆん礼道	凝灰岩		12		文献17、安田重晴氏調査の「福井県10」道標
60	高浜町	岩神	街道沿い 岩神の横	丹後	交通 路標	角柱	(33.0)	(17.0)	13.0		[正面][]道 [左面][]神	花崗岩		17		道路脇に横たわる
61	高浜町	藪部	南部正善寺内の 山門横	丹後	巡礼 路標	自然石	(115.0)	90.0	18.0		[正面]左順礼ミチ	花崗岩		17		文献17、安田重晴氏調査の「福井県9」道標
62	高浜町	藪部	集落内の街道沿い	丹後	境界標	角柱	(63.0)	13.0	13.0		[正面]丹後道 [左面]高濱町宮崎 [右面]高濱町園部	花崗岩		10,12, 17		文献17、安田重晴氏調査の「福井県7」道標
63	高浜町	藪部	不明	丹後	巡礼 路標	自然石	(55.0)	(22.0)	(30.0)		[正面]右ちくぶ志ま道	不明		17		文献17、安田重晴氏調査の「福井県8」道標 高浜町郷土資料館保管
64	高浜町	立石	出口コンクリート工業 前から高浜町郷土資料 館に移設	丹後	巡礼 路標	角柱	(106.0)	22.0	21.5		[正面]右志ゆん禮道 [左面]文政六癸未九月一〇 [右面]小濱江五里 竹生島紀口迄十四里半 [背後]願主 右橋氏	凝灰岩	文政6年	1823	10,12, 17	伝・畑川河口から引き揚げ(安倍義治氏ご教示) 文献17、安田重晴氏調査「福井県5」道標
65	高浜町	立石	出口コンクリート工業 前から高浜町郷土資料 館に移設	丹後	交通 路標	角柱	(72.0)	25.0	25.0		[正面]みつ瀧つ みつ瀧つばし力	花崗岩		10,12		伝・畑川河口から引き揚げ(安倍義治氏ご教示)
66	高浜町	立石	出口コンクリート工業 前にあり	丹後	境界標	角柱	不明	不明	不明		[正面]丹後道 [側面]高濱町御 [側面]高濱町鎌倉	花崗岩 か		10,12, 17		現在の所在は不明 文献17、安田重晴氏調査の「福井県6」道標
67	高浜町	中帯 (中津海)	集落内の分岐道	丹後	交通 路標	自然石	(44.0)	30.0	30.0		[正面]右たなべ道 [左面]左せきや道	砂岩 か		12,17		花壇の一部になっている(付近から移設か) 文献17、安田重晴氏調査の「福井県4」道標
68	高浜町	小和田	街道沿い	丹後	境界標	角柱	65.0	13.0	13.0		[正面]丹後道 [左面]青郷村小和田 [右面]青郷村西三松	花崗岩		10,12		付近の住宅のブロック壁に固定されている かつては付近に斜めに立っていた
69	高浜町	高野		丹後	巡礼 路標	角柱	(110.0)	33.0	33.0		[正面]右ちくぶ志ま道 [左面]左中山道 [右面]天保六年四月 [背面]世話人 高野邑南部新右エ門	凝灰岩	天保6年	1835	12,16, 17	文献17、安田重晴氏調査の「福井県2」道標
70	高浜町	今寺	街道沿い		巡礼 路標	角柱	97.0	23.0	18.0		[正面]まつのお 道 ちくぶ志ま 道 [左面]口口口代口口堤 [右面]大正六年十月 [背面]施主 当区稲生女右平エ門	凝灰岩	大正6年	1917	12,17	倒れているため、右面と背面は埋もれている 文献17、安田重晴氏調査の「福井県1」道標
71	高浜町	山中	内浦青海線										元治4年	1864	10,12	未調査

No.	市町名	地区	位置	街道名	種別	形状	法量(cm)			碑文	石種	設置年		出典文献	備考
							柱部長 (高さ)	基部長	幅			元号	西暦		
72	高浜町	下	下産靈神社境内		交通 路標	角柱	57.0	29.0	21.0	18.0		明治16年	1883	10, 12, 17	文献17、安田重晴氏調査「福井県15」道標 背面に「明治十六年五月 仲西氏」縦か かっつは旧道内海線にあったものか 本殿横に立て掛けてある
73	高浜町	鎌倉	県道21号沿い		交通 路標	石仏 台座	(19.0)		33.0	30.0		慶応4年	1868	12, 16, 17	
74	高浜町	鎌倉	主要道路 舞鶴野原高浜線		交通 路標	自然石						慶応4年	1868	10, 12, 16, 17	文献17、安田重晴氏調査「福井県16」道標 未調査
75	高浜町	宮尾	旧道宮尾～中山路		交通 路標	角柱	45.0	(5.0)	19.0	17.0		明治4年	1871	17	文献17、安田重晴氏調査「福井県14」道標
76	高浜町	日引	正齋寺下の墓地付近		交通 路標	石仏	46.0		22.0	13.0		文化8年	1811	17	墓地の付近に石仏群が集積 文献17、安田重晴氏調査「福井県12」道標
77	高浜町	日引			交通 路標	自然石 か	(42.0)		19.5	10.0			17	17	文献17、安田重晴氏調査「福井県13」道標

・これ以外に、敦賀市内に「右面 左ハゑちぎんみち」の銘をもつ高さ約69cmの自然石の道標1基を確認(年代等は不明)。

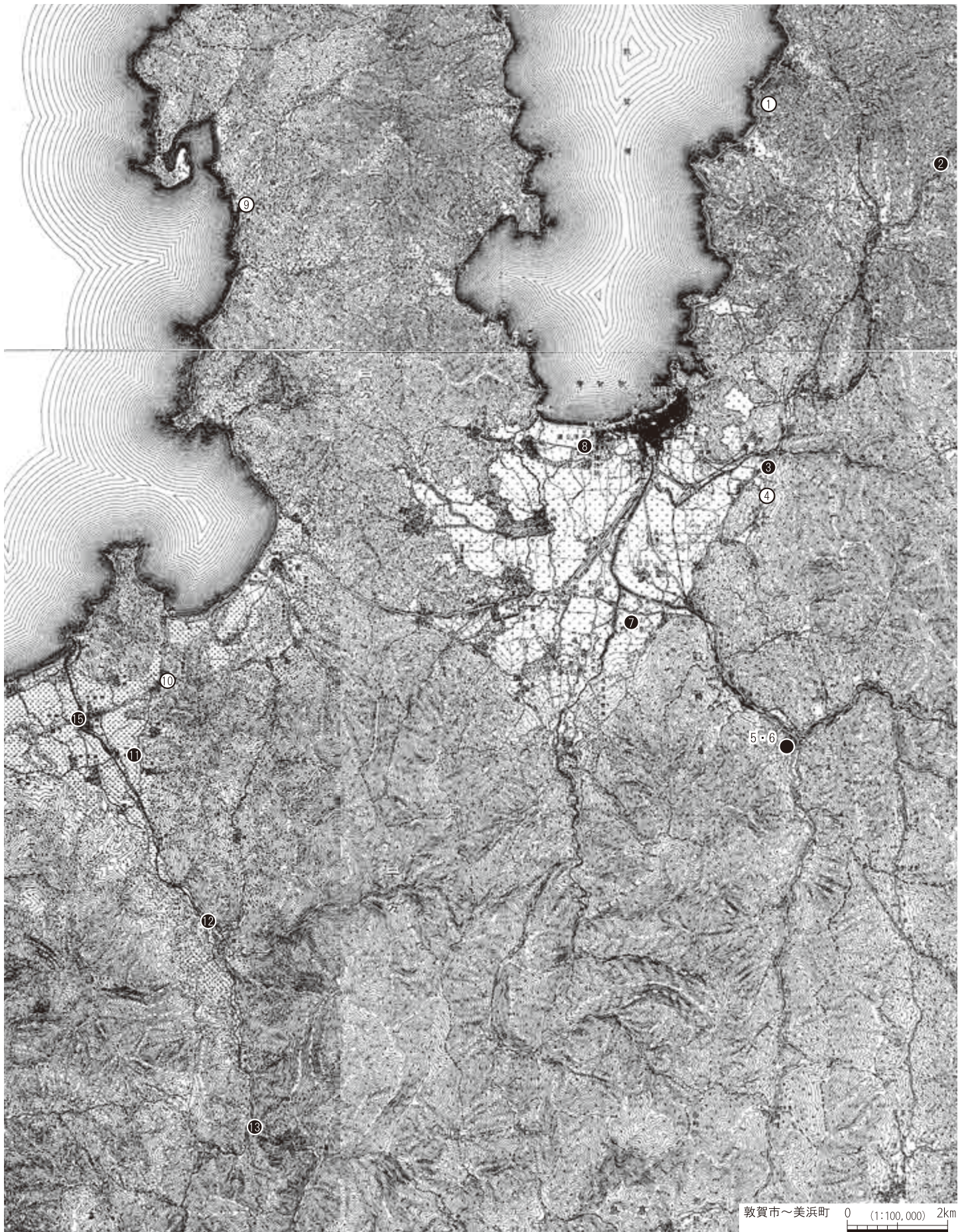


図1 嶺南地方の道標位置図(1)(縮尺 1/100,000)

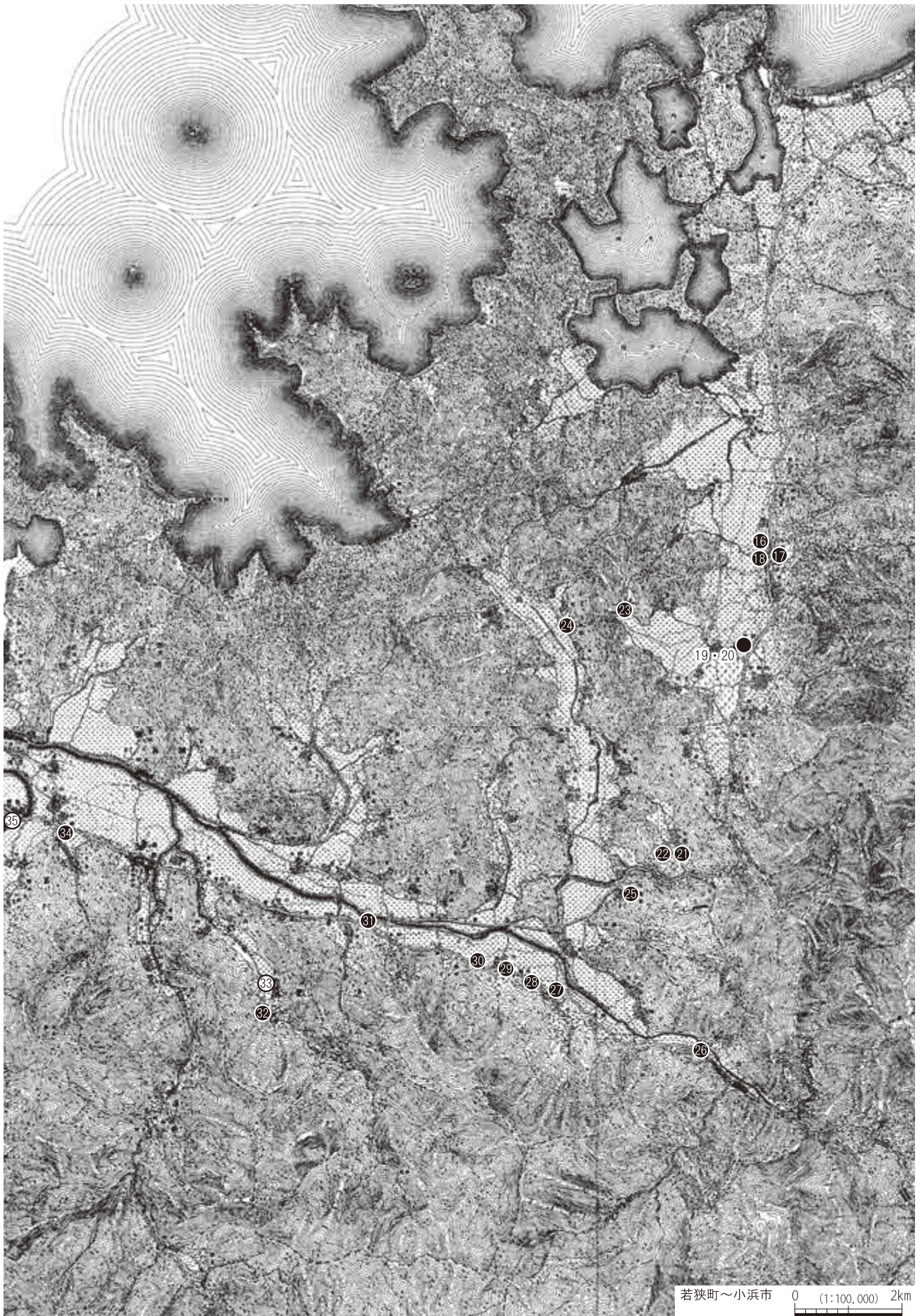


図2 嶺南地方の道標位置図(2) (縮尺 1/100,000)

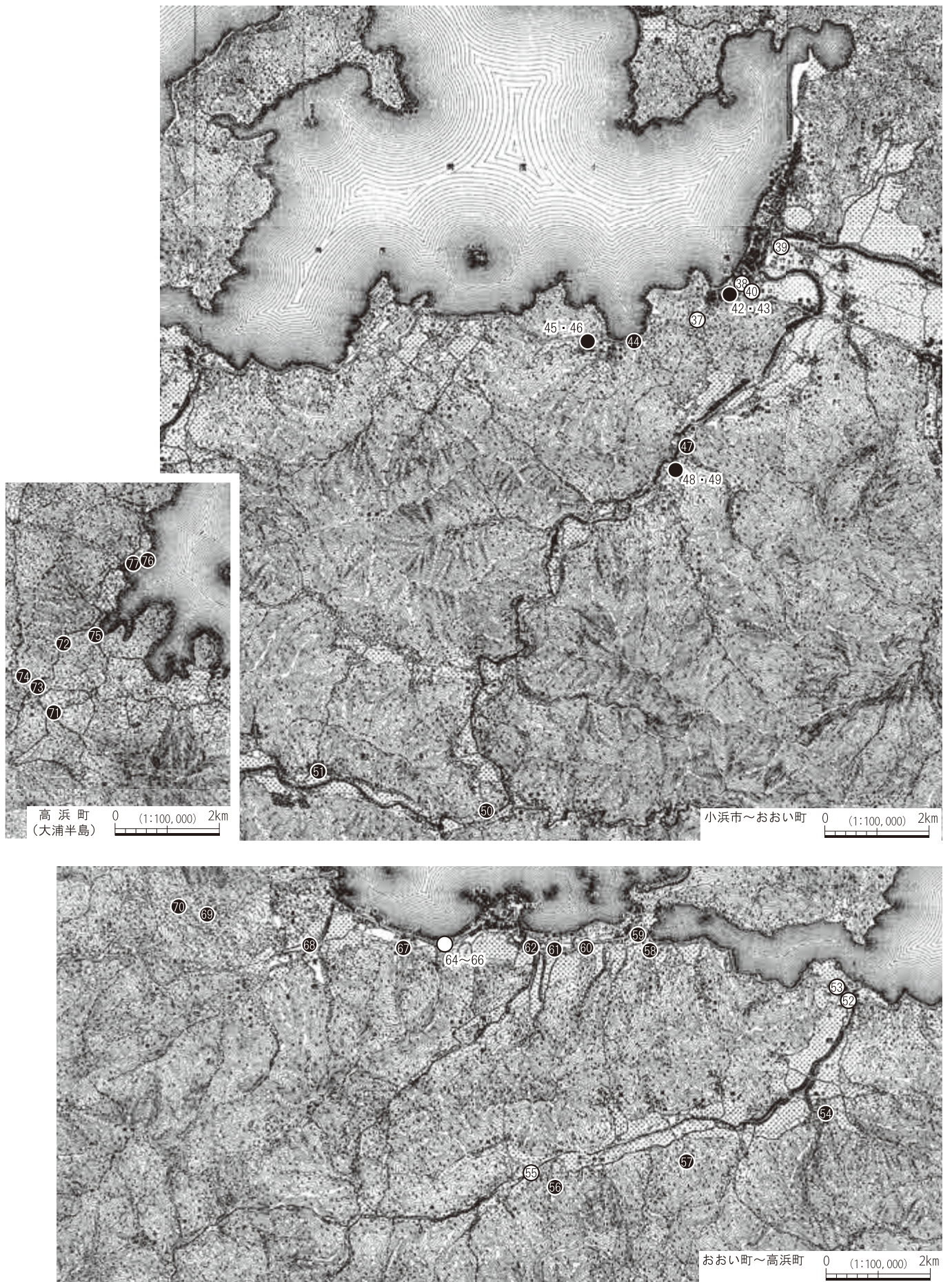


図3 嶺南地方の道標位置図(3) (縮尺 1/100,000)

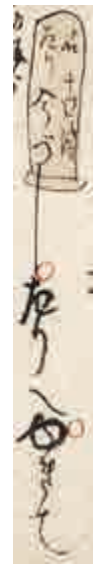
図四 『西国順礼略打道中記』の挿図(四)



(二三一右)



(二三一左)



(二三一右)

図三 『西国順礼略打道中記』の挿図(三)



(二二五―右)



(二二五―左)



(二二六―右)



(二二六―左)



(二二七―左)

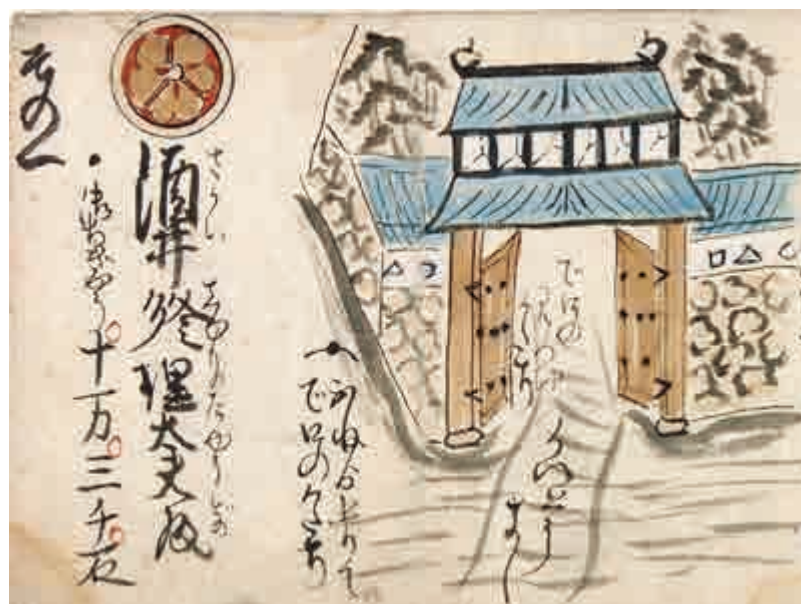
図一 『西国順礼略打道中記』の挿図(二)



(二二二右)



(二二三左)



(二二四左)

図一 『西国順礼略打道中記』の挿図(一)



(二一八)右



(二二〇)右



(二二一)左

史料五『西国順礼道中記』弘化五年（一八四八）

松乃寺（松尾寺）方高濱へ弐里

高濱（小浜）方小橋濱御城下 若狭守十二万石コレ

へ五里 小橋濱方熊川へ四里半

熊川方今津へ五里 其間二御番所二ツあり

今津方竹生嶋へ三里

扱此道山坡ありていし高でなん所なり

●此所方ちくぶしまへ五り半ある

此うミ村でとまるか又方坂でとまるかいた

して

あさよあけ方出立ツをいたして 夫方二三

りもゆくト あさの四ツじぶんは今つへ

ゆく

夫方ちくぶしまへふねにのる 尚又ひる方

のちハふねがでず その心ではやくゆくべ

し

二り半

●今津

▲やどやふなやど ミのや久兵衛

きれいな

(二二三一左)

●扱此ミのや久兵衛所ハ此町でふなやどの

といやで 彦根のやく人なり 此ミのや久

兵衛の所ハいつでもでふねの一ばん所なり

此所方ちくぶしまへ一ばんふねをたさぬト

此町の外のふなやど方たす事ハならぬ 此

町にあまたふなやともあれど此久兵衛が所

ハきれいで内がミなミなていねいなり申

又さいこくをいたしたら此所へゆくべし

ふなば方ゆく間ニ右かわの中ほとなり ミ

のやトしるしがやねにある

▲扱ちくぶしまへ三りの間ゆきて 夫方

山からすぐに下向するト そのふねハ東南

むきニゆきて 又二りも東のごうしうの

長はまト申所へつけるなり

(二二三一右)

これもかぜがわるいトあとへもどるか 又

二り北東の方ニやきはまト申て長はま方ハ

二り北の八木はまへつけるなり 当卯三月

廿七日ニちくぶしまへ参りまして 夫方す

ぐに長はまへふねがつかず かぜがあしく

てふねハ二り北の八木のはまへつきました

これハかぜのまんにて すぐに長はまへゆ

くもあり 尚又くわしく道すじ方あれども

次へしるす まづハ今津方ちくぶしまへ

ふなちん一人まへに長はまづきにして七拾

文づつ 人ハ六七十人のせるなり 大き

なふねなり まづ今津方海上三り 辰巳ニ

あたりて 水うミ中ニ山一ツ

まつ尾方ハ十九り半

(二二三一左)

・此所(辭儀)ハしきしてゆくばかり

・さむらいが二り人いる かたち

・ちくぶ(竹生島)しまへゆく

(二三一―右)

此所ハおじぎをしてついとゆけば大事なし

その心でゆくゆくべし

▲此所(城)にいわくあり 此所で女をあらためるはづじや

●二百年(昔)むかしの事なるが 大坂(城)のしろが

らくじ(落城)やうしたるときに 此若さの

とのさま(殿様)の娘がひでよし(秀吉)へてかけにゆきて

よど(淀君)ぎミト申す

是ゆへに大坂のしろがらくじやうしたトあ

る 夫で此若さの女(他国)ごハたこくへださぬト

申しますト

是を二りむかうの方坂(ほう)ト申所(亭主)でとまりし所

に やど(亭主)やのていしゆがはなしました 夫

で此所でわかさの国の女(啓め)ごじやないかトぞ

んじて 夫でとがめ(啓め)ますト申候

扱此間の道(啓め)ハいしだかでじくじくして甚な

ん所なり

(二三一―左)

くま川方二り

●方坂(保坂)

▲ちうじき やどや 小休所 多し

きれいな

此出口(湖)に立ていしあり 此所方ミづうミの

はたへゆくト 古づト申す所へゆく 此所

方ちくぶしまへ三りあり 又今づト申す所

あり 此所方もちくぶしまへ三りのうミな

り 是ハどちらなりともゆくべし まづ立

いしを左りへ

(道しるべ) 右古津 左今づ 左りへ

ゆきて

方坂方半ミち

●おいわけ(道分)

▲やどや 小休所 多し きれいな

●此間の道(生見)ハいし高でなん所なり

次二半ミち

●うミ村 同あり きれいな

此出口(生見)に立ていしあり

(二三一―右)

(道しるべ) 右古津 左今津

京道是方十六り 此所方京へ十六りあり

是をくつき(朽木)こへトいふ(感え)

▲ハイ 同国でござりますト申

▲手がたハもつておるかト申
(手形) (持つて)

▲ハイ 手がたハ持参いたしておりますト申ト

▲是へだせト申

▲ハイト申てくわい中^(懐中)方だすト

●すだれの内から^(手を)ておだしてとるト

▲あらためているト見へる しばらく^(隙)ひまがいらて

夫方すだれの内方そとへだして

(二二九―左)

▲これに^(相違)そうイハあるまい とふれといわ

ずに

▲とうるであろうト申なり

▲ハア ト申て夫方同行みなみな出立いた

すなり

●扱かくのごとくにあらためているうちに

おとこばかりハかぶり^(被り物)ものをぬい^(脱いで)でおちぎ

をしてついとゆく

●女トおとこづれあれば かくのごとくに

あらためる その心でゆくべし 尚又是を

しまいて 又此ゆくさきにも

(二三〇―右)

又山中の御ばん所ト申である これハ

とがめ^(咎めず)ず いづれもかぶりものをぬいでお

ちぎをしてついとゆくなり その心でゆく

べし 尚又此所ハきびしくいたして

てつ^(鉄砲)ぼう 外ニ小どうぐかざりてきびしく

いたしてあるなり

▲此ごばんせう方次の山中ト申ごばんせう

までゆく間が中わるい道でなん所なり

次ニ

●大杉村

○ちうじき 小休所 やどや 此所ハ

ちう^(中)

此道わるし

次ニ

●山中村 ○同あり 中

此出口に又御ばんあり そのかたち

(二三〇―左)

・山中の御ばん所 かたち

此所ハとがめず きびしくしてある

・両 木戸口あり

・此まへハいしの^(堤)てい

・此うしろハ山なり

此所ハ木戸口が一ツある

・此内方こりやこりやト申ととめるト

・ハイト申

・下にイヨト申

・ハイト下にいる

・是を見れば 木戸口一ツあり 外

なし

・是道わかさ

・此所ハ国ざかい

(二二七―左)

此内方(侍)さむらいか又ハ丁人(町)か百姓か と

んととんとすだれがかけて 内方(裏、暗)まつくら

がりて わかり不申候 是をバしらずにゆ

くと

▲此のすだれの内らハ こりやこりやとよ

びとめるト 下にいよト申

▲女おとこつれが 夫方下ニいるト

ばん所のすだれ(越)ごしに

▲そのほうハどれへとふる(通) 此所ハ御ばん

所じやが、いづれへとふるトたずぬる

▲ハイ わたくしどもハ西国でござります

ト申

(二二八―右)

▲国ハどこじやト申

▲ハイ 国は津(根津)の国でござりますト申

▲どなたの御下じやト申て なハなんと申

といふ

▲ハイ 大坂でござりますト申て 御奉行

の名を申なり

▲国ハイつう立たト申

▲ハイ 国ハ何月何日ニ立ちましたといふ

(二二八―左)

▲どれから札ハ(打ち)ううち(●なまりて)はじ

めたといふ

▲ハイ 札ハどれからうちはじめましたト

いふ

▲なんう人(にん)のつれじやといふ

▲ハイ なん人のつれでござりますといふ

▲その女ハといふ

女づれと同行なれば同行何人 又女房な

れバ女房ト申なり

▲ハイ これハ同行でござります

(二二九―右)

▲みな同国(どうこく)かト申

●おにう(連敷)

▲ちうじき 小休やどや多し きれいな

此間道ハ平ちでよし

次

●小川あり ・板ばし (徒歩渡り) ちちわたり

(銭) いらす

同 道ハ平ちでよし

一り

●ひかさ(日笠) ▲同きれいな

●此出口に右ト左トの大きな立いしあり

(二二六―右)

(道しるべ) 右しゆんれい 京ちくふしま

左り北国ちせんつるか

右へゆくべし 此道平ちですなミちで甚よ

し

次道よし

●天徳寺村

▲ちうじき 小休所 やどや見れハ

三けんあれどもきたない

次二道よし

●かりや村(飯屋) ▲同きたない

次二道よし

●いの口村(井口) ▲同きたない

ひかさ方一り半

▲くま川(熊川)

○ちうじき やどや 小休 見れバ此所

ハ中

此出口が女あらための御ばん所(改め)あり(御番所)

(二二六―左)

此町の中ほどに右てニある

○甲賀三良(三郎) つかあり(塚)

是を見れハなんでもないものじや(見れば)

●扱次ニ出口が御ばんせうなり(御番所) そのかた

ちをしるす(記す)

尚又此御ばん所ハきびしくいたしてハなく(厳しく)

つねのばんどころを見るごとくで まへに(常)

すだれがかけてありて 内らに人がいるか(簾)

いんやらとんと内らハくらがりて見わけ(暗がり)

がたし 夫ゆへおとこ女づれがしらすに此(離し)

所をゆくト ばん所から すだれの内方(心得)

やかましく申らゆへ 心へのためくわしく(唯しく)

しるす その心でおとこ女づれがあれバゆ

くがよし そのばんせうのかたちをしるす

(二二七―右)

●まづで口の女あらためのかたち

尚又ふねがつくと すぐに一すじニ東むい
て三丁ばかりもゆく

(一二四―右)


で口の見つけ

かたち

かいとうすく

・ふね方上りて

で口のかたち

酒井修理太夫殿
さかいしゆりのたゆうどの

・御ちぎやう十万三千石

その一

(一二四―左)

・此所を見ればかくのごとし

・小はまの八まんぐう大社なり
(八幡宮 大社)

かたち

ふね方上りて

此まへを左りへゆく

(道しるべ) 左しゆんれい

左りへしゆんれい道
(順礼)

町長し

御城下

その二

(一二五―右)

●扱ふねがつくと そのほま方ま一もんじ
(真一文字)

に東むいて三丁ばかりゆくト むかうに大

きなミヤがある 是を見れば小濱の氏神八
(宮)

まんぐうの大社なり

此所を左りへ二・三丁もゆくト すぐハ北

国かがゑちぜん道 此所を右へゆくべし
(加賀) (越前)

(道しるべ) 右ちくふしま

左かかゑちせん道

右へゆくト

見つけ御もんなり
(見附) (御門)

道ハ平ちですなミちでよし
(砂道)

次ニ

●ゆのおか
(湯間)

●ちうじき 小休あり やとハなし

此出口に小さいつばしあり 是をわたりて
(土橋カ) (渡りて)

左りへゆくべし

右ハ水トなり
(水戸)

(一二五―左)

是をわたりて左りへゆくべし

(道しるべ) 左しゆんれい

一り

候 わたくしハ此所のふねのやくをつとめ(役)(務め)

申ますものでござります

明あさ(朝)の五ツまでふねがですト四ツ半ま

ではゆきますト申候 尚又一り半ゆきま

すト青(あを)しま(島)の弁天様へつれましてさんじ(参じ)

て その山の下をふねでゆきぬけますト申

候

夫方又ゆくたくさん(見物)にあらめをふねで

とりているをけんふついたすト申候

(二二二―左)

そのかたち ▲青嶋弁才天(あをしまべんさいてん)

・なミ木(並木)もなんにもない

あを山なり

見れば

・弁天社トとり(鳥居)いとある

外ハなし

・本ごう方一り半ゆくト

此間三丁ばかりあり

・此下をふねでゆきぬけにいたす

・ふねハ

・入りうみで

・なるし

・その一

(二二三―右)

・弁才天方半ミちゆくト嶋

・ふねで

あらめをとるかたち

・本ごう方ふねで小はまゆくト見る

・又りくでゆくトけんぶつハせず

その二

(二二三―左)

扱また本ごう方すぐにくくと 小はま迄三

り間に

□ 八百比丘尼宮あり(やおびくのみや)

是ハりくでゆくトけんふつをする 又ふね

でハけんふつせず

此間に山が二ツトとうけが二ツあり 是ハ(峠)

道づれの人がりくでゆきました 夫で此所(連れ)

がしれました かきしるし候(知れ)(書き記し)

・時にふねがつくと

ほんごう方三り

●わかさ小濱(おはさま)

▲ちうじき やどや 小休所多し

きれいな

○御城下町きれいな

(二二二―右)

(泊り船)
とまりふね

(二二二―左)

(砂道)
此道すぐハ平ちですな道でよし

うミを左りにながめてゆくト そのふうけ

いハ 甚よし

たかはま方二りはん

●本ごう

▲やどや 本ごうノ藤兵衛

内がていねいな

(二二二―右)

●和田ので口方そのかたちをしるす

・内またにて左りへゆく

・本ミち

・かわ(川)の方へハ

・で口方

・本ミち

入りうみ方ながれの

・小川

・わだのじやづか

せんだの内一けんあり

・右てハ山なり

・ちか道(近道)

・うミはたを左りにしてゆく

・入りうミ

(泊り船)
とまりふね

(二二二―左)

(砂道)
此道すぐハ平ちですな道でよし

うミを左りにながめてゆくト そのふうけ

いハ 甚よし

たかはま方二りはん

●本ごう

▲やどや 本ごうノ藤兵衛

内がていねいな

(二二二―右)

●和田ので口方そのかたちをしるす

・内またにて左りへゆく

・本ミち

・かわ(川)の方へハ

・で口方

・本ミち

入りうみ方ながれの

・小川

・わだのじやづか

せんだの内一けんあり

・右てハ山なり

・ちか道(近道)

・うミはたを左りにしてゆく

・入りうミ

(泊り船)
とまりふね

(二二二―左)

(砂道)
此道すぐハ平ちですな道でよし

うミを左りにながめてゆくト そのふうけ

いハ 甚よし

たかはま方二りはん

●本ごう

▲やどや 本ごうノ藤兵衛

内がていねいな

(二二二―右)

く

次ニ

▲高もり

▲小休 斗(はかり)て やどやなし

一けんあり きたない

此所に

□ 高もり大明神 大社あり

次ニ二十五丁ゆくト ほん(本郷)ごト申

(泊り船)
とまりふね

(二二二―左)

(砂道)
此道すぐハ平ちですな道でよし

うミを左りにながめてゆくト そのふうけ

いハ 甚よし

たかはま方二りはん

●本ごう

▲やどや 本ごうノ藤兵衛

内がていねいな

(二二二―右)

く

次ニ

▲高もり

▲小休 斗(はかり)て やどやなし

一けんあり きたない

此所に

□ 高もり大明神 大社あり

次ニ二十五丁ゆくト ほん(本郷)ごト申

(泊り船)
とまりふね

(二二二―左)

(砂道)
此道すぐハ平ちですな道でよし

うミを左りにながめてゆくト そのふうけ

いハ 甚よし

たかはま方二りはん

●本ごう

▲やどや 本ごうノ藤兵衛

内がていねいな

(二二二―右)

く

次ニ

▲高もり

▲小休 斗(はかり)て やどやなし

一けんあり きたない

此所に

□ 高もり大明神 大社あり

次ニ二十五丁ゆくト ほん(本郷)ごト申

・いわがミこくぞぼさつの

・おんじやくのかたち

・かいどう(街道)の右てにあり

・左りてかうミはたなり

・うしろ(後ろ)ハかくのこ(こと)とくにほりてある

此所方子供がではいりする

(二二〇―右)

右へ二丁ばかりゆくト (向こう)むかうハ山にゆき

あたる

夫を左りへまがりて (曲り)うミを左りニなが

めてゆくト本道なり

扱又此わだので口方むかうの山迄のまん中 (出口)

ほどに

入りうミ方ながれの小川あり 此所ニ

板(板橋)ばしあり

板(板橋)ばしのつめ方小川について 川を右にな

がめて 水上へゆくト その中ほどの左り

てに (細)はたけの中(五輪)に五りんがある 是をバ

たづぬる(尋ねる)に和田(蛇塚)のじやづかト申なり

是を左りニながめて水上へゆくト むかう

ハ入りうミなり

(二二〇―左)

此所(高屋)にくずやが一けんある 是を見れば

せんどう(船頭)の内(家)なり 此所方御城下へでふ

ねがある 此所方ふねにのる人もあり 又

りくでゆく人もある (陸)

是ハ参る人の心しまかせにいたすべし (仕任せ)

かし人の五人や十人でハふねがはず 三十

人ばかりも人がなければださぬ その待て

いるあいだが一時や二時ハまつなり (待)

此所方小ばまへ五りあり 人をあまりまつ

ているトたいくつして すぐ様此くずや方

此まへのいたばしをこへて (懸えて)夫方うミはた

を左りにしてゆくト むかうでハ本ミちト

一ツになるト

夫方又うミを左りニしてゆくなり 此道

すじ (筋)

甚 (はなはだ)平(平地)ちでけいハよし

次ニうミばたを左りニ左りニゆくト

●和田 (わだ)

▲ちうじき 小休所 やどやあり

きれいな

此わだの中(和世)ほど方右へ本道なり すぐハ外

道なり

右へゆくべし

まつのをち七十五丁(松尾)

●ミつけ町(三松力)

▲ちうじき(中食) やどや(宿屋) 小休 此所ハ中

此間の道ハよし 左りてに大海を(手)

ながめてゆく(眺めて) 此ふうけいよし(風景)

此道すぐハたかはまト申所まで半ミちばか(高浜)
(道)

りありて 左りてがうミばたなり(海端)

ミつけ方半道

●高はま

▲ちうじき 小休所 やどや多し

きれいな

(二一八―左)

●此高はま方わかさの御城下小ばままで(小浜)

入りうみ五りのあいだ 出ふねがあるけれ(入海)
(出船)

共 是はしかしうみがあら(海)
(荒い) 心心まかせ(信心)
(任せ)

にいたすべし

尚又少しあら(乗る)いけれども 此所方のる人も

あり

扱また此所の人ハ ぶじばま(富士浜力)と申もので

おりおり(折々) 半てん(半纏)をちやくして(着)かせぐ(袷)なり


道ハよし

尚又是方しばらくあゆむト

▲いわがミ(岩神) ●こくぞぼさ(虚空藏菩薩)つト申て 大き

ないわがある(岩) 夫を小供がかなづち(金鎚)でかじ

りとりにして

かたち  此くらいにいたして 子供

が大ぜい(大勢)してめいめい(銘々)に 一もんじや(一文)

かわんせ(買わんせ)かわんせト申てやかましく申

(二一九―右)

是を見れば四畳半もある どの内ら(堂)に大

きないわがある 夫がおんじやく(温石)のいし(石)な

り 夫を子供がより(密)て どのうしろ方

下をバほりぬきて(掘り抜きて)

ではいりをいたして そのいしをバかなづ(出入り)

ちでかぢりとりニいたして一文(子)つ(完)つでうる

なり

▲是ハづつ(頭痛)うのいたす(災)おり ひで

ぬくめていたむ所へあてるなり 又(温め)
(痛む)

はらいたのせつ(節)ハぬくめて きれ(布)てつ(包み)つミ

てあてるト(治る)なをるト子供が申候

見ればそのどのま(前)へ(門)ハくわんぬき(完)があ

りて じやう(錠)がある そのうしろへ(地べた)まいり

て見れば ではいりに(地べた)じべた(地べた)が(地べた)大き(地べた)にほり

である その所方子供がてはいりをいたす

なり そのかたち

(二一九―左)

史料三『順礼若狭ヨリ道案内』

文化八年(一八一二)

若狭小濱より道

一 おにう(遠敷) ひかさへ一り 東市場

大小路(平野) ひらの

一 ひかさ(日笠) 熊川へ二り半 天徳寺村

いの口村(井口) みやけ(三宅) かりや村(仮屋)

一 くま川(熊川) ほう坂へ一り半

町の入口ト中ほどニ宿屋有(程)

出口ニ御番所有女改め

一大杉村

若狭近江国境

山中村 くま川より三り

此間御番所女関所

一方坂(保坂) 今津へ三り

村はずれニ楯石有 右へ竹生京道 左り

今津道 石田川水出れば川の下ニはし有(橋)

追分(福生) ゆい(弘部) 広部 古津 勢外山有

一今津 竹生嶋へ三り

宿や有ちくふ嶋への舟 又は宿とも自由(竹生島)

なり 湖より乗つて竹生嶋へ上り

舟上り

一竹生嶋

史料四『西国順礼略打道中記』

文政三年(一八二〇)

右ノ方

・ たんご(丹後)

・ まつ(松)

・ 上りたんご

・ 国ざかいの是をみれば

・ ゑの木(榎)

・ わかさ(若狭) 左方

・ 下り若さ

(一一八―右)

此国ざかい方次ニ

道わるし

●小休所 ・ 一けんあり(軒) やどハなし(宿)

史料二『西国順禮路用』寛政十一年（一七九九）

馬つ（角）の 三本竹 天狗（爪）のつめ 式本竹

是迄小濱領出口ニ御番所女人改 □□□

鏡式めん□政宗つるぎ式本 人形の□□

夫より少山坂へかかり近江分 是方三十六

十四日 市場（松尾）より松の尾迄式里

青井村神女山其外いわく有 八百尼□丈柏

丁 山中村迄壱り在家有之 夫方又保坂村

式十九番松の尾寺御札納め

子尊橋（高懸）の長者 わかさ（若狭）えち（越前）ぜん（越前）兩國七拾式

へ壱里 在家有之出口ニ御番所有之 夫よ

此丹後若州分り 是より五十丁壱り

万石 はだ（秦道満）のどうまん

り山おり口ニ追分ヶ村在家有 八丁程道出

・高濱迄式里 本郷迄式里

人皇四十式代 文武天皇

□迄保坂方壱り

・若州御領

十八歳の御すかた八百歳迄 天子七代之間

うみ（金見）村在家有 夫より（蘭生）いう村 ひろ（弘部）部村在

十四日泊り 本郷（ほんかう） 山口甚左衛門

四百年程 □四百年白□白玉山□□

家有 うみ（今津）よりいま津迄式里 井口村方

木錢四十文

青井村神明宮社方おば（小浜）ま御城下 坂井

五里ト六十丁 熊川方皆山道□

米八十四文

志ゆ（修理）り様十二万石少し

十六日泊り 今津宿木綿屋清兵衛

十五日 本郷方壱り半かど坂有（加七）

夫よりお（遠敷）にうへ壱りひかさ（日笠）へ壱り

木錢四十八文

又壱り程せい坂有ふもとせい村也（勢坂） 茶屋有（勢村）

井口村方壱り余五十丁（六里）

米九十文

夫より十八丁（三里）

十五日泊り 井口村 清治良

十七日 今津より竹生嶋へ船賃七十五文

青井村八百尼古跡有 神明宮社有是二八百

木錢四十文

三十番御札納メ

姫明神社

米八十五文

八百（比丘尾）びく（像）のぞう有 其外□□宝物

十六日 井口村方熊川町江凡六十丁

妙楽寺 きさき茶や

一 おにう(遠敷) 小濱方壺り

能丁泊よし 是方熊川迄

上下社有 三上神宮寺 三里半の間(備七)

むさき道也

上宮社

一 かし谷(神谷) おにう方一り

泊茶や有

道ノ右側ニ大成石塔有

一 みやけ(三毛) かし谷方一り

一 熊川クマガウ みやけ方一り

(九八一左)

駅よし よき町 宿よし

御番所此処にて女順礼ヲ改

国所(等)なと問ふて歌(歌わせ)なとうたはせ改る事也

当国三方郡水海御方湖小濱方六里長二里(うみ三方)

其次しやくしの湖長三十丁横十四五丁御方ノ(塩坂)

田ニ山ヲ隔 其次ニひるかの湖広さしやくし(日向)

と同し

上大杉下大杉若狭近江境

一 山中 熊川方壺り

此村出口御番所有此所にてハさしたる事

なし 此間山道不用心也 若江境也

北海ト湖ト境 此道間七里アリ

一 ほう坂(保坂) 山中方半里

右ニ京道有リ

一 追分 ほう坂方一り

宿有出口 今津・かい(海津)つつ分有

(九九一右)

かう津(古津)へ行は熊の山とて不残野也 是方

伊吹山見ゆる 舟ニ乘にハかう津方ハ今

津よし 今津方乗へし

うミ村(生見) ゆむら(備生村)

上廣見(弘部) 下廣見

一 今津 追分方壺り

此所湖ミツウミへ岸へ凡卅丁有 泊よし 是方

竹生島へ乗てよし 此舟にて直ニ長命へ

も行也

(九九一左)

日和ならぬ時ハ舟の内ニ逗留す日和な

れハ長命寺迄一日ハかからぬ也 舟賃

老艘二人(組)クミにて長命寺迄十一匁位

乗合老人老奴也

一 竹生嶋 今津方海上三り

(二〇〇一右)

史料一『西廻記』

享保年間(一七一六〜一七三五)

千軒(ほど)ほと有

ミ有 是を永井の橋と云 或ハゴ石の浜と云
(所在不明)
御はき原村

一松(松尾)の尾 尾村方半り

一和田村 高濱方半り
和田と本郷の間一里の間入海有 東山(大見)いぬミ
山といふ島のごとし西の方一筋の道有て陸に

一かど村(加斗) 本郷方一り
かど坂小也 瀬坂(勢坂)小也

タンコ若狭ノサカイ也(丹後)

山といふ島のごとし西の方一筋の道有て陸に

谷口村 茶や有 八百姫社大也

廿九 若州松尾寺 宗太夫縁(縁起)き子細有可尋

続佳滄也

一小濱 かど村方一り

麓元方十八丁坂上ル 寺僧坊一つ有 三条に

(九七一左)

(九八一右)

も民家有 此辺雪深し 観音堂前二七尺斗石

とうろ(燈籠)う有 直(埋もれて)にうすもれて不見事有

此村出て左は入海也 茶よし

酒井修理殿十二万石也

本堂札所方右へ行ぬける也

此入海之内を小濱へ舟も有也 乗てよし

城下也 泊よし

浜部(浜辺)に下りて三ツまと浦 是方越前三崎有(備)

小濱前に大海の間少返るよし いかう

西南三丁斗高キ所社有 熊ノ山と云 本社

一高野村 松の尾半り

西神村 小杉村

ハ神明 少西方に縁行者(巻)どう有 脇右に八

一三ツます(三松) 高野方半り

一本郷村 和田方一り半

百(比丘尼)びくに(像)ノぞう有 奥院(巻)若や有 白椿山

宿よし海辺也

泊よし 尾の内村

と云 後のせ山是なり 常光寺 空院寺

一高濱村 三ツます方半り

昔は若狭之府也 此南若宮といふ所有 是方

堂ノ側二岩や有 中二八百びくにの石碑有

宿よし茶屋有

小濱へハ浜部を行 此間磯部(磯辺)に小キ丸石の

ゆの川 茶や有

史料翻刻「若狭を通過する道中記・順礼旅日記等」

【凡例】

- 一、以下の道中記・順礼旅日記等の史料のうち、若狭を通過する箇所を本書に収録した。
 - 史料一 『西廻記』（舞鶴市糸井文庫所蔵）
 - 史料二 『西国順禮路用』（岡山県立記録資料館所蔵）
 - 史料三 『順礼若狭ヨリ道案内』（福井県文書館所蔵）
 - 史料四 『西国順礼略打道中記』（舞鶴市糸井文庫所蔵）
 - 史料五 『西国順礼道中記』（香川県立文書館所蔵）
- 二、表記は原則として常用漢字を用い、常用漢字がないものは正字を用いた。ただし、合字（ㄉ、ㄊ）や一部の仮名（而、江、之、斗、与など）はそのまます使用し、人名などは例外として旧字・異体字を使用している場合がある。
- 三、文字の判読ができない場合、字数が明らかかなものは□で表し、字数が明らかでないものは「」で表した。
- 四、体裁（改行など文字配列）はなるべく原文に従ったが、読みやすさを優先している。平出・闕字は省略した。ただし、助詞等の小さい文字はポイントを下げずに表記した。
- 五、史料一・四は、舞鶴市糸井文庫資料閲覧システムの画像で閲覧した場合、史料の見開き画像の表示に対して頁で表記されることから、翻刻は頁標記に準じた。なお、頁数は当該頁の文章末尾下に付している。なお、舞鶴市糸井文庫資料閲覧システムで『西国順礼打道中記』を検索する場合、「西国順礼略打道中記」という文言では検索できないので注意されたい（「西国」「西国巡礼略打道中記」という用語での検索が便利である）。
- 六、原文にふりがな等のある場合は括弧なしで、翻刻に際し地名の漢字表記や（ママ）・（カ）等の注釈を加えた場合は括弧つきで記した。
- 七、抹消字・修正箇所については特に注記せず、修正後の文字のみを翻刻した。
- 八、句読点は付けていない。
- 九、「ㄱ」は原則として「同」と表記した。
- 十、翻刻にあたったのは谷川陽子、西野律子、松葉竜司であり、校訂は小室智子氏の手を煩わせた。なお、『西国順礼略打道中記』の翻刻は小室智子氏にお願いし、先行研究等で翻刻されている箇所（本書八四頁、青柳二〇〇五・二〇一五、杉江・八杉二〇〇三）を参照しつつ、凡例に従い本書に収録した。

図表・写真出典

問題提起「若狭の道、旅、道標」

- 図 1 松葉作成(元図はカシミール 3D で作成)
- 図 2 松葉作成
- 図 3 松葉作成 (図に使用した写真は松葉撮影)

フォーラム I 「若狭の交通と地域性」

- 図 1 福井県『福井県史』通史編 3 近世「第四章 都市と交通の発達 第三節 街道と宿駅 二 若狭街道と西近江路」図 24 若狭の街道 1994 を一部加筆
- 図 2 国立公文書館デジタルアーカイブ 天保国絵図 若狭国
- 図 3 国立公文書館デジタルアーカイブ 天保国絵図 若狭国
- 図 4 岡山大学池田家文庫 絵図公開データベースシステム 国絵図 T1 T1-64 若狭国絵図 (岡山大学附属図書館画像提供)
- 図 5 佐賀県立図書館データベース 古地図・絵図データベース 全 0002 日本之図
- 図 6 国立国会図書館デジタルコレクション 日本図
- 図 7 国立国会図書館デジタルコレクション 『拾芥抄』四 日本図
- 図 8・9 国土地理院発行 1/200,000 地勢図を元に門井作成
- 図 10 国土地理院発行 1/25,000 地形図「小浜」を元に松葉作成
- 図 11 国立公文書館デジタルアーカイブ 天保国絵図 若狭国
- 表 1・2 門井作成
- 資料 1 門井作成

フォーラム II 「旅の記録にみる江戸時代の若狭」

- 図 1 福井県『福井県史』通史編 3 近世「第四章 都市と交通の発達 第三節 街道と宿駅 二 若狭街道と西近江路」図 24 若狭の街道 1994
- 図 2 滋賀県立図書館 近江デジタル歴史街道『近江名所図会』巻之二 三井寺女人詣
- 図 3 近世日本山岳関係データベース 富士山北口女人登山之圖 (万延元年庚申六十一年目に當り) (信州大学附属図書館画像提供)
- 図 4・9 舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム mai31_16 『わかさの記』(舞鶴市糸井文庫所蔵)
- 図 5 舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム mai31_39 『西国三十三所道しるへ』(舞鶴市糸井文庫所蔵)
- 図 6・10 舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム mai31_15 『西国順礼略打道中記』(舞鶴市糸井文庫所蔵)
- 図 7 奈良大学図書館所蔵本『西國三十三所名所圖會』巻三 修験の峰入り
- 図 8 小浜市教育委員会『若狭小浜城跡Ⅱ ー公共下水道工事に伴う発掘調査報告書ー』「第 2 章 小浜城の変遷 第 2 節 小浜城跡の概要」第 10 図 江戸後期小浜城図 1992
- 図 11 高橋賢一『大名家の家紋』「酒井家ー雅楽助系」小浜酒井家紋 1974 秋田書店
- 写真 1・3・5 松葉撮影
- 写真 2・4 青柳撮影
- 史料 1~6 青柳作成

フォーラムⅢ「道しるべや道中記にみる若狭路」

- 図1 舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム mai31_43『西国順礼絵図』（舞鶴市糸井文庫所蔵）
図2～5 安田重晴氏作成（舞鶴市郷土資料館提供）
図6・7 国土地理院発行 1/50,000 地形図「舞鶴」「小浜」「熊川」を元に松葉作成
図8・10・11 舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム mai31_15『西国順礼略打道中記』（舞鶴市糸井文庫所蔵）
図9 小浜市『小浜市史』通史編 上巻「第三章 近世 第三節 湊と商業」
図87 小浜町絵図 1992 小浜市史編纂委員会編
表1～3 小室作成
写真1～3・13 小室撮影
写真4～12 松葉撮影

フォーラムⅣ「若狭と近江をつなぐ道」

- 図1 今津町『今津町史』第二巻 近世「第三章 九里半街道と今津浦 第一節 交通の要衝今津」
図21 今津浦をとりまく街道図 1999 今津町史編纂委員会編
図2 今津町『今津町史』第二巻 近世「第三章 九里半街道と今津浦 第一節 交通の要衝今津」
図20 琵琶湖の諸浦 1999 今津町史編纂委員会編
写真1～18・20 高島市教育委員会提供
写真19 松葉撮影
史料1～3 山本作成

座談「近世若狭の交通と往来 ～道、旅、道標～」

- 図1 舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム mai31_43『西国順礼道中絵図』（舞鶴市糸井文庫所蔵）
表1 松葉作成
写真1・2 松葉撮影

資料「嶺南地方における道標一覧」

- 表1 松葉作成
図1 大日本帝国陸地測量部発行 1/50,000 地形圖（旧版地図、明治26年測圖）「今庄」「敦賀」「丹生」
「西津村」を元に松葉作成
図2 大日本帝国陸地測量部発行 1/50,000 地形圖（旧版地図、明治26年測圖）「西津村」「熊川村」を元に
松葉作成
図3 大日本帝国陸地測量部発行 1/50,000 地形圖（旧版地図、明治26年測圖）「西津村」「熊川村」「小濱町」
「鋸崎」「舞鶴町」「由良」を元に松葉作成

史料翻刻「若狭を通過する道中記・順礼旅日記等」

- 図1～4 舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム mai31_15『西国順礼略打道中記』（舞鶴市糸井文庫所蔵）
史料1 舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム mai31_13『西廻記』（舞鶴市糸井文庫所蔵）

- 史料2 『西国順禮路用』（岡山県立記録資料館所蔵）
史料3 『順礼若狭ヨリ道案内』（福井県文書館所蔵）
史料4 舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム mai31_15 『西国順礼略打道中記』（舞鶴市糸井文庫所蔵）
史料5 『西国順礼道中記』（香川県立文書館所蔵）

- ※ パネリスト顔写真・歴史フォーラム等の風景写真は美浜町教育委員会撮影写真を使用した。
※ 図表・写真の収録にあたっては、出典図表、史料、写真等の内容・縮尺等を適宜改変の上、使用した。

パネリスト（著者）略歴



小室 智子（こむろ ともこ） 1956（昭和 31）年生まれ、京都府出身

<経歴> 1978年 広島大学文学部史学科国史学専攻卒業
2001年 舞鶴市郷土資料館臨時職員
2007年 舞鶴市教育委員会社会教育指導員
2017年 舞鶴市郷土資料館学芸員

<著書> 2016年「舞鶴市郷土資料館・舞鶴市西図書館所蔵古地図（上杉和央准教授・神村和輝氏と共著）」
京都府立大学文化遺産叢書第 11 集『舞鶴の文化遺産と活用』 京都府立大学文学部
2017年「舞鶴湾から若狭湾・日本海へ 一幕末・明治期の廻船関連文書」
京都府立大学文化遺産叢書第 12 集『「丹後の海」の歴史と文化』 京都府立大学文学部
2018年「安田重晴氏「近隣府県西国街道道しるべ」京都府立大学文化遺産叢書第 14 集
『舞鶴・京丹後地域の文化遺産』 京都府立大学文学部 ほか



青柳 周一（あおやぎ しゅういち） 1970（昭和 45）年生まれ、東京都出身

<経歴> 1993年 東北大学文学部史学科卒業
1999年 東北大学大学院文学研究科博士課程修了
2001年 滋賀大学経済学部講師
2011年 滋賀大学経済学部教授

<著書> 2002年『富嶽旅百景—観光地域史の試み』 角川書店
2015年「神社参詣と「神社の名所化」—中世後期から近世へ—
『シリーズ日本人と宗教 近世から近代へ4 勸進・参詣・祝祭』 島菌進他編 春秋社
2018年「全国に広がる商い—近江商人を事例として—」『歴史評論』813号 歴史科学協議会
2018年「近世における名所の成立—近江国湖南地域の事例から—」『生活と文化の歴史学 10
旅と移動—人流と物流の諸相—』 木村茂光・湯浅治久編 竹林舎 ほか



山本 晃子（やまもと あきこ） 1970（昭和 45）年生まれ、滋賀県出身

<経歴> 1995年 仏教大学大学院文学研究科修士課程修了
1998年 滋賀県今津町教育委員会
2005年 滋賀県高島市教育委員会（現在に至る）

<著書> 1999～2003年『今津町史』第一巻～第四巻（分担執筆） 今津町
2007年『近江の峠道—その歴史と文化—』（共著） サンライズ出版 ほか



門井 直哉（かどい なおや） 1971（昭和 46）年生まれ、千葉県出身

<経歴> 2000年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了、2000年 福井大学教育地域科学部助教授
2007年 福井大学教育地域科学部准教授
2016年 福井大学教育学部教授

<著書> 2012年「古代日本における畿内の変容過程—四至畿内から四国畿内へ—」『歴史地理学』54-5
2016年「文学にみる七・八世紀の交通—『万葉集』『日本霊異記』より—
『日本古代の交通・交流・情報』2 吉川弘文館
2017年「古代日本の空間意識に関する覚書『日本的時空観の形成』 思文閣出版
2018年「「とことろ富士」の誕生」『景観史と歴史地理学』 吉川弘文館
2018年「「寛永十年日本図」に関する若干の考察—越前国の描写について—」
自然と社会 84 福井県地理学会 ほか



松葉 竜司（まつば たつし） 1973（昭和 48）年生まれ、岐阜県出身

<経歴> 1997年 奈良大学文学部文化財学科卒業
1998年 美浜町教育委員会

<著書> 2013年「若狭湾沿岸地域における土器製塩と塩の流通」
『第 16 回古代官衙・集落研究会報告書塩の生産・流通と官衙・集落』 奈良文化財研究所
2015年「若狭国遠敷郡における律令期の瓦生産」『館報 平成 25 年度』 福井県立若狭歴史民俗資料館
2015年「若狭湾沿岸の土器製塩と地域社会」
『丹後国遷政 歴史連談 塩・鉄、丹後国「国産品」の生産と流通』 与謝野町教育委員会
2017年『興道寺廃寺発掘調査報告書』 美浜町教育委員会
2019年「古代若狭における寺院造営の様相—興道寺廃寺を中心に—」
『古代寺院史の研究』 菱田哲郎・吉川真司編 思文閣出版 ほか

表紙使用画像
舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システムmai29_43-002
『西国順礼絵図』（舞鶴市糸井文庫所蔵）

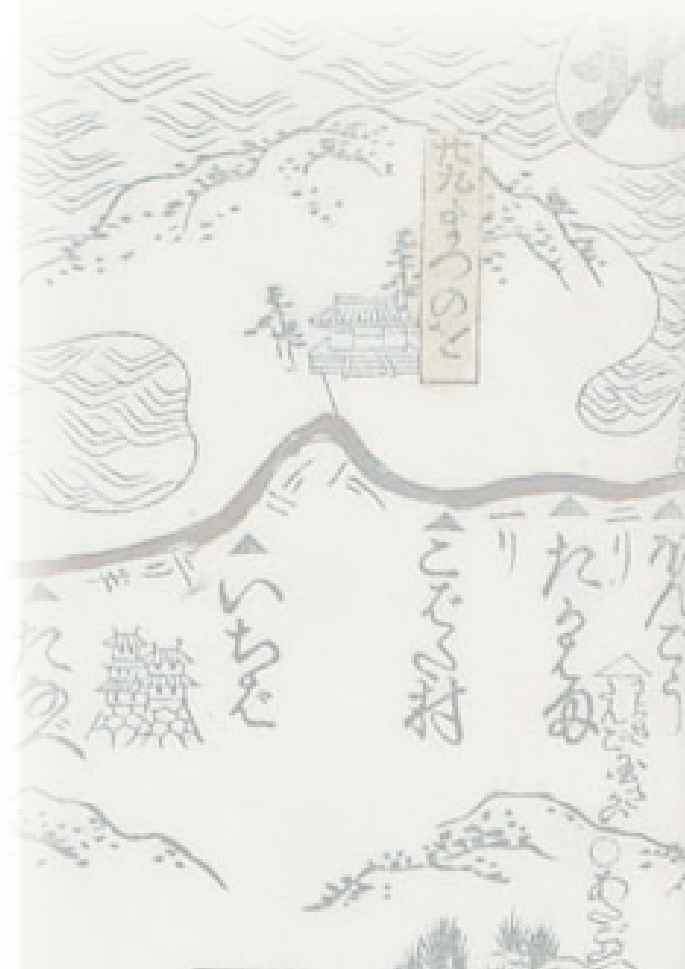
表紙イラスト 谷川陽子氏

美浜町歴史シンポジウム記録集14

近世若狭の交通と往来
～道、旅、道標～

2020年（令和2年）3月17日発行

発行 美浜町教育委員会
福井県三方郡美浜町郷市25-25
印刷 若越印刷株式会社美浜営業所
福井県三方郡美浜町金山19-7-1



この電子書籍は、2020年3月17日、美浜町教育委員会が発行した『美浜町歴史シンポジウム記録集 14 近世若狭の交通と往来 ～道、旅、道標～』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとしています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：美浜町歴史シンポジウム記録集 14 近世若狭の交通と往来 ～道、旅、道標～

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市 8 号 8 番地（美浜町歴史文化館）

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和 4 年(2022) 3 月 1 日